とある魔術の留年生（仮）

ブッシュ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神の右席、レベル５、アレイスター、魔神

そんなもんを遥かに凌ぐ強敵「留年」が上条当麻を容赦なく襲う

このいかんともしがたい現実からダメダメ学生を救う蜘蛛の糸にすがる時、物語は動き出す

（注意）

・原作作中で死んだはずのキャラを出す可能性があります。

・オリキャラが出てきます。

目次

始まりの電話 1
先輩たち（仮）そのいち 4
先輩たち（仮）そのに 7
いつもと同じどこか違う朝 10
星に願いを 14
美味い話のネタばらし　そのいち 18
美味い話のネタばらし　そのに 21
先生だからなのです 27
時にはラブコメでも転がして 33
ファーストコンタクト　そのいち 37
ファーストコンタクト　そのに 42
焼肉　そのいち 46
焼肉　そのに 50
ふたりぼっち　そのいち 54
ふたりぼっち　そのに 58
ふたりぼっち　そのさん 62
ふたりぼっち　そのよん 67
ふたりぼっち　その後 71
スウィートホームに帰ろう！ 77
幸せなら荷を解こう　そのいち 81
幸せなら荷を解こう　その荷 86
つまらないものですが　そのいち 92
つまらないものですが　そのに 96
つまらないものですが　そのさん 100

つまらないものですが　そのよん　104
ガールズミーツガールズ　111
決意　116
サバカレーをもう一度　その1　121
サバカレーをもう一度　その2　126
サバカレーをもう一度　その3　131
サバカレーをもう一度　その4　136

始まりの電話

世界の動乱は去り3月、平穏な学園都市のとある学校のとある職員室にて

「上条ちゃんは馬鹿だから留年確定です。」

ツンツン頭の少年にピンクの頭髪で見た目小学生の恩師が伝えたその言葉には、冗談も侮蔑も憐みも含まれておらずそれが事の深刻さと信憑性を何よりも証明していた。

「小萌先生ちょっと待ってください！俺が何やったって言うんですか！」

ツンツン頭の少年…上条当麻は恩師月詠小萌に無駄な抵抗だと思いつつ最後の徹底抗戦をしようとした矢先

「何もしてないのが問題なんですよ…上条ちゃん。」

一分一厘反論の余地がない言葉がお馬鹿な不良高校生に直撃した。

そう。上条当麻の出席日数は学園都市のお偉いさんと超ハイテクスパコンがなたんぱくと電子で出来た優秀な頭脳をフル回転させて決めた進級に必要なそれを大きく下回っていた

「先生も色々手を尽くしては見たんですが……本当に申し訳ないです！」

「先生は…先生は…」

努めて平静を保とうとした月詠の涙腺は自分の言葉と自己嫌悪によって決壊し、目尻には大粒の涙があふれ出していた。

「ああ……小萌先生が泣くような事じゃないですから！というか上条さんは小萌先生ともう一年余計に一緒にこの学校通えると思うとウキウキですよ！ウキウキ！ほら見て先生！ウキウキ！」

だったら先ほどの抗議はなんだったのだ？という馬鹿の言行不一致はさておき泣いた烏はもう笑った。

熱血教師は不出来な教え子のエールの前ではいつでも無敵なのだ。

「グスッ……上条ちゃんはほんと馬鹿ですね。自分が一番大変なのにこんな時まで泣いてる女の子を放っておけないんですか？ほんと馬鹿です……」

「先生は女の子って歳じゃ…」
「上条ちゃんはほんと馬鹿ですっ！」
上条当麻はそれを見て独りごちる
「まったく泣きやんだと思ったら何怒ってんですか…はぁ不幸だ」
世界の難題を悉く拳で解決した馬鹿には、女心の色変わりを読み解くのは四色定理よりなお難しく複雑を極めるのだった。
それを傍目で見ていた色気がない残念美人巨乳ジャージ教師曰く
「やっぱ小萌先生とこの生徒は…馬鹿で面白いじゃん」
眼鏡をかけてお化粧をばっちり決めた美人教師曰く
「泣いても化粧が落ちてない…」

そんなお馬鹿なやり取りを一通り転がして落ち着きを取り戻した月詠は告げる
「すいません上条ちゃん、教師である私が取り乱してちゃダメですよね。ここは上条ちゃんじゃないですけどポジティブに考えましょう。」
「一年余剰に学習できるって事は決して悪い事ばかりじゃありません。昨今の学園都市は能力開発に重きを置き過ぎ。ともすれば座学や各分野の基礎知識を軽視しがちですっ。この際先生と一緒にみっちりお勉強しちゃいましょうね！」
月詠は上条をそして誰よりも自分を納得させるようにまくしたてはじめた。
「うおおお！そうなってくるとこれは新しいカリキュラムとタイムスケジュールを作らなきゃいけませんね！分かってます上条ちゃん！学習スピードに付いてこれるかどうか心配なんですよね！だったら放課後も先生と自宅学習しましょうそうしましょう！いやいや上条ちゃん気にしないでください先生は生徒の為なら平気ですから！そこで間違いが起こってもそれはきっと正しい事なんですよ！」
度を越えた熱量と狂気を帯びていく教師の熱情あるいは劣情を「不幸だ…」の一言で言い表すのは忍びなく、口をつぐんでいた上条当麻。
その異様な空間を現実に引き戻す電子音が鳴り響く。

「ＰＲＲＲＲ・・・・」
今時珍しい職員室備え付けの固定電話の受話器を取り月詠は玲瓏な声で対応する
「はい、月詠です…ハイ…ハイ…そうですか…はい分かりました。それでは失礼します。」
月詠は受話器を置きこちらに向き直り一言上条当麻に告げる
「上条ちゃん馬鹿だけど留年（仮）です！」

先輩たち（仮）そのいち

「で、留年したというわけなのね。上条当麻」
黒髪巨乳で広めのおでこ、１年７組の良心にして三馬鹿の調教師、吹寄制理はお怒りであった。
「だから日頃から言ってたじゃない!!真面目に勉強しろ！ちゃんと授業に顔出せ！学校行事にも気を抜くなって！」
「待ってくださいよ吹寄さん聞いてくださいってば！話せばわかる！」
「なんで貴様はこの段になってもそんなふざけられるのよ上条当麻！分かってるの？留年よ！留年！あんただけ一年遅れて卒業なのよ？」
「まあ確かにそりゃ留年っていったらそうなんですけどね…なんというかごめんなさい」
事の顛末はこうだ。月詠教諭との職員室での話し合いを伝え新年度からの自分の処遇についてせめてクラスメイトでことさら仲の良かった吹寄、姫神に先んじて伝えたところ話の半ばにして吹寄が上記のように怒り出したのだ。
ちなみにアロハグラサン陰陽師と似非関西弁の青紙ピアスはメイドの始まりはどの国か？を巡って早退しているようだ。
「ゴメンってなによ？意味が分からないわ！なんで貴様いつもそうなのよ！」

上条は不思議だった。この少女は何をこんなに怒っているのだろう？
だって上条は吹寄にとってクラスメイトであると同時にクラスの調和を乱す不良分子であったはずだったのだ。
吹寄はいつも言っていたじゃないか不真面目な奴は嫌いだ。努力しない奴は嫌いだ。自分で自分を不幸なんて言う奴は大嫌いだ。と
その疑問は上条当麻のシナプスを駆け巡り言の葉に変えた
「あのですね吹寄さん、なにをそんなに怒ってるのでせう？」

「はあ？」
「そもそもですよ？吹寄が俺の進級についてそんなムキになって怒ったり怒鳴ったりってのはしなくてくてもいいんじゃないか？いやいや上条さん的には気にかけてくれるの非常に嬉しいんでけども、はい。それでも俺がいなくなってもそれはそれで吹寄的には願ったりかなったりじゃないか？」
　これはかつて北欧の魔神との争いの際にもシスターズの意思の総意にしてミサカネットーワークの擬人体…総体にも指摘されていたことだが、上条当麻は自身の価値をを必要以上に軽んじる。
　だからこそ他人が自分を心配するというケースに対して疑問を持ち、狼狽える。
　そのことが誰かの想いを軽んじることにつながるとは知らずに…
「上条、貴様何を…」
　パチン‼
　吹寄が二の句を継ぐ前に軽い破裂音と共に上条の頬にわずかな痛みと熱だけが残った
「上条君。それはダメ」
　上条当麻の頬を張ったのは姫神秋沙
　美しい黒髪と日本的な美しい容姿を備えた能力『吸血殺し』の少女であった
　彼女の目は誰かに確かな暴力を振るった事への後ろめたさとそれでも友人の想いを守ろうという意気が込められたまなざしを上条当麻に送っていた
「駄目だよ。上条君」
「姫神さんあの私は…」
「駄目だよ。上条君には一度ちゃんと言わなきゃわからない」
「上条君。私は君の謙虚なとこ。大好きだよ。でも。それが吹寄さんを傷つけるようなら。私は何度もでも君を怒らなきゃいけない」
「姫神さん…」
　ああ。と一息ついて吹寄も姫神の言葉を繋ぐ
「上条！私は貴様がいたら迷惑だなんて思ってない。大覇星祭の時も

言ったでしょ？私はみんなと一緒に喜んで涙してこの学校を卒業したい！もちろんその中には貴様にもその中いて欲しい！うぅん、いてくれなきゃ嫌なの！」
「うん。私も。だからもう一回小萌にみんなでお願いしに行こ。大丈夫。小萌ならきっと…」
「うんそうしましょう！今から私もクラスの連中集めて…」
顔を真っ赤にしながらも想いを伝え、美しい友情を確かめ合う二人を見ながら上条当麻は言いにくそうに切り出す
「だからですねお嬢様方！なんで上条さんが一年生に残留って話になってるんですか？しっかり話を聞けって言ってんだろ！」
「「はい？」」
「上条さんは留年じゃなくて留年（仮）なんですよお‼」
「「はいいいいいいいいいい????」」

先輩たち（仮）そのに

「って事はなに？ほんとうの留年じゃなくて２年生のカリキュラムをこなしながら月の内何度か新入生クラスで授業を受ければ上条は普通に進級扱いなわけなの？だから（仮）？」
　話を聞いてる間ずっと腕を組み、豊満すぎる胸部をさらに強調する吹寄に視線を泳がせながら一年生周回プレイ野郎はしどろもどろになりながら答える
「ああうん…その授業受けるクラスが「特別」だとか「問題」だとか小萌先生も言ってたけど…概ねその認識であってると思うぞ。」
「上条君。女の子相手に。その視線の動きは逆に不自然すぎる」
「上条、人と喋る時は相手の目を見てキチンと喋りなさい。」
「そんな！こっちとら無垢な高校生男子に無茶言わないで頂けますかねお姫様たち。そんなのどうしても意識しちゃうっての」
　自身の進級の是非よりおっぱいが気になってしまう世界を救った英雄もとい上条当麻は救えない自己弁護をごにょごにょと呟いていた。
「ふふふふふふふふＣカップ。凡庸」
「やめて！姫神！そういうの男子の前でやめて！こっちとら意識から消そう消そうと必死で心を無にしようとしてんの！頭の中が諸行無常の大乗仏教でガンダーラなのよって…むぐっ！」
「上条はだから人の話聞きなさいよ！」

　吹寄制理はなおはしゃぐ馬鹿の頭をむんずと捕まえヘッドロック
　頬に胸が当たってもう上条の頭の中は天竺からありがたいお経を根こそぎ持ち出してきても悟れないことになっていたが
　とはいえだ、今はこんな馬鹿な事よりやることがある
「上条の相手してるといつも調子狂わされるわね…進級おめでとう…ほんとおめでとう」
「うん。めでたしめでたし」
　頭を拘束されていて吹寄・姫神の顔は見えないがきっとその顔は満

面の笑顔に違いない。
だって上条当麻の耳に届いたその声は普段聞く彼女たちの声よりもずっとずっと弾んでいたんだから。
そしてようやく拘束が解かれて、上条は二人に向き直りそうしてこう言った
「心配させて悪かったな。そしてありがとうな二人とも」
「なによ改まって…そんなのいいわよ、馬鹿」
「うん。どういたしまして」
鈍感な馬鹿が慣れないことをすると周りも気恥ずかしくなってくるもんで
というかさっきまでの告白染みた言葉まで気恥ずかしくなってきて
それをかき消すかのように吹寄と姫神も慣れない馬鹿な事を言ってみる
「というかあれよね上条が留年（仮）なら私たちは先輩（仮）よね！」
「うんそうだね。上条君。先輩命令。あんパンと牛乳買ってきて。ダッシュで」
「そうだそうだ上条！先輩の命令は絶対だ！能力向上パン買ってきなさい」
「へいへい分かりましたよ…ったくよ、とんだ体育会系の先輩だぜ。まあパシリ8段の上条さんに任せなさい」
２人はわざとらしいまでの手振りで冗談めかして上条を追っ払う
そして上条が教室を出ていって完全に見えなくなったところで、二人の黒髪の美少女はどちらともなくこう口にした
「本当に良かった…」と
その夜、何の名目ともわからぬ焼肉パーティーが月詠宅で1年7組の有志と純白のシスターを交え遅くまで行われた。余談ではあるが上条当麻は純白のシスターに留年（仮）がバレて無茶苦茶噛まれた。
めでたしめでたし
と、締めくくりたいとこではあるが上条と二人の少女は喜びのあまり失念していたのであろうか？

上条当麻は不幸な少年であり特別待遇、千載一遇の好機などというものとは無縁であることを。
いや既に上条自身が既に不穏当なワードを口にしていることを。
上条当麻と特別で問題のある新入生が交差するとき、物語は始まる‼

冷たく暗い某拘置所一室にて学園都市最強にして現統括理事長は苦々しい顔で舌打ちをし
いくつかの身分証明と経歴を書き込まれた書類群と数枚の人物を写した写真を眺めこう呟いた
「また世話ンなるぞ…ヒーロー」

いつもと同じどこか違う朝

四月。科学の都にして象牙の塔である学園都市にも春の息吹が感じられるようになった爽やかな朝、上条当麻はいつものようにバスルームの固いタイルの上で目を覚ました。

まだ覚醒しきらぬ頭と身体を無理やり起こしリビングに向かうと、そこにはいつもと違う光景が広がっていた。

「おはようなんだよ、とうま！ほらほらはやく身支度整えて。すぐに朝ご飯作っちゃうんだよ」

「あのインデックスさん？どうしちまったっていうんですか？」

上条当麻の聖域と化していた台所に陣取ってあわただしく動き回ってる白い少女。いや今はいつものように純白な布地と豪奢な金の刺繍をほどこされた修道服…歩く教会を身に付けず、上条当麻がいつかどこかでインデックスに買い与えた着丈のちょっと合わないシャツとショーパンを着て、白金のように美しい長髪も邪魔とばかりに乱雑に後ろに括っている。

「どうしたもこうしたもないんだよ、ほらほら顔でも洗ってくればいいかも」

追い立てられるように台所から踵を返し、風呂場の洗面所に向かった上条当麻であったが鏡の前で茫然と立ち尽くしていた。

なにせあの二度寝とアニメと食事をこよなく愛するインデックスが、あろうことか台所で朝ご飯を作っていたのだ。

我が目が映したのは夢か現かあるいは魔術師の攻撃か？と異能であれば神すら屠る力を備えた理外の力…幻想殺しの宿る自身の右手で胡蝶の夢であれ！とばかりに頬を力いっぱい捻り上げる

「痛い……やっぱあのインデックスは本物？いやいやエイプリルフールはもう終わったし」

「おい、いつまで呆けた事を言っている人間！さっさとその寝惚けた顔を洗っちまえ」

その声の主を探そうと振り返ると誰もおらず、視線を下げると足下には金髪隻眼で１５センチサイズの高性能フィギュアもとい北欧の

魔神オティヌス
　世界を統べる神である彼女はとある理由で妖精さんとなり、インデックスと同じく上条当麻の下宿の居候となった。
　そんな彼女に今朝の異常事態を伝える
「おいオティヌス！聞いてくれインデックスがおかしいんですよ！きっと魔術師の攻撃に……」
「おかしいのはお前の顔と頭だよ、わが理解者殿」
　神様らしく傲岸不遜に上条の言ってる事がおかしくてたまらないといった様子で笑うオティヌス
「禁書目録が台所で腕を奮う。それの何がおかしいっていうんだ？ん？」
「あのインデックスですよ？」
「お前は「あの」禁書目録をなんだと思ってるんだ…あれだって生物的には女性だし料理の一つくらい作るだろ」
　そりゃそうなんだが…となお未練たらしく抗弁しようとするツンツン頭に女神はなおも告げる
「全くいつまでも親離れできないガキだな、お前は…いやこの場合は子離れ出来ない父が正しいのか？」
「何言ってるんだそりゃ違うでしょうよオティヌス」
「何も違わないさ。いつまでも頼りなく保護すべき対象としてあいつを見ているから、朝っぱらこんなことで動揺するんだ」
　突拍子もない意見だったからか？はたまた自分すら自覚してない心の深奥に隠したものを智慧の女神に見抜かれたか？
　上条当麻は二の句を継げれず馬鹿みたいに口をパクパクさせて立ち尽くした。
「ひと月前にお前が留年したって聞いたときの禁書目録、それはそれは動揺していたよ。『私がとうまに迷惑ばかり掛けちゃったから！とうまがとうまが学校から追い出されちゃうんだよ！』って泣き出して、泣いたかと思えば『私がどうにかするんだよ！』って急に外に走り出そうとしてなだめるのに骨が折れたぞ。ったく、この神の説明もよく聞かずに……まったくお前らはよく似ているよ！」

「お前がアイツを大事にしたいって気持ちは分かるさ。でも禁書目録だってあの少女だって同じくらいお前を大事に思ってる。それはお前が一番理解してやるべき事なんじゃないのか？」

去年の７月２９日。白い少女と上条当麻が『初めて』出会ったとてもとても暑い夏の日。

全ての記憶を失った上条当麻がこの広い世界で孤独じゃないんだと教えてくれた日。

少女が自分ではない自分を「大好きだった」と言ってくれた日。

自分はこの少女の笑顔を守るために生きていても良いんだって誓った日。

たった一人だった自分に生まれた魂の片割れ

かけがえがなくて大事だった白い少女

だからこそ上条当麻はどこかで間違えてしまったのではないだろうか？守るという事は傷つかないように真綿で優しく包み続けることではないという簡単な事を

「俺さ…あいつを…インデックスを守りたいって気持ちは本当だった本当のつもりだったんだ…でもさ違うんだよなそれじゃ駄目なんだよなオティヌス」

「お前の想いはこの神が保証してやるさ。ほらさっさとその不細工な顔洗ってしまえ。私は腹が減ってるんだ先にリビングにいっているぞ。」

朝からくちゃくちゃになった顔をどうにかしようと上条が洗面台に向き直ると、扉の向こうから聞こえるか聞こえないかの声が…

「進級おめでとう。理解者」

インデックスにばれない様にといつも以上に身だしなみを整え、再びリビングに向かうと既にテーブルには待ちわびたというような顔した二人と一匹が

「とうま！お洒落に気を遣うのはいいけどもうちょっと早くして欲しかったかも！私はお腹ペコペコなんだよ」
「禁書目録、こいつに早く料理を食べてもらいたいのは分かるがそんな急かすな。不細工には不細工の悩みがあるんだ。あとトーストにマーマイトはやめてもらえないか…」
「むう、オティヌスは我儘なんだよ！これなくして英国の朝ご飯は語れないかも！」
　テーブルに広がっているのはトーストとサラダと目玉焼きにスープ
　決して上手に出来たとは言えないが一生懸命作ったことが伝わってくる料理
「はあインデックスさん、ずいぶん頑張ったじゃね～か上出来上出来」
「ふふん！とうまは私を流石に嘗めすぎかも。これくらい文字通り朝飯前なんだよ！だからとうまは私をもっと頼りにするべきなんだよ」
「いやいやホント頑張ったよお前」
　ちょっと気安いかと思ったが上条はインデックスの頭を撫でる
「うわうわとうま！やめるんだよ！レディーの頭をそう簡単に触るもんじゃないかも！」
「まったくいつまでイチャついてる。さっさと食べるぞ！」
　時間は止まらず必ず流れゆく
　人と人との関係だってずっと同じなんてことはなく形を変えていくものなのだろう
「とうま、今日から二年生なんでしょ！遅刻なんかしたりせずちゃんと学校行かなきゃ駄目なんだよ」
「うげ！インデックスお前なんでそんなことまで知ってんだよ」
「あいさとこもえから聞いたんだよ。授業もちゃんと聞いて…」
「おい禁書目録！この付け合せの赤い煮豆はやめた方がいいって言っただろ」
　それでも上条は今はもうちょっとだけこの家族と一緒にいたいと思う
　それは頭じゃなくて心から

星に願いを

「くそっ、不幸だ！」
「カミやん、このクソ狭苦しい空間で大声出すのはやめるんだにゃー」
　言うまでもなく上条当麻は不幸である。
　そうでなければ２年生および留年生（仮）初日の晴れがましい日に、アロハグラサンマッチョこと陰陽師土御門元春と一緒に学生寮のおんぼろエレベーターに閉じ込められるなんてことは無いはずなんだから。
　なぜこの馬鹿二人が鋼鉄のかごにラッピングされることになったのか、時計の針を２０分ほど巻き戻してみることにしよう。
　インデックスとオティヌスそして珍奇な雄三毛猫スフィンクスに送り出される上条当麻、そして時を同じくして部屋を出る隣人、土御門元春

「おお土御門！珍しいじゃねーかこの時間に登校なんて」
「そもそも学校に行くこと自体が稀で、危うく落第しかけたカミやんにだけは言われたくないんだぜい」
「ふっふっふっ。今日の上条さんはそれぐらいの嫌味で、凹むようなやわらかハートではございませんことよ」
　なんて軽口を叩き合いながら二人は通路の突き当りに設置されているよく言えば廃墟マニア向けな逸品、見たままでいえば貞子と八尺様が四つに組んだ末に友情が芽生え、フレディーと戦う舞台になっちゃいそうなおんぼろエレベーターに乗り込む
「あ？だったらカミやんはロリを否定するっていうのかにゃー!?」
「土御門、友人として言わして貰うがスーツ姿のＯＬお姉様もロリにしろなんて、暴挙は断じて認めるわけにはいかないんだ」
「そんなことないぜい。浴衣だって着物だってナース服だって義妹ロリに着せときゃオールオーケーなんだぜい！」
「誉を失ったかロリの権化め！」
　ゴトンッ!!

二人のあまりの知性の無い会話に嫌気が差したのか、はたまた同じ趣味を持ちながら分かり合えないオタク共の愚かな戦いを止めようとしたのか真偽のほどは分からないが突然、激しく縦揺れしたかと思うとエレベータは動きを止めた
「よし小僧、戦争だ！ロリが勝つかカミやんが死ぬかの戦争だ！ってあれ？」
「ちっ！このボロエレベーター止まりやがった、えーと非常用のボタンと…」
「ダメだにゃー……そもそもそれがイカレテやがる、学生寮なのにこの緩すぎる安全意識とは自分の住んでる学生寮とはいえ恐れ入るにゃー…？」
「携帯もつながらねえぞ！」
「カミやんは聞いたことないにゃー？エレベーターっていうのは法律上、相当量の不燃材で本体を覆わなきゃいけないから、場所によっては携帯電波が全く届かなくなるんだぜい」
「不幸だー！」
かくして冒頭に繋がるわけだが騒ぎ立てる上条を余所に、土御門は落ち着き払い実家のソファーにでも寝転ぶかのように寛ぎだした
「もうこうなったらどうしようもないんだぜカミやん、幸い火災や酸欠になるような心配もないし管理人もじきに事態に気付くさ」
「そうは言うけど土御門俺もお前も学校が…」
「何言ってるんだにゃー、一日くらい休んだってなんとかなるって誰よりも知ってるのはカミやんですたい。それに下手に動いてこれ以上事態を悪化させる方が……んんん！」
弛緩しきっていた土御門の身体が弓のように弾き絞られ、口からはただ事ではない未来を予感させる声が漏れた
「どうした、土御門！大丈夫か⁉」
「いいか上条当麻、時間はそんなにない！今から要点だけ話す。質問は挟むな。そしてそれを聞いたらすぐに決断しろ！いいな⁉」
土御門の普段のおどけた口調がナリを潜め、否が応にも上条の全身に緊張が走る

「心の準備はいいか?ここ数日前から舞夏が研修で忙しくてうちに寄り付かなくてなぁ…お恥ずかしい話だが期限が切れていた保存糧食を引っ張り出して食べていたわけだが…」
聞くな、と上条は顔しかめる
これは絶対聞いてはいけない。だってこれを聞いてしまった絶対ろくでもない決断を選ばされる
「それが当たったみたいでもう括約筋が限界ぎりぎりですたい。」
「ふざけんな!土御門なんで今なんだよ!いやこれホントちょっと待ってってばー!こんなとこでそんなことされたらもう俺、お前とどんな顔して話していいか分かんねえよ。とにかくヤバいって!」
「だ・よ・な…」
上条の言葉を聞くや否や土御門はポケットから折り紙を取り出した
「黒キ色ハ水ノ象徴。其ノ暴力ヲ…」
「いやだからってこんなとこで魔術使ってんじゃねーよ!これで当たり引いたら俺どんな顔して舞夏に伝えたらいいか分かんない。」
「止めるなカミやん!もうお前は選んだんだ!ってマジで揺らさないで!出ちゃう出ちゃうんだにゃー!」

「ったく、登校初日だから可愛い後輩が一緒に行こうと誘いに家まで来てみれば、何を遊んでるんですかね」
小柄でおかっぱ頭の少女が両の人差し指を指揮棒のように振るうと同時、轟音とともに故障していたエレベーターは設計上ありえない機動を始めた。
御坂美琴であれば電子制御盤に割り込んで一時的にエレベーターを動かし上条たちを救ったに違いない。
一方通行であればもっとスマートに要所のみの破壊で上条たちを救ったに違いない。
しかしこれは力技。暴力と破壊のみを追求した能力の業。
こんな力…ここまで強力な念動能力を上条は1人しか知らない。

つまりは…
「舞殿星見！」
　そう上条が結論付けると同時にエレベーターの扉は幼児がノートを破るように容易くむしり取られ、破壊の元凶は恭しく優雅に会釈し告げる
「ご無沙汰してますね、上条当麻…ああ違う。こう言うべきでしたか、上条先輩」

美味い話のネタばらし　そのいち

「舞殿星見…どうしてここに…それにその恰好は？」
　スクラップと化したエレベーターからなんとか這い出る上条、土御門の前には上条たちの通う高校の女子用制服を着たおかっぱ髪のどこにでもいそうな少女、かつて去年のクリスマスイブに上条たちと死闘を演じたレベル４念動能力者・舞殿星見が佇んでいた。
「それはこっちの台詞ですよ、先輩。ほんとはもっと劇的な再会を予定していたのに先輩が待てど暮らせど来ないから、滞空回線で探ってみたらこんなことになっているなんて」
「ちょっと待て！一方通行の奴はお前らに滞空回線の使用権限まで与えているのかにゃー？」
「まあ検索可能範囲はクラスメイトに関する情報のみですが…同じ学び舎に通う友同士を監視し合えっていうんですかね？本当に悪趣味極まりない。というか土御門先輩や貝積の懐刀、それに学校側からは先輩へ今回の件について何も知らせてはいないんですか？」
「詳しい事は学校側も知らないし、知らない方が新鮮な驚きがあると思って俺からもカミやん何も伝えてないぜい。雲川についてはこの計画に最後まで反対してたから恐らくどこぞでむくれでもしてんじゃないかにゃー」
　最大の当事者であるはずの上条当麻は頭越しに会話されることに居心地悪さを感じ、多少無理やりにでも会話に割り込むことにした。
「舞殿、すまないんだがこっちは全く何も分からないんだ。そのあたりのことを全部端折らず俺に教えてくれないか？」
「あ、すいません先輩。でもこれ結構長くなるし時間もちょっとまずいんで歩きながら説明させて貰うって事じゃ駄目ですかね？」
　舞殿は自身の左手に巻いた洒落っ気を一切廃し、おおよそ女子高生が好むとは思えないデザインのデジタル腕時計にわずかに視線を向け、上条達にそう促した
「カミやん。申し訳ないが俺は舞殿が派手にやらかしてくれた尻拭いをしなきゃならないから、今日は休むって小萌先生に伝えて置いてほ

しいんだにゃー」
「土御門先輩は私の尻よりもまず自分のくせー尻を拭きたいんじゃないですかね？」
「土御門……おまえ」
「いやいや高校生にもなってお漏らししちゃうなんかありえないんだぜい我慢できずにしたいからしちゃうってそれじゃ俺がまるで犬みたいじゃないですかそのあたりのことはカミやんや舞殿にはきちんと分かってもらわなきゃ困るっていうか誤った情報を安易に信じて欲しくないというか…」
「いいから早く行って来いよ！」
上条の言葉を聞き終わらぬうちに土御門元春は脱兎のごとくいずこかへ駈け出した。
事の真実は闇の中、なぜなら土御門元春は裏の世界を駆け回る情報戦のプロなのだから。
「はあ、せっかくの日になんか味噌付いちゃいました、最悪。それじゃあ行きましょうか先輩」
「年頃の女の子が下ネタとかやめなさいってば」

滞空回線も届かぬ統括理事クラスが愛用する高級マンションの一室。
現在統括理事会で最大派閥となった貝積継敏のブレインを務める天才少女、雲川芹亜が保有拠点の一つ。
そしてその部屋の主は高級ソファーの上で不貞寝していた。
「おい愚姉。毎日毎日そうやって寝転がってはジャンクフード食い散らかしていい身分だな」
「ああもう何もやる気が出ないわけだけど。」
「くそ！Ｇめ！そうやって胸部の凶器を見せびらかしてからに」
身に着けているメイド服はミニスカートに蛍光カラーのコルセット、そしてウサギの形をした名札をスカートに貼り付けた職業メイド

が見たら泡吹いて失神しそうなイカれた逸品で身を装う少女、雲川鞠亜はいくら片づけても定期的に夢の島と化す姉の部屋と姉に備わる規格外のそれに苛立ちを隠せず悪態がこぼれるそれをよそに姉、雲川芹亜はまたごろりとソファーに身を沈め身を横になり、手直にあったスナック菓子の袋を壁に投げつけた。

「ああもう！統括理事会のミスをあの少年におっかぶせるなんてありえないわけだけど。暗部だのなんだのの処理は私たちの仕事なのにそれなのに……だいたいあの少年に年頃の少女たち任せたらどうなるかなんて分かりきってるだろうが！あの若白髪！」

「おいおい愚姉、怠けるだけならまだしもこれ以上この廃墟の環境悪化を促すだけなら余所に行ってくれないだろうか？」

当代きっての天才、心理分析のエキスパートたる少女といえども自身の恋の悩みはままならず…さりとて優秀すぎるその頭脳は今後の上条当麻の行く末を正確に予測していた

美味い話のネタばらし　そのに

結局あのあと学生寮でのエレベータートラブルが思っていた以上に時間食ってこのままいくと普通に遅刻してしまう、初日から遅刻とかありえません。という舞殿の至極まっとうな判断により急遽徒歩による通学を断念し、理由は分からないが異様にバス登校を抵抗する上条をスクールバスに無理やり押し込んだ。

「いやしかし、この高校に入ってスクールバスなんて初めて乗ったぜ」
「学校がわざわざ運営してる交通機関を無視するほうがどうかしてるんですよ、先輩。というかさっきの学生寮からうちの高校まで結構な距離ありますよね？毎日歩いてるんですか？先輩ひょっとして阿闍梨とか目指してるんですか？」
「あらま、いやだわこのブルジョワ思考！ちょっとここ見てごらんなさいよこのバス料金の強気設定！こんなもん毎日乗ったらねーうちの食卓からオカズが丸ごと消えちゃうイリュージョンなんだってば！そりゃクロムウェルも革命起こすってもんよ！」

上条当麻の心に巣食う大阪のおばちゃんが召喚され舞殿に喰ってかかり！バス運賃の話からワークマンシャツのコスパの良さに話題は移り今は味と値段と食後の満足感の黄金比を備えるお肉は何かについて熱弁を振るっている。
そもそも運転手がいるのにバスの運賃ぼったくりじゃねーか！と騒ぐのってどうなのよ？と辟易した舞殿は話題を変えることにした。

「それでさきほどの話に戻りますが、よろしいですか？」
「だからね！今最高にホットなのは合挽きミンチになってくるじゃない！ハンバーグにするもよし！白米に混ぜて炒めるもよし！もう調理がめんどうならコンソメスープにブチこん・・・・」
「い・い・で・す・ね!!」
「はい……」

おばちゃんには大阪天王寺にお帰りいただくことに成功した舞殿はコホンと咳払いし
上条の方に向き直り居住まいを正し語り出した。
「今日から1年特別クラスで先輩のクラスメイト兼後輩になります舞殿星見です。何卒よろしくお願いします」
「はあ？」
「それにしてもうちの高校っていまどき紺のセーラー服ですか…マニアックというかなんというか、どうですかね？似合いますかね？先輩……先輩？」

唐突に挨拶が終わったかと思うと舞殿星見は胸元の白いリボンを人差し指で弄り上条に感想を求めてくる。
先ほど会話の大脱線事故を引き起こした迷ドライバー上条当麻は、自分の事を棚に上げて会話の急速旋回を試みた。

「可愛いですよ！うん可愛い！可愛いけどもですよ！舞殿さん、ちゃんとやりましょうよ。お願いしますよ」
「ぶう！もうちょっとちゃんと褒めてくれても罰は当たらないと思いますよ。ほれほれ」
「上条さんはそんなどこぞのバカップルみたいな事はやりませんのことよ！」
「ふえっ！カップルだなんてまだそのゴニョゴニョ…」

みるみる間に小柄なおかっぱ少女は顔を紅潮させ、人差し指同士をコネコネさせだしたが、こういう時鈍感男はほんと強い。上条はそもそもの疑問を投げかける。

「お前って退院後は警備員（アンチスキル）に拘束されてその……」
「そうですね。逮捕されて略式裁判後に対能力収容施設にぶち込まれてました」

本人があまりにもあっけらかんと昨日の晩御飯の内容でも教えるように語るので、上条は呆気にとられるが気を取り直して質問を続ける。

「だとしたら何故ここにいるんだ？それもうちの制服を着て、つか舞殿星見って偽名だよな。なんて呼べばいいのよ？お前の事…」

「ああそうですよね。いやまずりましたねー。めんどくさい説明は他の誰かがやってると思って制服の感想を聞きだすシュミレーションしかしていない…」

「申し訳ないがめんどくさい部分も端折らず最初から教えてくれないか？」

「さっきも言いましたがだいぶ長くなりますし、私も実はすべてを知っているわけではないのでご期待に添えるかどうかは保証しかねます。それに面白い話じゃありませんよ？」

「それで構わない」

舞殿はフウと大きく溜め息をつき、もう一度居住まいを正して努めて明るく口を開いた。

「先輩がそうおっしゃるなら仕方ありませんね。まずは始まりの始まりから…先輩はオペレーション・手錠（ハンドカフス）はご存じですよね？今代統括理事長様が肝煎りで始めた最大の目玉公約です。」

「ああ…たしか学園都市内で超法規的活動をしていたあるいは許されていた組織、個人の拘束とそれらへの裁判のもとしかるべき処置を与えるってものだっけか？」

「ピンポーン！ご名答です、流石ですね先輩」

舞殿はクイズ番組の陽気な帽子のはてなマークみたいに人差し指を立てニカリと笑顔を作った。

「茶化すなってば……それがどうしたって言うんだ？学園都市のトッ

プである一方通行自身が率先し拘束され刑に服することで周囲に範を示し、縁故や利権を取り払って犯罪組織を裁くって計画に、なにか問題でもあったっていうのよ？」
「いいえ何も。警備員（アンチスキル）必死の貢献もあり計画は滞りなく進捗……現在学園都市に存在しなんらかの犯罪行為を行った暗部組織のメンバー８９％までもがめでたく檻の中です。めでたしめでたし」
「アハハハハまったく大したもんですよ。先代統括理事長アレイスターが５０年掛けて出来なかったことをあの怪物は僅か３カ月で為してしまうなんて」
「舞殿…」

乾いた笑いとともに激しく両手を打ち合せ鳴らす舞殿は上条を無視しさらに語る

「おかしいと思いませんか先輩？そうですよ、アレイスターは暗部の解体を出来なかったんじゃない！敢えてやらなかった！そしてやはりそれはやるべきではなかった！……これを見てください」

舞殿が上条に渡したのは膨大な桁数の数字やグラフ、そして上条すら聞いたことがある学園都市内企業や研究施設の名が所狭しと記載された資料が綴じられたファイル

「収容所にいる馬鹿がどこでどうやって手に入れたのか分かりませんが持っていました。ここわずか数ヶ月、目に見えるレベルで企業は業績、研究所は特許所得率が下げています。理由は簡単です。もう私たちがいないから……」
「舞殿は暗部を必要悪だっていうのか……」
「そこまで自惚れちゃいませんよ。私や根丘は正真正銘のクズです。泣きわめく哀れな少女を殺しました。家族の為にお金が必要だからと言って研究成果を外に持って行こうとした研究員を殺しました。

根丘の活動に敵対する何の罪もない人を沢山沢山殺しました。そして先輩も殺そうとしました！だから…だから」

　上条は舞殿に掛けるべき言葉すら持たない自分を呪った。異能なんかじゃなく目の前の少女の悲しみを消して涙を止める力を持たない自分を憎んだ。

「それでもお前は変わろうとしたよ。罪を償って新しい自分になろうと努力したじゃないか…」

　ようやく言葉を絞り出した言葉はあまりも寒々しくあまりに意味を持たなかった。

「そうですね。私もそうなれると信じていましたよ。でも……」

「学園統括理事会はその機会すら奪った！自分たちに不都合だから暗部を消し！今度は必要だから私たちへの救済だとばかりに甘言を弄し手錠を首輪に変えて光の下に放り出した！」

「知っていましたか？先輩。特別クラスのクラスメイトは恐らく拘束以前は私と同等かそれ以上の成果いや惨劇を起こした暗部メンバーです。そして先輩はその管理役…だって上条当麻…あなたはあの一方通行の切り札だから」

「あなたというヒーロー共に過ごす素晴らしい学校生活。きっとそれは輝かしくて美しいものに違いない！それを守るために私たちはきっと力を振るうことに違和感を覚えなくなる！その変遷のデータ・経験をもとに、統括理事会は捕らえた暗部メンバーの懐柔および再戦力化までの最適解を導きだします、今回の茶番劇はその雛型」

「計画名は首輪（リード）、プロジェクト・リード！首輪だって！ああおかしい」

　もう語るべきものはないとバスは言うように終点であるとある高校の前にバスは到着し停まった。

「着きましたね…さあ行きましょう先輩、私たちの高校（檻）に」

「ああそういえば私の名前をまだ答えていませんでしたね…私の名前

は暗部構成員・舞殿星見です。今後ともよろしくですよ、先輩」

先生だからなのです

バスを降り校庭を抜け古ぼけた校舎に入るとクラス分けや入学式前の準備で廊下は歩行者天国といった様相を呈していた。舞殿は入学や下宿について諸々手続きが残っているからと上条に別れを告げ、上条が「案内しようか?」と誘うのを予測してかそれをはねつけるように足早に人ごみの中に消えていった。

上条は呼び止めようと伸ばした腕を力なく下げると、なんだか情けなくなって頭も視線も重力に引かれるように下がっていき誰に聞かせるでもなく呟いた。

「結びつく力が舞殿達を傷つける…か、そんな事考えたこともなかった」

「どうしたのですか?上条ちゃん」

「うわっ!」

下がりきった視界を突如独占したのはニコ中小学生、生ける七不思議などあだ名がいっぱいなみんな大好き小萌先生である。予期せぬ未知との遭遇に上条は音量調整のねじがぶっ壊れたスピーカーと化した

「ひっ!」

「どうした?じゃないですよ!あんた自分の身長考えてから登場してください」

「朝からご挨拶なのですよ。…それはそうとどうしたのですか?朝から小豆相場で大失敗したみたいな顔してましたが?先生は心配なのですよ?」

「はぁいやそれが…いやこれ先生に言っていいものかどうか…」

いかに教師とはいえこの学園都市の繁栄の影に長らくはびこった闇

それについてうっかり話して万が一この人に危害が及んだらと思うと上条は目の前の恩師に相談することに躊躇を覚えた。しかし…

「あのですね？上条ちゃんはちょっと先生をなめていませんかね？生徒が教師の心配するなんて百年早いのです。あ、百年早いと言っても上条ちゃんは3年でちゃんと卒業してくれなきゃ嫌ですよ？いやこれホントに」
「先生…能力者なの？そういやスケスケ見る見るとかずっと付き合ってるんだもんな、うっかり脳が開発されちゃってもおかしくない。」
「こりゃー！まーた馬鹿なこと考えおってからにー！やっぱり上条ちゃん能力開発を全く理解してないじゃないですかー！補習なのですよ！」

短い手足を一通りじたばたさせると月詠小萌は不出来な教え子を諭すように語りかけ始めた。

「まったくもう、読心能力なんかなくったて上条ちゃんの考えてることぐらい分かりますよ。先生なんですから」
「いやそれってどういう理由ですか？」
「理由なんてなくたって上条ちゃんが誰かの為に悩んで、私のために相談するのを躊躇ってくれてるってことくらい分かるのですよ。」
「それは先生だからですか？」
「でーすでーす、先生だからなのです」
「ですか」

屈託のない笑顔を教え子に向けるこの教師にはきっと１００年後も敵わないだろう。というかこの人普通に１００年後も同じ姿で自分を注意してきそうだなんて思いながら、上条は舞殿とのバス内での会話を恩師に相談した。

「ふむふむなるほどですね。確かに新体制になってからの学園都市の経済・研究成果は落ち込んでいるという話ですが、それは大熱波やエレメントと呼ばれる水晶生命体の出現、極めつけは統括理事長の逝去

による一時的都市機能の喪失なんてものがあるから、一概に一つをとりあげてこれが要因だと決めつけることは出来ません」
「それじゃあ小萌先生は暗部組織の全面解体によるものではないと？」
「いえいえ勿論、学園都市がそういう非合法組織に超法規的権限を与え、その恩恵を得てきたことも事実です。チャイルドエラーを使った人体実験も分かる範囲ですら枚挙に暇がない街ですから。舞殿ちゃんの言っていることの真偽はさておきこの街の偉いもんさんたちがそういう計画を立てたと言っても不思議ではありませんし、事実特別クラス開設時の要項に不可思議な技術体系で製造された腕時計の着用義務なんてものがありますし、生徒さんたちの願書の中にも明らかな不審・虚偽の記載が含まれています。まあ学校側は統括理事会直々の指示という事で意にも介していませんが…それに上条ちゃんにそういう人を惹きつける不思議な力があるっていうことも先生はちゃんと知っています。」
　月詠小萌は珍しくちょっとだけイラついたように火をつけていない煙草を口に咥えて揺らし、現在の学園都市の状況と舞殿が唱えたプロジェクト・首輪（リード）の信ぴょう性が黒みがかった灰色だと認めた。
　しかし、
「ところで上条ちゃん教えてください？上条ちゃんはいったい何を悩んでいるのですか？」
「…え？」
　意味不明だった。恩師の言葉が。だが月詠は上条の思考に更なる言葉をねじ込む
「だからお前はこんなことでなにを悩んでるんだって言ってるんです。」
「…それは……これ以上あいつらに干渉して舞殿たちを傷つけるのが…」
「怖いですか？」

「そりゃ怖いですよ。自分のせいで誰か…
「自分が傷ついてしまうのが。」
　会話になっていない。だっておかしいじゃないか。自分はこれからクラスメイト・友人になるだろう人たちの事を慮って苦悩しているはずなのだ。だとしたら今の目の前にいる恩師はなぜ自分に叱り付けているんだ。おかしいのは相手じゃないとしたら…だとしたらおかしいのは

「しっかりしなさい、上条ちゃん！私の知ってる上条当麻は誰かの作為の有無で、困っているクラスメイトに手を差し伸べるのを躊躇するような人なんかじゃありません。」
「それでも自分が良かれと差し伸べた手が誰かを傷つけるかもしれない」
「それならあなたはその仲間を見捨てれるのですか？誰かを傷つけるのが怖いから上条当麻であることをやめてしまえるのですか？始まりの始まりから考えてみてください。計画なんてどうでもいい。暗部組織なんて放っておけ。あなたの頭で考えてそれでもあなたは舞殿星見って女の子と分かり合う事を放棄してしまえるのですか？」
　数瞬の沈黙の後
「すいません、どうかしてたのは俺みたいです」
　月詠小萌は帰り道が分からなくなった迷子の子供をあやすように、何度も何度も間違えあたりが暗くなるまで居残りさせられたように劣等生がようやく答えを導き出した教え子を褒めるように精いっぱい背伸びして優しく上条の当たを撫で、
「はい、よく出来ました。流石私の自慢の生徒さんなのですよ」
「やめてくださいよ子供じゃないんだから…」
「上条ちゃん、覚えておいてください。もし上条ちゃんが舞殿ちゃんを救うのを失敗しておかしくなったらきっと先生が殴ってでも上条ちゃんを救ってみせます。だから安心して留年生（仮）を楽しんできてください」
「期待しないでおきますよ」

「ふふ、そうですね」
　上条は舞殿星見が消えた方の廊下に一目散に駆け出した。

「うう、人ごみでゴチャゴチャしてますね。いったいぜんたい第三視聴覚室ってどこにあるんですかね」
「おい、舞殿どっち向かって行ってんだよ、ほら行先は教えてごらんなさいこの上条さんがパパッと解決してやるからさ」
　一瞬両親を見つけた迷子のような眼をしたがすぐにかぶりを振り、自分が出来る限りのぶっきらぼうな声で

「何しに来たんですかね、先輩」
「どうせこの人のこの学校の妙に規則性のない部屋配置に戸惑って迷ってるだろうからな。ほら案内書貸してみろ…ああ第三視聴覚室ってそもそもフロアが違うじゃねーか。ほら、はぐれないようについてこいよ」
　上条はごねる舞殿の手をぶっきらぼうにつかむ
「じゃなくてですね！さっき話したこともう忘れたんですか!?そういうのが統括理事会に利用されるって…
「関係ねえよ、んなもん。俺は俺が舞殿を手助けしたいからやってるだけだ。そんなもん知ったこっちゃねえのよこっちは」
「…なんなんですかそれはいったい。馬鹿じゃないですか」
「へえへえどうせ上条さんはお馬鹿な留年生(仮)ですよ。自分が一番知っていますよ」
　人ごみをかき分けるように進む二人、離れないようにはぐれないように繋ぐ右手に力がこもる
「…舞殿です」
「へ？」
「だからさっき先輩私の名前知りたいって言ったじゃないですか！私の本名は舞殿星見です！コードネームとかそういうのじゃないですからね先輩！ちゃんと覚えておいてくださいね！あ、あと勝手に記憶

をまた失って私の事忘れてしまったら嫌ですからね」
「はいはい、分かったよ舞殿」
「はい、先輩！」
誰よりも普通に憧れた少女は手錠も首輪も引きちぎり、今ようやく学園生活の一歩を踏み出す。

時にはラブコメでも転がして

舞殿星見を第三視聴覚室まで送り届け、ポケットの携帯端末で時間を確認するとＨＲ開始の１５分前。

上条は足早に二年生のフロアまで駆け降り、事前に確認しておいた学校以外ではなかなかお目にかかれないが２―７と書かれた名札板を吊るした教室の扉を開けた。

それと同時に教室にいた大勢のクラスメイトの目が一瞬全てこちらを向いたことで、ちょっとした恐怖を覚えつつも知り合いに挨拶しながら自分の席を探す。

「こっちこっち！遅いわよ上条、いったいどこで貴様は油を売っていたというのかしら！」

マジメという枠に頑固とエッセンスに巨乳を溶かし込んで生まれたような少女、吹寄制理が大きく手招きをしてこちらに呼びかける。

「おはよう、吹寄。」

「『おはよう。吹寄。』じゃないわよ。新学期早々に遅刻寸前って貴様まだ去年のこと懲りてないのかしら？それとも頭が定期的に色んな事忘れちゃうのかしら？」

「それは本当に耳とか心に痛いから！あれ？上条さんのトラウマの扱いがどんどん軽くなっていくとかおかしくない？ねえおかしくない？」

「なーにイライラしているのよ。カルシウムとビタミンＣ足りてないんじゃないの？」

言うが早いか吹寄はいそいそとポケットや鞄の中からサプリメントの入った瓶やらケースやらを机の上に並べだした。

上条はなんだかこいつ色々バステにかかってやたら血圧パラの高いジジイみたいだな。って思いながら黙ってその様を眺めていると

「ぐわっ！テアニンのサプリが切れてる！上条お茶葉とか持ってない？まあ今日はありもので済ますか。ほら上条いいものあげるから口

空けなさい！」
「いやいやいいって栄養足りてるし、だいたいお前恥ずかしくないのかよ！むぐっ」

問答無用！沈黙は金と言わんばかりに片手いっぱいの錠剤を吹寄の手づから口に放り込まれた。
バリボリゴリとディスポーザーのように口内いっぱいのものを磨り潰し、噛み砕く上条当麻の様を見て
「やっぱちょっと恥ずかしかったかも…」
などと乙女チックな事をぬかしやがる吹寄。
1人は咀嚼マシーン、1人は少女漫画空間この地獄のようなワンシーンに割り込む猛者が一人

「おはよう！お久しぶり！また一年よろしくね！んでんで朝からお熱いよね、よっ熟年夫婦！」

今時こんなベタベタな事言う奴いるんだろうか？いやこれがいるんです。
1年の頃からのクラスメイトで、ショートウルフにツンツン髪、ちょっと太めの赤いフレーム眼鏡が印象的な少女・吉野葛（よしのかずら）であった

「な、何を馬鹿な事言ってるのかしら…葛。はっ！上条の馬鹿が罹患した？」
「ふっきー…ツンデレ路線でいくのはやめた方がいいと思うよ？結局それ自分が苦労するだけだよ？んでんでカミやん、見たよ見たよ！今朝の廊下の事！」

吉野葛は傷ついた獲物に詰め寄る肉食獣のように爛々と目を輝かせ上条当麻ににじり寄った。

「モガモゴバリモガモガモガ！（今朝の事って何言ってんだ？）」
「うーんごめんごめん。何言ってるか分かんない…」
「今朝の事って何のことだ？ってさ。上条、口いっぱいに頬張りながら喋るんじゃない！ほれ水」
　吹寄から差し出された水を喉を鳴らして口に流し込み、それとともに口内の錠剤たちのなれの果てを胃の腑にようやく落とし込んだ。これ逆に体に悪いんじゃないか？と思う上条当麻の感想は恐らく間違っていない。そして一息つくと上条は
「ひょっとしてあれか？舞殿のことか？それとも小萌先生の事か？」
「えとえとカミやんってどんだけフラグ体質なのかな…じゃなくて小さい子と手を繋いで！ああそれも駄目だ駄目だ小萌ちゃん先生も小さいわ」
　吉野葛が頭を振り回して言葉に困っていると、上条の背後から強烈で鋭くて鉄を断たんとばかりの熱量を帯びた視線が向けられていた
「ほう。小さい女の子と。手を繋いで。仲良く遅刻間際までいちゃついていたと。私の心配をよそに。」
「いやいやふっきー？私は言ってないよ。そこまで言ってない言ってない」
「上条！」
「ヒッ！」
　人は死の恐怖を強く感じると目線をそらし、頭部を腕で隠し身体全体を丸くしてしまうもので
　御多分に漏れず上条当麻もお饅頭になって来たるべき衝撃に備え…備え…来ない？
「貴様の事だから、困ってる女の子を助けてたんでしょ？分かってるわよそんなこと。大体それを私が起こる義理でもないし・でもそれでもちょっとは私の気持ちゴニョゴニョ」
「ふっきー、だからさ、ツンデレはいばらの道だからさ…」

言葉の音量がみるみる間に右肩に下がっていく吹寄、それはもはや上条には聞き取れず、吉野の言動だけが謎が謎を呼ぶ
振り上げた腕もとい丸まった背の置き所を失った上条はどこか恰好がつかず

「気持ち悪い！これは気持ち悪いなんてもんじゃないですよ！吹寄さん！ほらどうしたパンチでも頭突きでもあなたの要望をなんでもお答えします！安心と信頼の上条産業ですの事よ」
「あーこれはこっちも相当アカンやつだったわ…戻ろ」
来いよ来いよ！と往年のプロレスラーみたいに騒ぐ上条に呆れてこの場を離れようとする賢者・吉野
しかし歩き出したその先には大仰な動きをする上条当麻が
ドン！バタン
吉野が上条に当たり、それに上条がよろめいて吹寄に覆いかぶさるようにぶつかり、バランスを崩した三人はピタゴラスイッチ
「カミやんって結構結構身体がっしりしてんだねー凄い凄い」
「これこれこれですよやっぱり、上条さん絶対あると思ってました」
「上条貴様という奴は…」
はぁーとため息をつき仕方ないな。といい顔した上条当麻が一言、
「不幸だ――――！」

ガラッ
「おはようなのですよー！お嬢様！おはようなのですよー、野郎ども！ってうわ上条ちゃん誰にやられたのですか？この酷い傷は！暗部なのですか暗部なのですね！よっしゃー滾ってきたのですよ先生は！」

ファーストコンタクト　そのいち

入学式の片付けに上条のクラスもかり出されたあと、簡単なＨＲを済ませピンク髪の謎だらけ教師・月詠小萌が砂糖菓子のように甘い声で通り一遍の連絡事項を伝えていく

「はーい。今日の授業はここまでなのですよー。週明けからは本格的な授業に入りますからねー。連休前の半ドン授業だからって遊び疲れて、月曜日にダウン!なんてしちゃってたら先生泣いちゃいますからねー。分かりましたか?先生とのお約束なのですよ!」

いかに見た目が若かかろうが言動の端々に歩んできてた道のりの長さは現れてくるもので、絶賛ティーンエイジ中の高校生たちの脳内を

(…半ドンってなんだろうか?)

に染め上げっていった。

教師の言葉の尻を見ると同時、教室全のあちらこちらから喧騒が湧きたち、その多くはこの後の遊ぶ算段を立てる声であった

(あそこのスーパーが特売だったし帰りに牛肉でも買って帰るか?今日はちょっと贅沢に白滝三割増のすき焼きパーティーじゃい!インデックスが食い足りないようならうどん玉をスタート同時にぶち込めば…ガハハ☒勝ったな)

などと上条家の主婦、上条当麻は今晩の食卓を夢想していると素っ頓狂なイントネーションの関西弁が、

「おいっすカミヤン!連休中は元気してたんか?」

「相も変わらず胡散臭い関西弁だな?そういえば長期連休中は実家の秋田に帰省したのか?青髪ピアス」

その滑稽さに似合わない長身と常識はずれで不自然な青い髪の色、上条当麻のクラスメイト・青髪ピアスである。

「ちちちち、違うわ!アホか!ボクは小麦粉とお笑いの国からやって来た。っていっつも言うてるやろがい!うちの家庭には魚醤文化なんか根付いてません!だいたい秋田ではしょっつるのお値段高すぎて観光地用の飲食店位でしか使ってねえよ!」

「誰もそこまで秋田のトピックスなんて聞いてねえよ…」
「そ、そうかいな。それはそうとカミやん、せっかく二年生で新しいクラスになったわけだし。ここは固めの杯代わりにみんなでこのあとパーッと遊ばないか？そんでそのあとは焼いたお肉なんかを突っついたり苦いソーダと一緒に突っついたりなんかしてさ！」
「おお！そりゃいいなインデックスとオティヌスも呼んでいいか？」
「ああかまへんかまへん、美少女？シスター？大歓迎やないですか！んなもんお金払ってこっちが呼びたい位ですわ！…あとカミやんボクはええけど大声で美少女フィギュアの名前を呼ぶのは控えた方がええよ？変態であっても紳士であれが僕らオタクの生きる道ですわ」
　上条の貧乏すき焼き計画は頭の端っこに蹴飛ばされたことはさておき
　秋田県民の提案は野火のようにクラス中へ広がり
「遊び倒して焼肉？いいじゃねーか」
「えーまたお肉？去年もすき焼きだったじゃない！もっとヘルシーな魚介とかさ」
「ほかの学校の奴も似たようなこと考えてるだろうしとりあえ店抑えとくぞ？」
「ジンギスカン鍋なら野菜たっぷりだし女子でもいいんじゃね？」
（今日は。上条君の横を必ず。キープしてみせる）
「姫神ファイト！」
「え。私の心を…怖ッ」
「土御門君は今日どうしたのかな？」
　その火を広がるたびに勢いを増していく。なんだかんだでこいつらは似た者同士なのである
「つかさやっぱこの人数で遊ぶってなるとカラオケ？」
「曲全然まわってこないな」
「上条のとこのインデックスちゃん可愛いよね」
「でもでもカミやんとどういう関係なのかな？知りたい知りたい！」
「上条、貴様は絶対アルコール飲んじゃ駄目だからね！」
　そしてその火の熱量が最高点に達したところで

「あ、上条ちゃんはこのあと補習ですからちょっと残っておいてくださいー」
消された。

午前上がりということで生徒たちはさっさと市街区にでも繰り出したのであろう先ほどまでとはうってかわってガランとした校内の廊下を並んで歩く上条と月詠
よくやってくれやがったな…と恨みがましそうな視線を向ける留年生（仮）に教師は
「だ、だいじょーぶなのですよー今日はそんな時間とるようなことはないですから、すぐにみんなと合流出来ますよー」
「ほんとにほんとですね？お肉食べ損ねたら先生に文句言いますからね？こういうとこからクラスの孤立やいじめは生まれていくんですからね！」
「ああ殴りたい！教師という肩書がなければこの馬鹿を殴りたい！」
そうこうするうちに一年生の教室が並ぶフロアからはだいぶ離れ、去年までは倉庫代わりに使われたいた一室の前で足を止め、上条にここで待つようと伝えた月詠は扉を開け、教壇へ歩を進め馬鹿みたいに明るい声で
「はじめましてー！こんにちはー！みんなの人生の先生になる月詠小萌なのですよー！小猫ちゃんたち！」
「……よろしくお願いします」
だだっ広い教室の中でたった1人反応した舞殿星見の極小の返事が妙に響いた。
オーディエンスの反応の悪さを気にするそぶりも見せず月詠教諭は続ける
「今日から一年みなさんの青春の手助けをさせてもらいます。皆さん

の貴重な一年が実りあるものになるよう尽力していくつもりなのでみなさんも分からない事など気軽に私に声かけてくださいねー」
待っていろと言われたものの手持ち無沙汰に飽いたのか、上条は月詠が開けっ放した扉から頭をのぞかせ教室の中を観察してみると
(教室の中に机は7つ、生徒は5人…一つは俺の席として…休みなのかな?)

チンアナゴのように頭だけ出してキョロキョロしてる上条がいい加減目障りになったのか呆れた声で
「待ってろって言ってるのにー…いいですからもう入ってきてください。えー小猫ちゃんたち喜ぶがいい!青春の一ページに花を添える憧れの先輩の登場だ!ほら早く上条ちゃん入ってきて挨拶しちゃってくださいね」
おやつを待ちきれずに母親に叱られた子供のような紹介をされてバツが悪そうに入室する上条。
それを見た舞殿はおかしくて堪らないといった顔でいたずらっぽく小さく上条に手を振ると、
妙な紹介をされた緊張と4人のクラスメイト達の品定めをするような目線が気になって、上条は油が切れたブリキ人形のような不自然な会釈を舞殿に返す
「えーあーただいま紹介に与かりました…」
「いや…上条ちゃん出馬するじゃないんですからもっと気楽に」
「あーそうかはいはい、えーと俺は一年転生チート同級生上条さんですのことよ。分からないことがあったら何でも聞いてくれよな!だって俺二回目だから!」
滑った。いや舞殿は1人声を殺して笑っていた。
(殺して!誰か俺を殺してってば!大型トラックで跳ね飛ばして!もう一回やりなおさせてよお願いよ神様)
北欧の女神でもお断りしそうなお願いをリフレインしている上条を見かね
悪い夢でも見た後のようなげっそりした顔で月詠小萌はチート勇

者に着席を促す。
「もういいですから上条ちゃん…そこの席に座ってください」
とぼとぼとなんとか席までたどり着いた上条当麻。
隣の席の無言で苦しそうに笑い転げてる小柄おかっぱ頭
「頼りにしてますよ、先輩」
なんとなく腹が立ったから無言でわき腹に貫手をしてやると、何故か顔を真っ赤にして黙りこくったのだが鈍感な上条当麻はきっと気づかない

ファーストコンタクト　そのに

「それではみなさん、簡単な自己紹介をお願いしますのですよー。なーに偉大な先達が盛大にずっこけてくれましたから肩の力を抜いて気軽にやってください。えーとじゃあ舞殿ちゃんから…」
「小萌先生、俺の挨拶を空前絶後の失敗例みたいに言うのはやめてもらえませんかね？」
「うるせーのですよ、留年野郎。可愛い女の子たちの為に黙って捨て石になりやがれなのですー」
　上条と月詠教諭のやり取り聞きながらクスクスと笑う小柄なおかっぱ頭の小柄な少女、舞殿星見は椅子から腰を上げ少しだけ言葉を震わせながら言葉を紡ぎ出した。
「舞殿星見。念動能力（テレキネシス）レベル４です。今更隠すつもりはありませんので敢えて申しあげておきますが、わたくしはかつては元統括理事・根丘則斗麾下の実働部隊構成員をやっていました。皆さん以後お見知りおきを」
　教室の空気は昨今の温暖化が嘘のように冷え込み張り詰めたものとなった。
　女の子同士の自己紹介なんて好きなスイーツは生チョコガナッシェです！うっそー私も好きなんですけど！みたいな甘くてフワフワした内容を予想していた上条は自分の考えが誰よりも甘かったことにようやく気付いた。
「最後まで新体制統括理事会に噛みつイた狂犬共の生き残り…」
　真っ白な髪に真っ白な肌、真っ赤な瞳だけがやけに悪目立ちするやせっぽちの少女は誰に聞かせるわけでもない無機質な言葉を並べた
「結局それも無駄なあがきだった訳よ。というか自分の能力なんて馬鹿みたいにぺらぺら喋って軽率に過ぎるんじゃないの～？」
　金髪碧眼のフランス人形のような容姿の少女は白い少女の言葉に相乗りするように舞殿を嘲笑するが、
「馬鹿はあなたたですよ、フレンダ＝セイヴェルン」
　ここは譲らない。譲れない。自分は上条当麻と約束したのだ。自

分はこの学校でこのクラスで普通を取り戻す。と
「私たちの能力・経歴はおろか3サイズに男性遍歴だって上はもとより、『これ』を付けている以上、この場のみんな全てが知ろうとすれば簡単に知ることが出来ます」
　舞殿は左腕にまかれた味気ないデジタル時計を掲げる
　くだらない暗部の駆け引きなんて持ち込ませたりしない統括理事共の思惑なんて知った事ではない。
　もう前みたいに嘘はつきたくない。未来の友人たちに
「私の指先の障害もあなたがアイテムを抜けた理由も隠す意味が無いし、私はそれを隠す必要がないんです。そうことやりたくてわたくしはここに来たんじゃない！そういうことをやめたいから！ここにいるみんなと笑い合いたいから！もう一度やり直したいからここいるんだ！分かったか馬鹿野郎！以上！」
　そこまで言い切ると舞殿はすっと着席した。
　興奮しているせいなのか泣いているのか小刻みに肩を震わせる小さな少女に上条は
「かっこいいじゃん、後輩」
「…先輩、わたくしの3サイズ調べちゃダメなんですからね」
「え、ダメなの？」
「馬鹿」
「それじゃあ次はフレンダちゃんなのですね。張り切ってお願いします」
　生徒たちのキャットファイトなんて意にも介してないのか月詠小萌は場違いなくらい変わらない甘い声で次々と生徒を促す。
「結局そこのちんちくりんに言われちゃったけど、まあいいって訳よ。フレンダ＝セイヴェルン、１６歳、好きなものは鯖缶とぬいぐるみ！結局今日はこれだけ覚えて帰って欲しい訳よ。一年間よろしくね、ニヒヒ」
　金髪碧眼のフランス人形のような容姿の少女・フレンダは快活に笑う
「九十九海月（つくも　くらげ）、能力は窒素操作レベル４…さっきは

余計なこと言って悪かった。今度美味しイ紅茶をご馳走するンで許して欲しい…」
　白い少女は抑揚こそないが確かな謝罪の意を込めて言葉を紡ぐ
「ゆ、ゆゆゆゆ弓箭猟虎でっす！あの私も皆さんと仲良くなりたいなあって…ああ私は！そこの金髪（ゴールド）とは既に親友っていうか運命共同体っていうかフヒッ」
「勝手なこと言うんじゃないわよ！このどＳスナイパー！結局枝垂桜に普通に戻れば良かったじゃない！」
「冷たいこと言わないでくださいよ、ゴールド」
　フレンダと既に知己を得ているようだった黒髪を後ろで二つ括りにした上品な少女はもごもごと早口で自己紹介を終える。
「八重桜（やえ　さくら）、水流操作レベル４。いまはこれだけで勘弁してくれないか」
　その名前のとおり桜色の髪色をしたすらっと高身長の少女は言葉少なく席に着いた
「はい、皆さんありがとうございましたー。本当はもう一人生徒さんがいるんですが手続きの関係で５月頃の編入になるそうです。…どうでしたか？みなさん。自己紹介してみて？……ここにいる人はみんな年齢も経歴も能力もバラバラで本来は同じ学校の同じクラスで学ぶことなんてありえなかった６人です。それでもここで出会うことが出来た６人なのです。それを意味のあるものにできるか否かは、皆さんの今後の振る舞いによって決まってくるのです。それだけは忘れないでくださいね。」
　教室にいる６人の顔をしっかり見据え一人一人に語り掛けるような月詠小萌、そんなシリアス空間に耐えられなくなった我らが頼れる兄貴・上条当麻
「まあそんな難しい事考えず気楽にやっていこうぜお前ら。そのために先輩の俺もいるんだからよ！」
「上条ちゃんはもうちょっと人生を難しく考えていく必要があると思うのですよ…というか上条ちゃん２年生なのにこの中で一番カリキュラム進捗遅れてるって知ってましたか？」

「おいマジかよこの教師？それは隠していくべきことだろうが！」
「先輩隠し事は無しでお願いします」
「マジ？結局上条は先輩の器じゃないって訳よ？」
「センぱイ…流石にそれはまずイ」
「か、上条先輩！今度みんなでいいい一緒に勉強会やりましょ！そうしましょ！」
「当麻先輩、それほんと大丈夫かい？」
　初顔合わせで早くも先輩として威厳が地の底に潜った上条当麻…
彼に明日はあるのか？

焼肉　そのいち

特別クラスの初顔合わせも終わり小萌先生が教室を後にした後各々が家路に向かおうとしたとき物語は動き出した。
「ねえねえ今日はもうこれで終わりなんでしょ？明日は休みなんだし～ちょ～っとみんなでどっか遊びにいったりしない訳？」
クラスメイト達を呼び止めるようと、可愛らしく飛び跳ねるような仕草をしながらちょっとだけカールした金髪を揺らし、フレンダ＝セイヴェルンは各々に疑問…というよりも遊びのお誘いを投げかける。が、
「悪りぃ、このあと2年のクラスの連中との先約があってな」
「わたくしも下宿先に荷物が届いてるので先にそれを片付けてしまいたいかな、と…」
「はぅあっ！ご、ゴールド…ようやく私を友人と認めてくれたんですね！感動です！マーベラスです！行きましょう！どこにでも行きましょう！」
「パス」
「僕も行きたくないってわけじゃないんだけど、なんかみんな気乗りしてないみたいだしまた次回ってことでどう？」
クラスメイトな無慈悲な宣告を聞き、フレンダはあからさまにそしてあてつけがましく教室床にへたり込み、駄々っ子のようにゴネだした。
「なによ！なんなんのよ結局友情だ！仲間だ！と言っておいて私と遊ぶのが嫌って訳なんじゃない！フフン、良いってわけよどうせ私は一人寂しくサバ缶つついてるのがお似合いって訳よ！フエーーーン」
「あ、あれ～？ゴールド、私いますよ！ハイハイいます！ここにいますよ！見えてますか？」
ついに嘘泣きまで始めた１６歳児の周りをぼっちが片手いや今しがた両手をあげてぴょんぴょん跳ね回る。
そんなＵＦＯとの交信みたいな無残な絵面に耐えきれなくなった八重桜がさっさと折れた。

「もうやめなってフレンダ！分かったから！僕も行くから！みっともないから早く立ちなって！」
　僕っ子モデル体型美女がフレンダを立たせようと腕を引っ張り上げるが床でジタバタと更なる徹底抗戦を貫く
「やだやだやだ！みんなが行くって言うまでやだ～！（キタキタキタ～！結局このフレンダ様の智謀に愚者共は踊るがいいって訳よ！）」
「イや、行かなイって言ってンだろよ空気読め」
「フレンダ…いい加減に…してください！」
「へ？」
　舞殿の人差し指が躍るとフレンダの足元の床はたわみ、彼女の身体を一気に跳ね上げた。
「～～～ッ！ゴーールドーーー!!」
　弓箭の叫びもむなしく天井壁床もう一度天井とピンボールのように跳ね回る身体
　舞殿の怒りが解けた時は床で夏の終りの蝉のように痙攣しているフレンダ姿が…
「フレメア…結局強く生きるって訳よ…ガクッ」
　そんな惨劇の場に帰宅姿のピンク頭の幼女教師が通りがかり、教室内で殺したり殺されたりしてる教え子たちを見て不思議そうな顔をして言った。
「はわ？みなさんこんなとこでなにしてるんですかー？上条ちゃん早くお姫様たちをエスコートしてビールを飲みに…もとい青髪ピアスちゃんのとこに行きましょうよー、先生愚図な上条ちゃんは嫌いなのですよー」
「先生、何言ってんですか？ついに頭までアルコールが回っちゃいましたか？」
「フハハハなんとでも言うがいいのですよ！明日は休みで酒が旨いのです！今日は血がアルコールに変わるまで飲んでやるぜ！」
「え、こいつらも連れていって行くつもりなのか？でも用事ある奴もいるって言ってるぞ」
「青髪ピアスちゃんに可愛い女の子５人ほど連れて行っていいかって

連絡取ったら、即決で了解もらえましたよ？大体上条ちゃん後輩なんて遠慮して当たり前なんですよ…今日はいいとこ無かったんだし可愛い後輩ちゃんたちの歓迎会くらい上条ちゃんが率先して開いてあげるべきでしょうが…ここは上条ちゃんの器量の見せどころなのですよ」

それを聞くや否やくたばっていたはずのフレンダは息を吹き返し勝手なことを喚く、そしてそれに追従するやつ遠慮する奴

「ハイハイ！行きたい行きたい！上条のおごりでお肉！ダイヤカットのお肉は私が予約ね！」

「フレンダ！先輩、そんな無理しなくても…」

「センぱイが奢ってくれるなら行く」

「そそそそ、そんな大勢と食事？『猟虎ちゃん可愛いわねお友達になりましょう』なんて誘われるかもしれませんね、大丈夫ですよ？ゴールド！あなたはどんなことがあっても私の大事なお友達です」

「男の甲斐性を無碍にするわけにはいかないね。当麻先輩ご馳走さまです」

オティヌスは潜り込ませるとしてもインデックス＋後輩分のお勘定というあまりに重たすぎる負担を背負ったお財布氷結能力者、上条当麻は意を決し青髪ピアスに電話をかける

「だからさ2時間ドリンク込みで６０００は高すぎるっての！青髪てめえ気合入れろ、ここが正念場だろうが！２９８０！このラインは絶対に譲らねえよ！え？そんなの無理？馬鹿野郎！こっちは可愛い後輩たち５人の期待と信頼を背負ってるんだよ！絶対に諦められっかよ！もういい上条さんが直々に行くからお前はもう何もするんじゃねえ！」

「先輩、もういいですから！私たち大丈夫ですから！自分の分くらい払えますから！」

可愛い後輩が止めるのも聞かず携帯端末相手に吠えまくる上条当麻。彼は決して世界を股に掛けるマネーゲームを繰り広げてるわけではなく、ましてや後輩たちの信頼を背負ってるわけでもない。それでは何をやっているのかというと、

「２時間飲み物入れて２９８０円の焼き肉って……当麻先輩、彼はいったい僕たちに何を食べさせる気なのかな？」

値下げ。

焼肉　そのに

第四学区に立ち並ぶ飲食店から大きく外れた路地通りに建つ知る人ぞ知る知らない人は普通に知らない焼肉店で、上条たち２―７組および１年特別クラスの打ち上げはひっそりと行われていた。

肉を焼く煙がもうもうと立ち込める店内で、クラスメイト達は思い思いに楽しい会話を弾ませるなか上条当麻たちのシマも今まさにトークのピークを迎えていた。

「イヒヒヒヒ、飲み物込みで２９８０円って貴様は私たちをどんなとこに連れていこうとしてたのよ、上条」

「面目次第もございらん…」

「でもですね、先輩は私たちに頑張って奢ろうとしてくれてたというかですね」

吹寄はいつもの生真面目な相好を崩し、珍しく声を上げて笑っている。テーブルの上のソフトドリンクではなくこの場の雰囲気に酔っているのかもしれない。

舞殿はしょぼくれた上条とそれを肴にする上条の友人の顔を相互に見回しおろおろと愚にもつかない弁護を繰り広げていた。

結果から言うと言うまでもなく上条当麻の値引き交渉は失敗に終わった。

「いや笑い事やあらへんよ！カミやんが店員に縦縞だろうが横縞だろうが構わないからもっと安くならないか？って言ったときはホンマ肝を冷やしたで…」

「あひひ、ムフ！いひひひ！だみぇお腹痛い上条貴様笑い殺す気？」

「面目次第もございらん…」

「わたくしはお気持ちだけで嬉しかったですからね？」

そもそもの話である。壁の外と比べ学園都市の飲食店の価格設定は非常に高い。

一方通行の統括理事会理事長就任によってかつてのそれに比べ、リーズナブルになってきてるとはいえまだまだ学生たちにとっては辛い状況が続いていた。

それを考えると２９８０円で焼肉を食べようとするのがいかに神も恐れぬ所業か理解してもらえるのではないだろうか？

オチが付いたところで小休止。吹寄と青髪ピアスはコップに注がれた極彩色の液体で笑いすぎて渇いたのどを潤す

「ふふ、ふひ、あーお腹痛い。でもさホントにこの学園都市なら作っちゃうかもしれないわね。縦縞の肉牛」

「意味なさすぎですやん？某有名フライドチキンチェーン店の都市伝説ならまだしも」

「６本足の鶏…ですか？実現したとしても食肉に出荷までの飼料が通常の３～４割増しになる上に、多脚化による運動機能の制限からもたらされる病気のリスクを鑑み、早々に放棄された畜産計画ですね」

「えー……作ろうとしたんだ…」

鼻をフンスとならす物知りガール・舞殿星見がちょっとだけ誇らしげに語るのを余所に、冗談を本気で商業ベースに乗せれるか否か検討してしまったこの街の大人たちになんとなくゲンナリしてしまう吹寄、青髪ピアス。

バカ騒ぎをすれば喉が渇き、腹も減るのは当然というもので手を上げて吹寄は通りがかる大学生ぐらいの年若い男性ホールスタッフを呼び止める

「あ、すいません牛タン追加！」

「お客様申し訳ありません、最初にお出しさせてもらった物を全て召し上がって頂いてからの追加注文とさせて頂いています」

そう言うとあわただしげに去っていくホールスタッフを見送りおもむろに焼肉テーブルの上の大皿料理を見て吹寄はため息をつく

「嫌いじゃない…決して嫌いじゃないのよ…」

「分かるぞ吹寄！いらないよな焼肉食べ放題の時のチャプチェとトッポギ！」

焼き肉食べ放題の時に立ちふさがる最強の敵、店側からの明確な悪意と警告

絶対に高い肉はバカバカ食わせないぞ！という強烈な意志を感じさせる炭水化物２大巨頭がテーブルに鎮座していた

「いくら5人前とはいってもね…へへ」
先ほどの馬鹿笑いとは趣の違う口の端を数センチ動かすビターな笑い
食べなければ好きな肉は頼めず、かといって全部食べてしまえば肉を入る予定の腹をジャックしちゃう無法者。お互い目配せしながら膠着する時間が数瞬…
「しゃーないインデックスに「わたくしがさらっちゃいますね！」
上条の言葉にかぶせるように大きな声で言ったかと思うと舞殿が大皿を自分の前に引き寄せる、先輩たちの考えが痛いほど分かり気を遣ったのだが、冷静な舞殿にしては一つ大きなことを忘れていた
(あれ？これお箸じゃないと食べるの無理じゃないですかね？)
そうなのだ。この二つの料理、形状あるいは味付け的に普段舞殿がやっている突き刺し、かっ込みで食べるのが非常に難しい。
春雨はいうまでもなく韓国餅も箸で刺すには硬過ぎる。
じゃあかっ込んで食べるのはどうかというとボリューム的に厳しいのもさることながら味付けがとんでもなく辛いので確実にむせる。
そもそもである。花も恥じらう女子高生が大皿に盛られた炭水化物をかっこんだり、犬食いしたりするのはどうなのよ？とそんなことを考えながら箸を握りこんだまま固まっている舞殿
「独り占めはよくねえぞ！舞殿」
固まる少女の前から大皿を奪い返す上条
「ほら青髪もさっさと食えよ」
「合点承知の助！」
炭水化物を腹に放り込む機械となった馬鹿二人をじっと見る舞殿にそっと耳元で吹寄が語りかける
「ごめんなさい気を遣わせちゃって…あとね実は舞殿さんの指の事なんだけど、この食事の前に上条から聞いてるのよ」
「先輩が？」
「ああ悪く思わないであげてね。了解も得ずに言っちゃうなんてほんと馬鹿だから上条、うんほんと馬鹿なのよ」
「もちろんそれは…でもなんでわざわざ」

「せっかく新しい学校で新しい生活を始めたんだから、変な気を遣わせたくないから見て見ぬふりしてろって…たく、それで余計に後輩に気を遣わせるんだから世話無いわよ」
「ほんと馬鹿ですね…先輩は…ああ先輩も青髪先輩も二人で食べちゃダメですよ！わたくしにも残してください！」
　そう言うと舞殿は小さな口を大きく開けて人指し指を軽くクイッと動かした。
「カミやん目が！目が！めっちゃくちゃ痛いです」
「馬鹿野郎ですかお前は！念動力の無駄遣いだろうが！トッポギの汁めっちゃ飛んでるんですけども？青髪なんてあまりの痛さに標準語に戻ってるぞ」
「ムグムグ。仕方ないじゃないですかわたくしお箸使えないんですから」
「それにしたってやり方考えろってんだ！」
「じゃあ先輩が食べさせてくださいよ、あーん」
「あーもう不幸だ――――!!」
　馬鹿笑いでも苦笑いでもなくいつも様に優しく笑いながら吹寄はこう言った
「まったく先輩たちが馬鹿なら後輩も馬鹿にもなるわよね。あ、すいません牛タン塩５人前にカルビタレ３人前…あとフォークを一つお願いします」

　余談ではあるが実は同じシマにずっと黙って座っていた弓箭であった
（あああ、あれ？喋り出すタイミングがなかなか掴めないですね。）

ふたりぼっち　そのいち

「うりゃ～！今日の先生は無敵なのですよー！おら店中の酒全部もってこいなのです！」
「ちょっと先生！はしゃぎすぎですよ！」
「小萌先生を止めるふりして体触れるチャンスやん！ボクはそのためなら明日なんてモノはいらへんよ！ちょっくら行ってくるわカミやん」
「青髪先輩を止めてきちゃいますね物理的に…」
　一升瓶片手に気炎を上げる月詠小萌を止めるため吹寄、青髪と舞殿は別のシマに移って元のテーブルに取り残されたのは上条、弓箭。
　さっきの会話にも入らず俯き小さなため息を繰り返す弓箭。
「なんか悪かったな、弓箭。お前たちと同じクラスになれたお祝いの会でもあるのにつまんなかったよなここじゃ…今からでも俺の事は気にせずフレンダいる机に行ってきていいんだぞ？」
「はひ？ななななんですかね？私こそすみませんなんかすみません」
「何悪くもないのに謝ってんだよ、お前。だいたい謝ってのはこっちだぞ」
「いいいいえいえ！そんなこと全然気にしなくても…私ボッチ慣れてますし……」
　立ち消えていく語尾と共に再び俯いていく弓箭を前に上条当麻は語る。
「良かったらでいいんだが、ちょっとだけ店の外で話をしないか？酔っ払い共の声もうるせーし」
　酔っ払い教諭の鼻歌に吹寄の怒声、不逞の輩こと青髪ピアスが物理的な天罰、具体的に言うと舞殿に大ジョッキ頭にぶつけられた。が下され悶絶する声のハーモニーをＢＧＭに話をする気にはどうしてもならず、上条当麻は柄にもなく女の子に積極になってみた
「へ？そそそそれは世間でいうとこのおデートというやつでありますかね？上条先輩はわたくしに懸想してくれてるからそういうお誘いしてくれてるんですよね？そそそそういうことであればわたしもや

ぶさかではないというか…さらば暗黒の青春！ようこそリア充生活！あ、でもでもクラスでは秘密にしてましょうね噂されたら恥ずかしいですし！」
　俯いていた顔は恐るべき勢いで跳ね上がり弓箭は華のようにほころんだ笑顔を見せる
「違いますですはい」
「…ちぇっ」

「うー寒い…おーい缶コーヒーはホットの微糖で良かったのか？」
「そ―んなことよりー！はやくこっちいらしてくださいよー上条先輩ー！」
「恥ずかしいからそんな大声出すなって」
　自販機で飲み物を買う上条を大げさな身振りで急かす弓箭。
　焼肉店内とはうって変わって浮かされたような弓箭の態度に若干の違和感を感じていると、茶髪の少女はツインテールを揺らし小走りで駆け寄って腕に縋りついてくる。
「ほら微糖。わざわざ外まで出て来てくれてありがとな、こっちの方が弓箭と落ち着いて喋れるかなって思ったんだが…」
「見て見て上条先輩！学園都市でも星がくっきり見えたりするんですね！そうだ一緒に流れ星探しませんか!?」
　噛み合わぬ会話。上条はわずかな苛立ちを覚えたが気を取り直しなおも会話を続ける。
「姫、それはよろしいのですが上条さんに質問させては頂けないでしょうかね？」
「うむ、苦しゅうないです！なんちゃって…えーと趣味はバイオリンとハンティングを少々」
　またしても会話の歯車を外し脱線させようとする弓箭に構わず上条は、

「だから趣味の事は…」
「ああそうだ上条先輩も今度一緒にやってみませんか？ハンティングはあれですがバイオリンなら手習い程度ですがお教えできますし」
「なあ…」
「はい、なんでしょうか？やはり殿方には退屈かもしれません絵」
「弓箭なにをそんなに恐れているんだ？人と関わるのを」
　弓箭が手にするスチール缶はペキリと歪む
「……何を言っているん…ですかね？」
「考えてみたらおかしかったんだ」
　弓箭猟虎は常々「友人が欲しい」と「リア充になりたい」と口にしている。
　が、だとするなら弓箭猟虎の行動は明らかに道理に合わない。
「最初は人と話すのが苦手なだけかと思った。」
「ええそうですともだってわたくしはずっとずっと友達なんかいませんでしたから話すのなんか慣れていませんからそりゃおかしな話し方にもなりますとも」
　まくしたてる弓箭をもう一度無視し上条はさらに続ける
「だとしたらおかしいんだよ弓箭。人付き合いが苦手な奴だってそりゃいるさ。どもったり話してる内容がチグハグになったり。でもさ、お前のスタイルは一貫してる好意という糖衣に包んで相手との対話を拒絶してる。本当に友達が欲しいなんて思ってる奴はきっとそんなことになったりしないんだ…」
　弓箭の顔から表情が消える。そして手に持っていた缶コーヒーは既に強く握られ過ぎて中の液体が染み出ていた。手が汚れるのを気にも留めず弓箭や上条に問いかける。
「いけませんかね…みんなが仲良く手を繋いで笑って生きるそういうのが苦手……ううん嫌いな人だっていますよ…駄目ですかね、そういう生き方？」
「ダメとは言っちゃいないさ……でも嘘をつく必要もない」
「別に迷惑かけちゃいないつもりでした、まあ多少ゴールドやあなたにとっては鬱陶しかったかもしれませんが…」

「弓箭、勘違いすんな。お前が嘘をついてるのは自分自身に対してだよ」
上条の言葉を聞くや否や弓箭は珍しく本当に珍しく激昂した
「あんたに私の何が分かるって言うんですかっ！」
「何も。だからそれを聞こうと思って」
まだ寒いのか弓箭の溜息は白く大きくたなびいた…
「分かりました、じゃあ私のちょっとだけ長い懺悔を聞いてもらえますかね？」

ふたりぼっち　そのに

「才人工房第三研究室、内部進化…薬物・精神操作を利用し人為的に思った通りの能力を人に発現させようとした愚か者どもの夢の王国、それが私の始まりです」

　弓箭猟虎は星々輝く夜空を見上げ、昔々あるところにあったどこか遠くのおとぎ話を幼子に読み聞かせるかのような口ぶりで上条当麻に話始めた。

「レベル5を生み出したなんて耳障りの良い言葉で展望ある少女たちを集め行った違法研究…そんなものに憧れて私は、私たち姉妹は門を叩きました。そこでのわたくしは大層な劣等生でしてね、来る日も来る日も動脈に認可されてるのかどうかも分からない怪しげな薬品ぶち込まれて、大仰な機械で脳みそかき回されて、それでも全く目に見える能力増進はありゃしない…フフフ、まったく参っちまいますよね？上条先輩」

　過去の自分を嘲っているのかあるいは上条当麻に何かを求めていたのか囁くように言う。

「そんなくそったれな世界でもわたくしは希望を持っていたんですよ。いつかは超能力者になれるって…妹から…誰からにも尊敬される何者かになれるって」

「それなら…」

「ああ、そこで生み出されたレベル5に謀反起こされて研究所はあっさり解散しちゃいましたよ…そういえば貴方もご存じだったはずでは？蜂の女王は」

「済まない誰の事なんだ？」

　先ほどまで歌うように語っていた弓箭猟虎は一瞬とても悲しそうな顔をし続ける。

「失礼しました、私の記憶違いだったようです…ああ話が逸れましたね。研究施設の解散後に妹はわたくしの元から消えました。きっと無能力者で人付き合いが苦手な私に嫌気が差して消えたんでしょう、全く酷い妹ですよ…その後は上条先輩もご存じのように生きるため

に暗部に身を落としたわたくしは日を重ねるごとに一つ一つ罪を重ねて、裏切り裏切られの世界に骨まで馴染んじゃいましてね、今更友情だの愛情だのなんて信じられない身体と心になっちゃいました。チャンチャン。どうでしょーかね神父様わたくしの罪はいまさら許され学校通って友情ごっこなんてやれるんですかね？」

弓箭はコーヒーで汚れた指を舌先でぺろりと妖艶になめとり、罪重ねた過去と未来の狂気を語る。

「新体制も最初だけ。結局彼らはいかに美辞麗句で飾ろうと暗部を必要としてわたくしたち暗部の開放を始めています。これは試金石！たった一年！たった一年我慢すればまたこの街で殺したり殺されたり出来るんです！私はまたハンティングを楽しめるんですよ！だから私は虫唾が走るこの友情ごっこを演じます、だから上条先輩も業腹かもしれませんが演じてくださいませんか？この滑稽な茶番劇を」

確信をもって。

「弓箭…」

「はい？」

「駄目だよ、懺悔だって言うならちゃんと真実を言ってくれなきゃ。それじゃあ俺は納得できないよ」

「何を言っているんですか？貴方は…嘘をつく理由やメリットなんかどこにあるって言うんですか？私は暗部の殺し屋ですよ？貴方が考えてるような倫理観で全て理解できなくても仕方ないと思いますが…」

「分かるさ」

上条当麻はここまで聞いても即答する。

さしもの弓箭も口元をひきつらせ狂気を帯びた笑顔は消えた。

「弓箭、お前は最初になんて言ったか覚えているか…『懺悔』だよ。本当に全て納得ずくで何一つ後ろめたさのない奴は嘘でも冗談でもそんな言葉使ったりしないんだ」

「そんなつまらない言葉だけで自信たっぷりそんなこと言ってたんですか？どんだけおめでたいんですか、わたくしの善性を買いかぶりす

ぎでは？」
「そうかもしれない」
上条は率直に認めた
自分の論理の幼稚さを実証性の無さを
「そ、そうでしょ？だったら！」
「そうかもしれない…でもだったらお前なんで泣いてるんだよ？」
弓箭猟虎の大きく黄金色の瞳からは確かに確かに一筋の雫が零れていた。
辛い。と
悲しい。と
弓箭猟虎の言葉に精いっぱい抵抗するように本人の意思と反するように。
「殺しを楽しんでいたのかもしれない。誰かを裏切って裏切られて傷ついて人付き合いなんてウンザリだって思ってるのかもしれない！それでもアンタはどこかで誰かと繋がりたいって思ったから俺の誘いに、みんなとの食事会に、こんなバカげた計画に乗っかったんじゃないのか？だってそうだろ？外に出るだけならこの計画が成功した後に改めて悠々と出てくればいい。演技までして茶番劇の道化を演じる必要なんかなかった」
「黙ってください…」
「黙らないよ。人とは繋がりたいただやはり人と付き合って傷つくのは怖い…だからアンタは臆病になって閉じこもって鎧を着た。ぼっちだから仕方ない。空気読めないから相手が離れても仕方ない。そんな言い訳で自分を動けなくした。でも違うんだよ！弓箭！人付き合いなんてものは相手とぶつかりあって傷ついて当たり前なんだよ！」
「黙れって言ってんだよおおおおお‼」
咆哮。
弓箭猟虎は制服の袖口に仕込んだ女性用の小型拳銃を取り出し、震える手の神経に渇を入れ、上条当麻の心の臓に銃口を定めた。
「うるさいうるさいうるさい!!もうわかりましたはいはいそうですね

もういいです。一年いい子で過ごしてまた暗部でハンティングする未来も諦めた！殺処分も仕方ない！ただあなただけは…あなただけは私と道連れになってもらいますよ上条先輩」
「やっと本音がこぼれたのかこの口下手野郎」
「私みたいな奴に深入りした自分を後悔しながら死んでください、いい声で鳴きながら」
上条当麻の持つ力、幻想殺しは鉄の塊を吐き出す銃には無力だ。血管、重要臓器の一部が傷つけばあっという間に死んでしまう脆弱な肉の身でしかない。
それでもそれでも銃口を見据え上条当麻は凶悪に笑った。
「いいぜ！口論よりこっちの方が得意だ！喧嘩しようぜ弓箭猟虎！」

ふたりぼっち　そのさん

上条の宣戦布告と同時、上条当麻と弓箭猟虎は後ろに跳ねとんだ。
弓箭は距離をとるや否や小型拳銃で上条を狙いつけ軽い発砲音が2発…わずか7ミリ前後の金属の塊…上条の命を十二分に奪いうる威力と殺意を秘めた極小の暗殺者はさらに距離を取ろうとする上条の頬と脚に掠る。
焼けるような痛みを覚えるが、その痛みをなんとか押しこらえて大通りの枝道に走りこむ。
「ありゃりゃりゃ上条先輩、あんだけ啖呵切っておいて後ろに下がるんですかね?それはあんまりにもダサくないですか?」
「うるせーよクソぼっち!正面から拳銃とやりあってられるか!戦略的撤退だよ!バーカバーカ」
頭だけ出して言い放つ軽口が言い終わる前にさらに発砲音が1発…上条の身を隠している建屋外壁の表面がはじけ飛び、慌てて頭を引っ込める。
(ちっ…くしょぉ!最悪だ…頬はともかく脚まで…こりゃさっさと打開策見つけないとじり貧だな)
明滅する意識とじくじくと痛む足を引きずり、寂れて破棄されたであろう商店区の裏道の奥へと入りこんでいく上条当麻。

上条が逃げ込んだ枝道へ死角から飛び出してくる強襲を警戒しつつ追走する弓箭。
「上条先輩!寂しいじゃないですかー!一人ぼっちにしないでくださいな!」
いつも暗部で行っていたような群衆に紛れ、相手が自分を見失ったところでの狙撃…弓箭の趣味と経験を兼ね作り上げた勝利方程式とは違い周りは人通りも無く、さらに獲物は隘路をへと入りこんでいった。

いつもとは違う臨場感に嗜虐心と性的興奮を覚え柄にも大声を張り上げる。
５分ばかり道なりに進むとほんのわずかではあるがぽつりぽつりと路上に赤い斑紋が弓箭はしゃがみ込み、その斑紋に指を付け、その指を舌の上に押し付ける
（おやおや浅くない負傷までしてるんですかぁ～上条先輩。道幅が無く奇襲に適した遮蔽物に建屋も存在しない隘路。おまけに獲物は既に手負い済みしかも自分で自分の逃走ルートをさらけ出しています…ちぇっ！人生を賭けた割にはこの狩りどうにも面白くなりそうにもなりませんね。さっさと片を付けますか）
上条にはもはや逆転の目は無くなった！残酷な笑顔を顔に張り付けて上条当麻が逃げたであろう道、雑踏に転がる空き缶やポリバケツ、詰みあげたビンケースなどを蹴散らしつつも足早に駆け抜け隘路を抜け出し開けたスペース…いったいつ作られいつ打ち捨てられたのかもわからないコインパーキングへ、そしてついにそこで標的を捕らえた。
「みーつけたーっ☆」
上条当麻は傷ついた足のせいであろうか、それとも死の緊張感に耐えかねおかしくなったのであろうか？撃ち殺してくれと懇願してるとしか思えないなんの遮蔽物にもならないいつから置いてあるのであろうか？古ぼけたロック版タイプの駐車スペースに主が戻らず何年も待ちぼうけを食らった軽自動車がいくつかあるだけのだだっ広い場所で上条当麻は立ち尽くす。
「わたくし少々上条先輩を買い被っていたのかもしれませんね…とはいえ獲物はかっての英雄・上条当麻。最後はわたくしに極上の狩りだったと言わせてくださいませ」
いささか拍子抜けとはいえこれで詰み。とばかりに弓箭は小型拳銃を構え指先に全神経を集中させ、引き金の抵抗を楽しみ…その時であった上条当麻が自身の状況を理解出来てないのか大きな声で弓箭に声をかける
「おい弓箭、後ろは見るなよ！」

「はぁ…何を言ってるんですかね？恐怖でおかしくなりましたか？」
「舞殿が凄い顔でお前をにらんでいるんだ…見ない方がいいぞ！」
「そんな都合良い事が起こるわけが…」
「おいおい弓箭、お前は俺を捕まえるまでどれだけ時間かけたと思ってるんだ？およそ１５分。電話で舞殿を呼べばさっきの店から走れば十分にたどり着ける距離だぜ。楽しんで殺す悪癖が災いしたな！」
「ハッタリです！さっきの場当たり的な逃走経路がすべて計算ずくだとでも…」
「その答えを考えるのはお前の役目だよ！」
（もし本当に上条先輩が舞殿星見を呼んだとしたら？そしてこの場に彼女が間に合っていたとしたら）
　最悪の想像はあっという間に弓箭の思考を支配する。
　レベル４念動能力者、舞殿星見。元根丘派最大の打撃戦力にして現在では上条当麻の犬…状況によっては倒せないとは思わないし自分が劣ってるとは言わない…言わないが単純な殲滅力では勝負にすらならない。
　相手は原子力空母や高層ビルすら平気で真っ二つにへし折る規格外の化物だ。真っ向勝負なんてすればあっという間に瓦礫の下で躯を晒すのは目に見えている。
「ううう嘘ですよね？」
「さあいよいよ決断の時間だぜ覚悟はいいか!?後輩!!!」
　その時であった金属がへしゃげる音がコインパーキングに響き渡る。弓箭の呼吸が止まる
（念動能力？）
　思考と並行するようにその場を飛びのき弓箭は音のする方に視線を向けるとそこには、低すぎる車高が災いしたのか埃まみれの軽自動車のドア下に食い込み上がり切らないロック板がメシメシと音を鳴らしていた。
「クソがクソがクソが！やはりブラフじゃねーか！死ねや！」
　視界を前に戻すと弓箭に一直線に向かってくる弾丸、上条当麻が
「遅すぎるんですよ！こんなちんけな手で私を…」

弓箭の動きが止まったのは数瞬…上条当麻と弓箭の距離は１５メートル…カモであった。
跳ねる心臓とひりつく呼、定まらぬ視点をねじ伏せ再度上条当麻に小型拳銃で狙いを定め
「終わりです上条先輩、なにわたくしもすぐ行きますから」
終わりであった。
が、
「舞殿!!!頼んだぞーーー!!!」
「先輩！わたくしが睨んでるとはどういう事ですかね！あとでお仕置きですよー!!」
舞殿星見の怒声がコインパーキングに響き渡り今度こそ本当に弓箭猟虎の時が止まった。
（回避？上条先輩を仕留めて間に合うか？駄目、舞殿の能力はそこまで甘くない…だったらすべてを捨てて逃げる…そんなのダメすぐにアンチスキルに見つかってすぐに死刑…嫌だ…それは嫌です…絶対嫌です…一人で死ぬなんて…嫌です）
逡巡は一秒足らずだが上条当麻にはそれで十二分。
両者の間に合った距離を喰いつぶしお互いの手が届く、つまり上条の拳が届く距離。
この戦いが始まってから初めてのそして最後の上条の攻撃のチャンス。
「一人はもう嫌なんです！」
弓箭の虚ろな思考と視線で放たれた一発の銃弾は上条の右肩に確かに貫いた。
それでも彼は止まらない。
振りかぶった右の拳は血をまき散らしながら弓箭の左の頬に食い込み、弓箭は竹とんぼのように撥ね飛ぶ
「一人はもう嫌か…言えたじゃねーか。心配すんなよ弓箭、これは俺たちの喧嘩だもんな…ここには俺とお前以外はだれもいやしない俺もぼっちだっての…」
上条は銃創によって痛みと熱でうなされながらいますぐコンク

リートの床で眠りたいという誘惑に耐え、駐車車両の陰に隠した携帯端末を拾い上げ、大音量の設定で怒り狂う愛しい後輩にねぎらいの言葉をかける

「ありがとう、お前のおかげで勝てたよ…」

「先輩大丈夫ですか？大丈夫ですよね？怪我とかしてないですよね？」

「だーいじょうぶだって…舞殿…こりゃ殺し合いなんかじゃなくて喧嘩だよ…口喧嘩だけじゃどうしようもなくて…それでも相手に想いを伝えたいから殴り合う、友人同士ならどこにでも転がってる喧嘩だよ…」

舞殿星見はまだなんやかやと言っていたようだが、そこまで伝えて上条当麻の視界は暗転した。

ふたりぼっち　そのよん

消毒液と洗い立てのシーツ、そしてどこか死のニオイを感じさせる一室

コインパーキングでの一戦の後、意識を失った上条当麻は真夜中の病院のベッドの上で目を開くこととなった。

「またここにお世話になっちまったのかよ参ったなぁ……て、痛って！すんごいこれ！」

病院に運び込まれるのが慣れっこになってしまったわが身の境遇に、わずかながら呆れを覚えながらも、現状の把握をしようと身を起こすために右腕に体重を預けた瞬間、猛烈な痛みが上条の全身を駆け巡りジタバタと悶絶していると枕の影から一人の妖精さんが…

「ようやくお目覚めかよ？人間。ったく、全くお前ってやつはいつでもどこでも騒がしいんだな…少しはおとなしくしてろ」

「オティヌス、お前いたのか…」

「馬鹿かお前は？私の居場所はいつだってお前の傍にしかない。それはお前が一番分かっていることだろ？そんなことよりほら、神の裁定を受けたくはないだろう？さっさと横になれ」

黄金製のつまようじ。いやいやかつてこの隻眼の少女が奮った力の象徴…主神の槍そっくりのミニチュアを片手に獰猛に笑うオティヌス。

その笑みや言葉の荒々しさに反しその目は上条当麻の容態を心配し、気遣ってるように感じられ、上条は小さな家族の言葉に従い再び体重をベッドに預け、床に臥せたまま当初の目的だった現状の把握に努めようとする。

「悪いオティヌス、今何時だ？」

「午前5時前。もう一時間も経てば夜のとばりも上がるだろうな」

「俺の身体の状態は？」

「例のごとくあのカエル顔の医者が看たが全く問題ないそうだよ。頬の擦過傷はともかくとしてもだ…右肩を貫いた銃創はいうにおよばず脚をかすめた銃弾が血管や神経をかみ砕きその脚で走り回った結

果、病院移送まで死に至るだけの血を失っていたにも関わらずのこの診断。まったく相も変わらず丈夫な身体をお持ちなことで…ああこれは褒めてはいないからな」
「インデックスや舞殿たちは…」
　上条が頭をのせている枕に腰掛け理解者の質問に答えていたオティヌスがその問いに対し、親指を横にし左右に揺らすというハンドシグナルで答える。
　指の先にはそこにはパイプ椅子に腰かけ、疲れ果てた顔で舟をこいでる二人の美少女と一匹…三毛猫を抱える銀髪の魔導書図書館、インデックス。インデックスと同じ程度の小柄な体格とおかっぱ髪の少女、舞殿星見であった
「禁書目録もそこの小娘もつい２０分前までは起きていたんだ。貴様が意識を取り戻すまでは起きて付いてるんだ。と聞かなくてな」
「ありがたいというか…申し訳ないというか…はぁ」
「ふむ、その辺を反省できるようになっただけ成長したというものだろうか？伊達に二年生に進級したわけじゃないんだな」
「落第点にゲタ履かせてもらっただけのお情けだけどな…しかも執行猶予付き」
「お情けをかけてもらえるだけの事をしてきたのは素直に喜ぶべきことだぞ、理解者。」

　軽口を叩き合うだけの元気が戻ってきたのかそれとも理解者に愚痴を聞いてもらいたいぐらい弱っていたのか自分のことが自分で分からない上条当麻をオティヌスがさらに困惑させるようなことを言い出した。
「その、なんだ、済まなかったな」
「突然どうしたオティヌス、自尊心の塊みたいなお前が謝るなんて明日が世界の終りかな？」
「ふ、世界の黄昏はまだまだ先のはずだよ…じゃなくてだな……実は私はお前とあの弓箭とかいう女が戦ってる時、お前の服のポケットの中にいたんだよ…出てきてアドバイスをしなくちゃとも思ったんだ

が、なんというかここはお前が頑張らなきゃって思って…その…すまない。いややっぱりらしくないなすまない忘れてくれ」
早口で言葉を濁す魔術を極めた神様は格好がつかなくて、どんな顔していいのか分からなくて上条当麻から顔を背けた。
そんならしくない神様が愛おしくて上条当麻はそっと隻眼の少女の頭をなでる
「気を遣ってくれたのかよ、ありがとなオティヌス」
「気安いぞ…馬鹿者」
照れ隠しなのか形が崩れた尖がり帽子を必死に直そうとするオティヌス
この神様はきっと帽子なんかよりも自分の乱れた鼓動を整えるのにきっと必死になっているに違いない

一通りラブコメをやったところで、さっきから気になって仕方ない案件に声をかけることにした上条当麻。
「おい、弓箭…さっきからお前のツインテールがドア越しに見え隠れしてて気になって仕方ないから中に入ってくれないか？」
病室のドアをがらりと開けるとそこには左頬を腫らせた茶髪ツインテールの少女、つい数時間前に上条当麻と命のやり取りをした弓箭猟虎が所在なさげに立っていた。
「あああ、ええええと、そのお元気ですかね？いいいいいやいやすみません、自分で殺しかけといてなんだそれって話ですよね。すみません、すみませんやっぱりわたくし帰ります！すみません」
「オティヌス、ちょっと出てくるわ…インデックス達を頼む」
「私の身体だと肩は貸せないぞ？立てるのか？」
「ああ、大分血も体に戻って来たみたいだ…いてて、ほら弓箭ここじゃなんだし屋上で話をしようぜ」
「っはわ！ちょちょちょちょっと待ってくださいよ」
動揺する弓箭を無視して彼女の手を取り病室をあとにする二人

「全く殺されかけた相手にあそこまで気を遣うかね…まあそれで私も救われたんではあるのだが」
それを見送り頬をちょっとだけ膨らませるオティヌスであった

ふたりぼっち　その後

突然手を握られ恥ずかしいやら困惑するやらで抵抗する弓箭を引きずり、４月とはいえまだまだ寒さを覚えるロンリュウムの廊下を行く上条。

「わわわわ、分かりましたから！自分で歩けますから！手を放してくださいよ！というかですね、歩いて大丈夫なんですか？やったわたくしが言うのもなんなんですが？」

「手を離したら逃げるだろうが、お前は！傷の方はまあ気合だよ気合。自慢じゃないですが上条さん、こういう傷にはなれてるんでございますよ…まあ俺を気遣ってくれるなら暴れないで貰えたら助かるかな、正直脚と肩の傷がさっきから痛すぎて感覚無くなってきてる」

弓箭は平然とした口調で階段をずんずんと登る上条の顔を慌ててのぞき込むと、額にはじっとりと脂汗をにじませ顔は苦悶に歪んでいた。

「ばばば馬鹿じゃないですかね？あなた。なんでこんな状態で歩こうとか思ったんですか？」

「いやだから平気なんだって…それにお前が俺に話がありそうだったから…あの部屋で話するのもなんだろ？インデックスも舞殿起こしちゃうしお前も誰かに聞かれたくないだろうし」

「わたくしなんて無視すりゃ良かったんですよ…あなたを殺そうとした相手なんですよ。ああもういいですよ、ほら、肩！」

弓箭は強がる重病人の左脇に頭を潜り込ませ、肩を貸す形となった。

そして肩を借りることとなったツンツン頭は、

「女の子に肩借りるのって男のプライドとかそういうものが成り立たんのですよ、姫…」

上条の非合理でくだらない男の意地や理屈なんて一切合切無視して階段を登る弓箭は、ぽつりぽつりと口を開く

「わたくしなんか…無視…してくれれば良かったんですよ…今更どの面下げて上条先輩に会って…どんな言葉を伝えたら良かったんです

かね？」
「それでもアンタは俺に会いに来てくれた。どんなに顔を合わせるのが辛くたってどんなに言葉をかわすのが億劫だってこうして俺に会いに来て、話そうとしてくれたんだ」
「だって…あれで…お別れじゃやっぱり寂しいじゃないですか…せっかく先輩・友達・恋人になってくれる人が…ようやく現れたって思ったのに」
茶色のツインテールを揺らし、いたずらを思いついた子供のような顔をする弓箭。
彼女の言葉の意図が分からず上条は黙って聞いていた。
「上条先輩は昨日わたくしにどうして人との関わりを嫌がるんだって言いましたね？それでわたくしは『妹に裏切られ、暗部に身を落としたから』って答えましたよね。」
「ああ、そうだったかな？」
弓箭はちょっとだけ口を尖らせ拗ねたように抗議する。
「駄目ですよ、女の子は男の子に自分との会話はちゃんと覚えていて欲しいもんなんですよ。特にわたくしみたいなぼっちにはそういうのとってもとっても効きます」
「そそそそ、そりゃ済まなかった。悪い！この通りだ」
上条は右手で拝むようにして弓箭に許しを請う
そんな上条の様子がおかしくてたまらないというように少女は顔をほころばせる
「プププ、なんですかそれは。わたくしじゃないんですからそんなどもらなくたって。…で、話を戻すと実はあの時の話でちょっとだけ嘘ついてたんです。わたくしが他人と正面から関わらない理由」
「？」
「怖かったんですよ」
昨日彼女が上条に本当に告げたかった懺悔
「妹がわたくしの所から消えていって、肉親の妹にすら見捨てられるわたくしは何なんだって。そんなわたくしが他人に好かれるはずな

いって、きっと嫌がられるかまた見捨てられるかどっちかだって。だったら誰とも深く関わらず生きていこうってそしたらあんな辛い思いをしなくたっていい。そうだ暗部に関わってるから自分は友達出来ないんだ！上手く話が出来ないのだって仕方ないんだ！って境遇のせいだと思うようにして！」

弓箭の語気は少しずつ荒く、そして隠していた想いがさらけ出されていく

「空気読めないふりをしてごまかそう！相手から一方的に憧れられる存在になればいいんだ！なんて都合いいこと夢想して。そんなことしてるうちに嘘と本当の区別が付かなくなって」

「弓箭…」

「でも上条先輩に言われて思い出したんです。誰かと関わることは傷つくことなんだって。わたくしが他人を信用しない誰とも心を開こうとしない、だから誰もわたくしを信用しない。そんな当たり前のことすら認めれなかったわたくしの弱さのせいです。ずっとずっと分かってたんですよ、でも認めたくなかった…認めてしまうのが怖かったから…誰かのせいにしていたほうがずっとずっと楽だったから。それでも…それでも上条先輩にだけは嘘つきたくなかったから…本当のことを覚えていて欲しかったから」

自分の中で貯めこんでいたものを吐き出して吹っ切れたのか、それとも何か別の理由なのかは分からないが弓箭は底抜けに明るい声で階段の先を見つけ声を出した

「ほら上条先輩！がんばりましたね屋上にとうちゃーく。ですよ」

階段を登り切り屋上のドアを開けると、

「弓箭猟虎！首輪計画参加要項違反で逮捕じゃん。」

上条の目に飛び込んできたのは銃。銃銃銃銃銃じゅうじゅうじゅう

防弾用のジャケットにベストと各部に取り付けられたプロテクター、そしてその両の腕には学園都市の科学の粋が詰め込まれた最新式の自動小銃が握られたアンチスキルと武装ヘリが屋上と闇の明けきらぬ空を埋め尽くし、その砲口は扉の先、一人の少女に向けられて

いた
「両手をあげてゆっくりこっちにこい。抵抗はしてくれるなじゃん…総員、銃口は下に向けろ！相手は私たちが守るべき生徒じゃん！」
一群の中から上条当麻の学校教師でアンチスキルの部隊長を務める黄泉川愛穂が進み出て、弓箭の投降を呼びかける。
弓箭は上条をそっと降ろし、壁にその身を預けさせると上条に別れの言葉を告げる。
「上条先輩、お別れです。出会って一日足らずでしたけどわたくし…貴方に出会えて嬉しかったです。いつかまた出会えたその時は…その時は今度こそ本当のお友達になってくれますか？」
「おい、待てよなんだよこれ！弓箭！」
「舞殿が言ってたじゃないですか、私たち特別クラスの生徒たちは計画の一環で釈放されただけ…問題を起こせば当然統括理事長は許しはしない…」
言い終わるや両手を上げ黄泉川の元へ歩みだす弓箭
上条はそんな少女の後ろ姿を見てメキメキとありえない力で右こぶしを握る
「…んな」
悲鳴を上げる全身を気合で黙らせ立ち上がる。無理やりふさいだ傷口吹き出る血なんて意にも介さず弓箭よりもはやく黄泉川の前に立ちふさがって吠えて見せる
「ふざけんな！勝手に捕まえて勝手に放り出して意に沿わないからもう一回檻に放り込む!?お前ら何様のつもりなんだよ！」
「上条、気持ちは分かるがこれは計画で決まってることじゃん！ここは抑えてくれ」
「クラスメイトが捕まるって言ってんのに黙って見送るほどこっちは人間が出来ちゃいないんだよ！だいたいなんだ？たった一人の女の子連れてくるのにこんな大仰な人数と武器をもって！一方通行が決めたことなのかよ!?」
「……」
「気に食わない意に沿わない奴は暴力で押さえつける…それじゃあ暗

部使ってた時と何も変わらない…そんなことも分からなくなってんのかよ一方通行は！」
　上条と黄泉川…鼻が当たるのではないかと思うほど詰め寄る上条のきつく握った右手は四色…七色…いや白金の輝きを帯びだす。
「上条先輩、もういいですから大丈夫ですから」
「弓箭、お前逃げてんじゃねーよ！さっき言ってたじゃねーか友達になりたいって！いつかなんて未来になんかの話じゃない、あるかどうかもわからない仮定に身を任せてんじゃねえ！お前がどうしたいのかをお前の言葉で教えてくれよ！お前が望むんなら俺は学園都市と逆らってだってお前を守ってみせる」
「わたくしは…わたくしは…一人はもう嫌です！みんなと上条先輩とお友達になりたい！おしゃべりしたり休日遊んだり、恋をしたりしたいんです！」
「了解だ！後輩！」
　弓箭の想いを受け取った少年は凶悪な笑顔でアンチスキルの大軍に向き直る
「黄泉川先生、これは俺たちの我儘だって分かってる。ルール違反なんだってことも知ってる…それでも俺はこの我儘だけは貫き通すぞ！」
「上条、自分が言ってる意味が分かってるじゃん？統括理事会への反逆すればこの街の殺意がお前を削り殺すじゃんよ？」
「分かってる」
「弓箭猟虎は殺しの味を覚えた人食い虎じゃん？それでもお前はその娘を守るって言ってるんだな？」
「ああ」
「あの一方通行に逆らってても？」
「たった一人の少女も守れない生なんてこっちから願い下げだ」
　少年の決意を聞き黄泉川愛穂は呆れた顔で重たい息を吐く。
「馬鹿みたいな青春野郎にはかなわないじゃん…総員、撤収準備！予定通り順次ヘリに乗り込むじゃん！」
「黄泉川どういうつもりだ！許可なく上の命令を破棄するなんて正気

じゃないぞ！」
　アンチスキルの一人が予想外の黄泉川の命令に噛みつく。
　統括理事会の意を現場が無視するという異常事態なのだから当然と言えば当然の行動であった。
「もともと気が乗らないじゃん、生徒に銃を向ける命令なんて」
「そういうことを言ってるんじゃない！大体また弓箭猟虎が暴れ出したらどうするんだ！」
「その時は私たちが止めるじゃん…何度でも何度でも…不穏分子だから殺処分してめでたしめでたしなんて結末は認めるわけにはいかないじゃん！だから今日は撤退じゃん！」
　それから一刻、アンチスキル全部隊は散を乱さず規律を保ったまま病院屋上から撤収し、最後の兵員が消える頃には空に日の明かりがちらついていた。
「弓箭、もうお別れなんて悲しいこと言うなよ…」
「すすすすみませんでした上条先輩！」
「あ、でも俺も一つお前に嘘ついてたわ」
「へ？」
「友達になるじゃなくて俺とお前はもう友達だろ？」

スウィートホームに帰ろう！

アンチスキル撤退から2時間後の午前8時、上条当麻はビジネスホテルで朝食を食べ終えた旅行客のように慌ただし気に退院の準備を整えていた。

「何度も言うようだがね…君の右肩のトンネルは無理やり止血用ジェルをねじ込んでふさいでるとはいえ、学園都市の医療技術でも通常は数週間かけて治療していくもんなんだよ。そのへん君はどう思うんだね？」

それを呆れた様子で眺めているのはいつものカエル顔の医師。

その界隈では死体以外なら冥界から無理やりでも患者を連れ戻す冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）なんて異名で謳われた凄腕医師であるのだが、そんな専門家の忠告なんてなんのその我らが主人公、上条当麻はこう言って憚らない

「え？嫌ですよ。入院代いくらかかると思ってんですか？」

人の命は地球よりも重く貴重なのは議論の余地もない事実だが、さりとて人の命では明日の晩御飯は買えないというのもまた動かざる真実…流石は右腕が勝手に生えてくる男の面目躍如といったトンデモ理論である。

「いやはや君の身体の不思議さは十分理解してるつもりだったが、一番の不思議は君の思考形態だね…脳みそをもう一度調べてみる必要があるのかもしれない。ああ気休め程度だが鎮痛剤と止血チューブを渡しておくよ、なに心配するな、これはお得意様への私からのサービスだよ」

返す言葉を失ったのか冥土帰しは紙袋を上条に押し付け「君は血の気が多すぎる。健康な時にすこし献血に協力してくれないか」などと皮肉交じりの言葉を残しさっさと病室から出ていってしまった。

「まさか医師が患者に金がないからこんなとこにいられるか！などと言われるとはいささか同情の念を禁じ得ないな」

上条の服のポケットに隠れていた知恵の神様はそうぼそりと呟いた。

「おーインデックス、舞殿、弓箭待たせたな！」
一階受付フロアで清算を済ませ、正面玄関から手を振って出てくるツンツン頭の少年。
彼の後ろでは看護師たちが塩を撒くなどという科学の都においては忌避すべき習俗を行っているのは知らぬが仏。兎にも角にも馬鹿は今日も元気であった。
「とうま！うけつけっていうのはもう終わったのかな？病院内のレストランの品ぞろえは豊富だし私としてはもうちょっととうまが入院してても良かったかも。え、その紙袋何かな？お菓子？それともお肉かな？」
「先輩、経済事情が苦しいのでしたらわたくしが少々お貸ししましょうか？無理をされてお身体を崩されたら本末転倒ですので」
「おおおお金がないのでしたら、わわわたくしがお支払いしますよ。なになに心配しないでくださいよ。わたくしたちのお財布は将来的には一緒になるんですから、えへへ」
上条の持っている紙袋をさっさと取り上げ中をガサガサ漁るインデックスに、なぜだか知らないがお互いにメンチ切りあう後輩たち。
「弓箭、元はといえば貴方がやったこと…先輩に四の五の恩着せがましく言うまでもなくあなたが支払いをすべきでは？あと財布が一緒になるなどという妄言は今すぐ取り下げなさい」
「舞殿、上条先輩が言うならまだしも他人のあなたが口出しすることじゃねーんですよ！あと貴方とわたくし若干お嬢様キャラ被ってんですよ！さっさとヤンキー口調にでも鞍替えしやがりなさい！」
「ねーとうまーこのチューブ食べられるの？クリーム？ジャムかな？えーお薬？つまんないんだよ！」
舞殿がそこら中の車を持ち上げだし弓箭はどこからともなく拳銃を取り出しインデックスは犬歯をむき出しこちらに走りかかってきた。

◆

どうにもこうにも病院の前で血を見そうな展開にあたふたする上条を理解者はくつくつと笑う。
「クククなるほどなるほど、これは愉快な光景だな人間。今からでも入院しておいた方がいいのではないかな？」
「何余裕ぶってんですかね？この妖精さんは！あーーーーもう不幸だーーーー‼」

どうにかこうにか暗部屈指の実力者たちの争いを拝んで願って有体にいうなら土下座してなんとかおさめた上条当麻。
弓箭に撃たれた傷よりもインデックスに噛みつかれた頭の傷の方が深刻なのはココだけの秘密である。
そんなこんなの病院からの帰り道、昨日舞殿が漏らした一言が気になり舞殿に質問してみる…

「そういえば舞殿、昨日下宿先に届いた荷物を片づけたいって言ってたよな。なんか悪いな…こんなことになっちゃって…この連休もし手伝えることがあるなら何でも言ってくれよな」
「いえどうせ大した荷物もありませんしほんの一時間もあれば済む話ですよ、お気になさらず。でも、先輩がそういって下さってることですし少し甘え…」
「舞殿もこう言ってることだし上条先輩はぜーんぜん気にしなくていいんじゃないですかね？それよりも上条先輩はこの連休なにか予定があったりしますか？わたくしは上条先輩以外友達いないからすっからかーんなんですけどね！」
「先ほどは先輩の顔立てましたが余程死にたいんですかね？弓箭は？」
「そっくりそのままその台詞をお返しいたしますよ、舞殿」
「ああもうわかったから！上条さんが悪かったから二人ともいい加減仲良くしようよお願いよ！」
一難去ってまた一難、仲がいいんだか悪いんだかのこのコンビの一触即発に上条は勢いとオネエで乗り切ろうとするが、そういえばそも

そもの根本的な質問をもう一度繰り返す
「てかさお前ら、さっきから俺らと一緒に歩いてるけどうちの女子寮全然違う場所だぞ？大丈夫なのか？」
　上条の質問に二人の後輩は顔を見合わせ何すっとぼけたこと言ってやがんだこいつと言わんばかりの顔をしこう答えた
「先輩、まさかですが何も聞いてないんですか？」
「いやなんも知らんが」
「上条先輩、わたくしたち5人の下宿先って男子寮ですよ？」
　時が止まった…男子寮に5人の美少女をぶち込む。学園都市の非常識ぶりは散々理解してきたつもりだった上条だがまだまだ彼の認識は甘かった。
　なにせこの街はあの変態魔術師アレイスター＝クロウリーが生み出した最高傑作。そしてその後継者も恐らく常識などとは程遠く、そもそもそんなもの意に介さない人間に違いない。
　男女の垣根などはなから問うのがナンセンス。学園都市の闇はなお深く濃いのであった。
「「さあ帰りましょう私たちの家に！」」

幸せなら荷を解こう　そのいち

「このちびっこ教師！なんとか言いやがれ！」
「うううう上条ちゃん、朝っぱらからあまり大きな声でがならいでください。まだ昨日のお酒が残ってるんですから…先生はちゃんと聞こえてますよー」
マイクの性能を信用していないご老人の如く大声を張り上げ、携帯端末の向こう側の教師に抗議の意を表明する実質年齢９か月の高校２年生。
彼が足りない頭で何を考え何をそんなに怒っているのかというと、
「うっぷ、あー上条ちゃんの気持ちは分かりますけどですね…でもこれはもう決まった事なのですよー」
「うちの後輩たちを男子寮に住まわせるのは仕方ないんだろうさ！上の指示とやらで決められてそれを本人たちも納得づくだって言うんなら今さら俺なんかが嘴挟むような事じゃないんだってこともな！だけどな…」
携帯端末を握る手に力を籠め、それに併せて呼吸を大きく吸い込む。
「ねー！当麻先輩ちょっといいかな？僕の下着ここの棚に入れちゃってもいいのかな？ほら専用にわざわざタンス買うってのも不経済じゃない？ほらここちょっと見て欲しいんだけどさ」
八重桜はヒラヒラと自身の薄桜色の布きれを片手に上条を手招きする
「ウチの家にまで一人放り込むことないんじゃないですかねー!!」

◆

時をさかのぼること３０分前、昨日の朝の出掛けに舞殿が破壊したアパート据え付けのおんぼろエレベータが早くも復旧してる事に驚

嘆を覚えつつ、それでも閉じ込められるの御免と階段を上る最中、インデックスは舞殿たちに声をかける
「ねえねえほしみやらっこは何階の部屋になるのかな？」
「監視の関係上ひとまとめになっているとかで、５人とも７階の部屋を用意されていると聞いています」
　上条の脳裏にある種の疑念がよぎる
（あれ？七階ってそんなに部屋空いてたか？まあその辺の手違いなんてあるわけないよな…きっと卒業生の退寮者が多かったんだろ…）
　よぎった疑念は即座に霧散して消える。とはいえそれが現時点で分かったとしても上条に何が出来るというわけではないのだが
「わーそうなんだ！わたしもとうまも同じ七階なんだよ！じゃあ今度私やスフィンクスが遊びにいってもいいかな？」
「ええ構いませんよ、インデックスさんなら大歓迎ですよ」
「わわわ、私も暇なのでいつでも構いません。あああの携帯の番号交換しませんか？」
「え、ホント！わーい！やったんだよ！スフィンクス！」
　スフィンクスをグルグル振り回して喜びを表現するインデックスの無邪気な様を見て水を差すのは悪いとは思ったのだが、インデックスの保護者として上条は一応釘を刺しておく。
「これこれインデックスさんや舞殿たちは忙しいんだぞ、お前がホイホイ行ってたら迷惑になるだろ。こんなんじゃまだまだインデックスは京都に連れていけませんな」
「あ、とうま！そこはかとなく馬鹿にしてるね？私だってお茶漬けに釣られたりなんかしないんだよ！」
「いいやお前はお茶漬けが出てくるまで深夜まで粘るタイプどすー！」
　そんなやり取りを眺めている舞殿は笑いながらちょっとだけ怒った真似をして
「もう先輩、わたくしが言ったのは社交辞令なんかじゃないんですからね…インデックスさん本当に気軽に訪ねてください。美味しいケーキでも用意してお待ちしていますよ」

「なんか悪いな舞殿も弓箭も…」
「いえいえ、わたくしも何かとお世話になるかもしれませんしね」
見事なハーモニーを見せる舞殿と弓箭。なんだかんだいってこの二人、仲が良いのかもしれない。
そうこうしているうちに七階まで登り切り、上条は自室の前で立ち止まった
「ここがうちの家だ。なにか分からないことがあったり足りないものとかがあれば気軽に訪ねてくれよ、じゃあまたな」
そう言うと上条は自室の鍵を鍵穴に差し込み開錠し、ドアノブをまわすと…ガチャン
予想外れの金属音、上条は虚をつかれさらに…ガチャン。
今度は何もしていないのに扉の奥から金属音。
泥棒かはたまた魔術師の攻撃かと警戒した瞬間、
「あ、おはよ～おかえり～当麻先輩！ケガ大丈夫でした？あ、猟虎は当麻先輩にちゃんと謝ったの？親しき仲にも礼儀ありだよ、大体何がどうしたら入学初日で自分の先輩を拳銃で撃ったりするのさ」
オープンザセサミでアブラケタブラとばかりに上条の部屋の中からあら不思議！扉の名から眠たげな眼をこすりながらタンクトップに細身のジーンズを履いたモデル体型の美少女が、
「や、や、や、八重　さささささ桜！あああなたこんなとこで何を…」
上条の疑問を代弁するかのように舞殿と弓箭がまた見事なハーモニーで口にする。
やはりこの二人仲が良いのかもしれない。
「いや、あの打ち上げの最中、当麻先輩の友人って人から『悪いけど部屋用意できなかったから、ルームシェアで勘弁して欲しいですたい』って連絡入ってさ…だから良いですよって返答したらこの部屋の鍵貰って部屋開けてみたら当麻先輩の部屋だったってわけ、いやー参ったよね。」
「おーけおーけー！ちょっと待ってろ八重。今すぐあのシスコン軍曹追い出してお前の部屋を勝ち取ってやるからな！おら土御門！今日

は死ぬにはいい日だよな！今すぐ出てこいや！」
　上条は玄関を回れ右して、すぐ隣に居を構える親友の家に押し入ろうとしたらドアに一枚の紙が
「しばらく英国に行ってくるんだにゃー」
　上条は無言でその紙をむしり取ると右の拳でぐちゃぐちゃと自身の怨念をねじ込むように握りつぶした。
　それでも手はないかと国際電話に掛けるが繋がらず、最終手段として恩師に泣きつき冒頭へ

「でもですよ、上条ちゃんは既にシスターちゃんとも同居してるんですし今さら女の子１人増えても気にならないんじゃないですかー。先生頭が痛くて全然いい解決案がでませんよ、それじゃおやすみですー」
「インデックスと八重じゃ全然違うでしょが！主に胸部装甲が！んなもんと同居生活とかこっちの身が持たんわけですよ！あれ聞いてます先生！あ、クソが切りやがったよあの不良教師」
「あれ、なぜかな？こっちに流れ弾が当たったんだよ…」
　今のご時世、女性に聞かせたら一発で社会的地位を失ってしまうようなセクハラトークを美少女達の前で繰り広げる上条当麻。しかしご安心めされい！当の後輩たちはこの有様。
「不公平です…やってられません…不公平です…やってられません…」
「先輩と後輩が同居…なんだこの少女漫画世界…やっぱリア充違います…甘くて苦いマーマレイドです…」
　上条家の床にへたり込んで呪詛をぶつぶつ唱える舞殿と弓箭
「ほらほらそういうの嫌われるよ二人とも。さっさと家の荷解きやってきなって。それが終わったら海月やフレンダも呼んで一緒にお蕎麦食べようよ」
　男前の美少女はそんな腐りきった床敷きマット２枚を追いちらし、いまだに携帯端末に怒鳴ってる上条の手から端末を奪い取る。

「もう僕なら大丈夫ですから…当麻先輩もお疲れでしょうしそこに座って休んでてくださいよ。あ、コーヒーでも煎れましょうか？」
「大丈夫って…お前は嫌じゃないのかよ」
「何がですか？」
　桜色の髪をした少女は大人っぽい雰囲気をどこえやら可愛く小首をかしげる
「いや何がって男と同居するのがだよ」
「ふふふ、いやー当麻先輩に襲う度胸はなさそうですし…それに胸が大きいって褒めてくれたしまあいいかなって。それより砂糖いくついれます？1つ？了解！あ、インデックスちゃんも手伝って！」
　そう言いのこし彼女はさっさと台所に引っ込んでいく、そして残された童貞少年上条当麻
「オティヌス…俺が気にし過ぎなのか？それとも八重が変わってるのか？智慧の女神は答えてくれるか？」
「おい、人間。胸がデカい方が好みなのか」
　駄目だこりゃであった

幸せなら荷を解こう　その荷

八重桜の荷解きと収納はほんの３０分足らずで全てを終えた。しかし未開封の段ボールがあと２つ…

収容所から出て来たばっかりだから荷物なんて殆どないけど、よくよく考えたらいらないものもあるし明日捨ててきちゃいますね。と本人は笑っていたが、それでも女の子ならもうちょっと物入りなのではなかろうか？などと考えを余所に、八重本人はインデックスと一緒に引っ越し蕎麦を絶賛料理中であった

「さくら、なんで引っ越ししたらご近所さんにお蕎麦を配るのかな？」

「僕も詳しくは知らないんだけど、私と細く長く近所付き合いしましょうみたいな理由だったと思うよ？」

台所から聞こえるぐらぐらと湯が煮え返る音、それと共に日本人とイギリス人の引っ越し蕎麦についての異文化交流。

リビングで何ともふわふわと煮え切らぬ二人のやり取りを聞きながら、上条当麻は困惑していた。

（あれあれ？なんにもないまま日が落ちちゃいましたよ？これはどういう事なんですかね？上条さんの事だからここらで一発ドイツあたりに招聘されて同棲騒動なんて有耶無耶になると思ってたんですけど、神様は何でこういう時だけトラブル持ってきてくれないんだよ！あー不幸だ）

「……い」

なにせ女子高生と同棲なのだ。ちょっと考えただけでも困りそうな案件が山積みである。

ここでうひょー！ラッキー！なんてのんきに喜べる奴はよっぽど幸福な人生を送ってきたに違いない。

「……ぱい」

そもそも論ではあるが男子寮に女の子を住まわせるってどうなんだ？一方通行の野郎殴り過ぎて頭がおかしくなったんじゃないか？

今度会ったらもう一発くらい殴ってやれば正常に戻るだろうか？

なんて愚にもつかない実行不可能な想像が浮かんでは消える。つ

まり末期症状。完全に呆けていた。
「当麻先輩！」
「っ！ふぁい！」
不意に耳朶に響く自身の名前。
たわいもない思索は途切れ意識は現実に舞い戻る。
「当麻先輩、ひょっとして寝てました？すいません起こしちゃって」
「あ、いやーちょっと寝てたかな…でも気にすんな。で、どうしたんだ？」
意味もない嘘をつく上条。視線はきょろきょろ定まらず、何故か声が上擦る。
（落ち着け！落ち着け！上条当麻。アリサがこの家に泊まった時は平気だっただろうが！つまり経験者、こんなことぐらいで動じる必要なんか全くない！）
「おい童貞、お前ちゃんと起きてただろうが、つまらん嘘つくなよ」
「おいオティヌス！」
上条の上着のポケットからひょこりと顔を出し、狸寝入りを八重にチクる陰謀の神オティヌス。
なんとなく恰好がつかなくて変な笑いが込み上げる。
「はははは、そうだっけ？ああそういえばそうね上条さん起きてたねうん」
「えええええええなんですか当麻先輩！この人形！凄い精巧な上に今喋りましたよね!?」
「え？そっち」
あらためていうまでも無い事だが、普通の高校生だのなんだの言ってる上条当麻の常識もだいぶズレている。
そりゃそうなのだ。上条当麻の狸寝入りより１５センチ前後の美少女人形がよどみなく動き、喋ることの方がどう考えてもインパクトが強いに決まってる。
八重は上条のポケットからひょいとオティヌスを持ち上げる
「工科標本（アナトミーメカトロニクス）ですか？それにしてはサイズが少々小さいし、あの計画って蜂の女王様がぶち壊したんでしたっけ

？はーよく出来てるなー」
「おい！何をする！コラ離せ！気安いぞ小娘！おい理解者、わたしの危機だ！どうにかしろ！」
「すまん、詳しい事は後で話すからオティヌスを離してやってくれないか…それに人形じゃないんだ」
「あ、はい！すいません」
　上条のお願いに八重は素直にオティヌスを床に降ろす。
「ぜーぜー、愛玩動物の寿命が短い理由が分かった気がするぞ…」
　息が切らしながら全能の神はいそいそと安全地帯（上着のポケット）に潜り込んでいき、頭も見えなくなった。
　上条はその様がなんとなくおかしくてくすくすと笑う。
　笑ったのと魔神様から「覚えていろよ」などとありがたい言葉を頂戴したので妙な緊張もほぐれ、上条は八重桜が自分の名を呼んだ理由を尋ねる。
「で、お前は俺になんか用があって呼んでたんじゃなかったのか？」
「そうだったそうだった！すいません僕忘れっぽくて。お湯も沸騰してあとはお蕎麦を茹でるだけなんで、その前にアイツ等誘ってこようと思うんですけど？インデックスちゃんも行きたいっていうし申し訳ないんですが当麻先輩、お留守番しててもらえませんかね？」
「とうまも行く？」
「うんにゃ…お前らだけで行ってきな。あと八重これからずっと一緒に住むんだから、そんな俺に気を遣わなくてもいいんだぞ？」
「ずっと一緒に…うん…はい、そうですね！了解しました！それじゃ行こうかインデックスちゃん」
　右手で軽く敬礼のポーズをとったかと思うと素早く身を翻し、インデックスの手を取り部屋を出た
　その背中を見送る上条当麻も気を取り直し、
「よっしゃ！いっちょ上条さんも姫神直伝サクサク天ぷらでも作りますか！明日の昼飯にもなるしね！ッ！痛った！なんか蹴った！」
　いつもの不幸を通常運行し、上条は八重の持ってきた廃棄予定の段ボールを足の小指で見事に引っかけた段ボールは無残ひっくり転げ、

梱包が十分でなかったのか中のモノが床に散乱する
「あー不幸だ―。八重が帰ってくる間に詰め直さなきゃな…」
床に散らばってる多くは紙の束…いや多くは手紙だろうか？
悪いとも思いつつも自然と上条の視線は文面の捉えた。
「狸寝入りの次は手紙の盗み見か、随分と趣味がよろしいことで」
「分かってるよ！」
先ほど人形扱いされたことに腹を立てた妖精さんはポケットのなかから皮肉交じりの言葉をぶつけてくる。
それを無視し、文面に目を戻すとそこにあったのは八重がかつて在籍したであろう学校のクラスメイト達からの惜別の手紙。一つも二つも同じ事とばかりに他の手紙も盗み見るがまた同じような内容。次も次も次もその次も…
ぶちまけた段ボールに目を戻すと手紙だけではない多数の寄せ書きの色紙の束。
「これが二箱全部かよ…」
「そんなに不思議がることは無いだろう？お前の後輩たちの素性と任務の性格を考えたらひと所に留まってる方がありえない。普通に考えたら転校と入学を短期間に繰り返すに決まってる。小娘の異常な私物の少なさもそのあたりが原因と言ったとこだろうか？」
「オティヌス、あいつこの段ボール箱２つとも捨てるって言ってたよな」
オティヌスの言葉を頭では理解しても心が納得しようとしない。
あの八重桜という少女はいったいいくつの別れを体験したのだろうか？いったいいくつの諦観を味わったのだろうか？暗部だから…任務だから…人を殺したから…そんな機械的な理由ですべてを割り切れるような人間であったならばよかったのだろう。学校など一時の止まり木に過ぎないと渇いた意見を言えるような人間なら良かったに違いない。ただ彼女がそんな味気ない人間でないことはこの２つの段ボール箱が証明していた。
「それを決めたのはあの小娘だぞ？そこに介入するのは親切のつもりかもしれないが大きなお世話でしかないと思うが？」

「でもオティヌスは俺がどうするのかなんて最初から分かってるんだろ？俺の理解者だもんな」
小さな魔神は口の端を持ち上げて不敵に笑う。
「違いないな、人間」

それから１０分後、インデックスと八重桜は玄関のドアを開け快活な声で帰宅の挨拶をして。
「ただいまなんだよ～とうま！」
「ただいま戻りました、当麻先輩。あいつらあと１０分ぐらいで来るそうですよ！全くフレンダの奴には困っちゃいましたよカレーサバ蕎麦にしろって…あれ当麻先輩？また寝ちゃいましたか？」
返事がないことに不信がり、リビングに上がるとそこには段ボールの中身をぶちまけて中身の手紙を収納棚にぶち込んでいる上条当麻とオティヌス。
「あー悪いな。インデックス、八重ちょっと手が離せなくてな。あれ？これサイズ合わないぞオティヌス」
「全くお前は粗雑すぎるこうやって…マジか？入らんぞ！」
「ちょ！無理やりこじ入れようとすんな！オティヌス。前から思ってたがお前は魔術も性格も力ずくすぎるぞ！こりゃ駄目だな、明日新しい棚でも買ってくるか？」
色紙いっぱいに書かれた別れの寄せ書きがを相手に悪戦苦闘するおせっかい二人組。
「このお馬鹿とうま！女の子の荷物勝手に開けちゃったの？マナー違反なんてもんじゃないんだよ！」
「見ちゃいましたか…あはは…いやだなー当麻先輩…もういいですって、それ捨てちゃいますし。どうせ邪魔でしょそんな物」
八重桜の顔から笑顔が消える。
「それでも捨てれなかったからここにあるんだろ？家財なんかより衣服や宝飾なんかより、ずっとずっと大切だってお前は思ったから捕まろうがどうなろうがお前はこれを抱えてたんだろ？」
「でもきっと邪魔ですって、そんな大量な思い出」

「いいじゃねーか邪魔だって。きっとそれも含めていつか美しく感じる時だって来るよ。俺にはお前の過去なんて分からない、それでもお前がここまで抱えてきた過去も含めてお前と一緒に暮らしたいよ、俺もインデックスもオティヌスも」
「忘れちゃった方がきっと楽ですよ…」
「そうかもな。それでも面倒抱えて喧嘩して泣いてそして笑って……ああやっぱ駄目だこりゃ、八重明日みんなでお前の買い物いくぞ！ここにある収納じゃ全然足りねーよ！」
「どうして…そこまでするんです…捨てるって言ってるんですよ僕は」
　八重桜の顔は泣いていたのか笑っていたのか。
「知ってたか八重？家族ってのはめんどくさいもんだよ…今日から俺らの家族だろ？お前も」

　彼らは知っているだろうか引っ越し後の隣人に配る蕎麦の意味を
　貴方の「傍」に細く長く一緒にいたい

つまらないものですが　そのいち

第十五学区ダイヤノイド、学園都市屈指の巨大複合商業施設。
そこに立ち並ぶのは一般学生たちにはなかなか縁のないセレブでゴージャスな品々を売り物にするセレブでハイソないわゆるブランドショップと言われる店舗の数々。
そんな華美な雰囲気に少しだけ場違いな中学生が二名。
「うわ！見てごらんよ初春！これ！こんなキーケースが１５万円だって！人の皮でも使ってのかな～」
「ゴホン！ん…」
「ちょっと佐天さん！大きな声でそういうこと言わないでください、ほらお店の人がこっち見てますよ！ひぃ！明らかに私たちにプレッシャーかけてきてますって…大体人の皮使ってたら高級ってどういう理屈なんですか？」
ショップ店員に睨まれているのを気にも留めず、感じたことの推敲を一切せずに口に出しちゃう快活でありふれた普通の女の子、柵川中学二年生の佐天涙子。
それを小声で窘めているのは同じく柵川中学二年生、頭につけている花をかたどった髪飾りが特徴的な少女初春飾利。
なぜごく平凡な中学に在籍する中学生二人がこんなとこにいるのかというと、
「うー、進級を祝ってみんなでちょっと大人なショッピングしようって言ったのは私なんですけど、やっぱり私たちにダイヤノイドは背伸びしすぎですよ。はやくケーキでも食べて、私たちの身の丈に合った場所でお買い物しましょうよ」
陳列されてる商品の値段札と招かれざるお客様へのショップ店員の物言わぬ雄弁な視線に耐え切れなくなったのか初春は半ば泣きべそをかいていた
「全く初春は。私たちは悪いことしてるわけでもないんだからどんと構えてりゃいいんだよ。そ・れ・に！今帰っちゃったら、ほら！御坂さんが困っちゃうでしょうが！」

しっかりしろ！と初春の背中を叩くと無能力者の少女はいたずらを思いついたような表情で、はす向かいのメンズ向けブランドショップ、二本残った爆弾起爆用の電線を前にした爆弾処理班のような顔で両手に商品を持ち、あーでもないこーでもないと頭の先から煙を出している常盤台中学制服の少女を指さす。

「やっぱり無難なのは財布…いや、これは絶対趣味があるわよ。茶色…白…いやまて！黒って手もあるわ！不味いわ…あいつの好みとか私全然分かんないじゃない」

ついにぶつぶつと独り言まで言い出したのは常盤台の大看板、学園都市序列三位『超電磁砲』こと御坂美琴である。

お嬢様学校常盤台の学徒ということで店員から冷やかし扱いはされていないが、違った意味で奇異の視線を向けられていた。

「御坂さん、上条さんに渡すプレゼントは見つかりましたか？」

「うひぃ！あああさ、佐天さん！ご、誤解なのよ！これはあいつへのプレゼントとかそういんじゃなくて、そう！パパ…じゃなくて父への贈り物なのよ！」

「み、御坂さんここ若者向けメンズブランドですよ」

（まったくもう可愛いなぁ）

聞いてるこっちが恥ずかしくなってるようなあからさまな嘘をこの聡明な先輩が余裕なく口走ってることに口の緩みが止められなくなってる佐天。

御坂の嘘をバサリと切り捨てる初春。

そんな3人のやり取りを聞いていられなくなったのかツインテールの常盤台生は現れた。

「お姉様、幼稚園児でも分かる幼稚な嘘はおやめになって、素直にあの殿方へのプレゼントを買うと仰っていただけた方がこちらとしてもめんどくさくなくて助かりますの」

「あれ白井……さん。もっと上条さんの件に噛みつくと思ったけどそういうの止めたの？」

「佐天！いい加減呼び捨てにしてくださいな。それとあの殿方につい

てお姉さまにウダウダ言ってももうどうしようもありませんわ。さっさと済ませって貰った方がこちらの精神衛生上良いというもの。それにあの殿方にはわたくしも懇意にさせていただいているのでこの際、お姉様の贈答に相乗りさせていただきますの」
「ちょっと二人とも違うって言ってんじゃない！てか黒子あんた…」
ツインテールの常盤台生、白井黒子は御坂美琴の抗議をさらりと受け流し、陳列棚に目を向ける
「それでお姉様はどのようなものを送ろうと考えてらっしゃるのですか？まさかファンシーグッズを送るなんて言わないでくださいまし」
「なによ可愛いじゃない！そんないい方しなくたって…うーん、やっぱり日常的に身に付けてもらえるものがいいわね…指輪とか」
その場の空気がグニャリと歪む。
顔を真っ赤にする御坂、それを聞いて凍り付く三人。
「み、御坂さん…」
「あはは、ちょっと重たすぎですね」
「お、お姉さま流石に物事には順序というものが…」
三人の表情の色を見て電撃姫の意見はオセロのようにひっくり返る
「な、なんてね！なんちゃって！そうよねやっぱ指輪なんておかしいわよ！じゃあネクタイピン！あるいはカフスボタンなんてどうよ？」
言うや否やふらりと御坂を歩き出す。
「悪くはないですけど上条さん学生服でしたよね…」
「カフスボタン…御坂さんやっぱり結婚式にちょっと重心傾いてませんか？」
「あの殿方がドレスシャツを着る機会があるようには思えませんが…」
またしても自分の意見へ駄目だしされていい加減焦れだす御坂
「もうなによ！アレもダメこれもダメ！じゃあなんならあいつは満足するって言うの？」
「お姉様ちょっと落ち着いてくださいませ！あの殿方の服や装飾の好みとか…趣味はご存じないのですか？」

ゴミ箱に捨てていたパーカーを愛用する上条当麻に服の好みなんて考えるだけ無駄なのだが、それはそれ。
御坂はもう一度その優秀な脳細胞をフル回転させて彼の着ていた服、趣味などを思い出そうとする。
「学生服を着てるイメージしかないわね…」
「こりゃ駄目ですわ…」
４人は一斉に首をがくりと落とす。そこへ、
「あらぁ？奇遇じゃない☆」
蜂の女王は舞い降りる

つまらないものですが　そのに

「こんなとこでどうしたのかしらあ、御坂さん？」
　ショッピングを楽しんでいた御坂御一行様に声をかけたのは他でもない御坂美琴の天敵。
　瞳に映る十字形の星に蜂蜜色の長く美しい髪、中学生離れした美貌と肢体、そして耳の奥をとろかすような甘ったるい声が特徴的な常盤台中学のクイーンこと学園都市序列５位食蜂操祈であった。
「食蜂!?あ、あんたこそダイヤノイドに何か用でもあるっていうの？」
「御坂さんったら全くもってお馬鹿さんなんだゾ？ダイヤノイド下層階にいるってことはあ～ブランド品を買う以外の用なんてなにかあるのかしらあ？」
「んぐっ！」
　冷静に考えたらまるっとそのまま食蜂の質問にブーメランなのだが、上条当麻へのプレゼント選びでニューロンをいくらか破損させてしまったのか、冷静な思考力を欠いた御坂は食蜂にいいように言いくるめられ絶句してしまう。
「あ、食蜂さんだ！お久しぶりです！ほら見てみなよ初春。やっぱお嬢様はこういうとこで買い物するんだよ」
「ほわわわ、やっぱり常盤台のお嬢様は気品違いますね佐天さん！」
「あのう…佐天も初春も最近私やお姉様も常盤台中学の生徒って事を失念してしまっているのではないですの？」
　キラキラとしたお嬢様オーラをまとった食蜂の登場に色めき立つ柵川の二人とその二人の反応にそこはかとなく引っ掛かりを覚える白井黒子。
　だが一般庶民のお嬢様像とはあくまで薔薇や百合や十字架であって、短パンやゲコ太、変態ではないのである。一般イメージと実情の乖離は世の常なのだ。
「わ、私だってハンカチとかシャンプーとかそういうのはちゃんといいの使ってるのよ？のべつまくなしゲコ太グッズ買いあさってるわけじゃないんだから」

お嬢様というブランド自体に格段興味はないのだが、食蜂と比較されてそういう評価を頂戴するのは不本意だったのだろうか？

聞いてもいない自己アピールを始める御坂。

「ウプププププ、脳筋でお子ちゃま趣味の御坂さぁーんを基準に常盤台生を見たら誰だってそんな反応するんだゾ。私も特段お嬢様ってレッテルにこだわってるわけじゃないんだけどお、御坂さんもこれに懲りたら自販機を蹴飛ばしてジュースのただ飲みなんてマネはやめた方がいいわよお」

ざまあないとばかりに勝ち誇り高笑いをする食蜂に御坂の自制心がプツリとキレる。

「あっッッッ‼‼？この見栄っ張りのキンキラ惰乳が！そんな他人の目ばっかり気にしてるならもうちょっと運動して体型の維持にも気を遣ってみたらどうなのよ！ていうかアンタ中学生でブランド品ばっかり買い漁るってどうなのよ枯れすぎじゃない？アレアレアレ～？やっぱあんたってばＢＢＡなんじゃねーの？」

「はぁ？はぁ？はぁ？御坂さんったら何を血迷ってるのかしらぁ？いきなりキレ出すってカルシウム足りてないんじゃないの？だからいつまで断崖絶壁胸部ななんだゾ⁉」

「うし、殺す！人のコンプレックスを気軽に刺激した自分の愚かさを後悔しやがれっての！」

「やってみなさ～い！御坂さんへの脳へのアクセス手段は既に解析済なんだゾ！だいたい誰がババアだっての復讐するは我にあり！」

本当に見るに堪えない見苦しい争いを繰り返す、常盤台を代表するレベル５のお嬢様たち二人を見るに堪えないとばかりに額に人差し指を当て目を伏せ形のいい頭を振るばかりの黒子。

目の前の惨状に脳の理解と処理が追い付いていないのかただ口をぽかんと開けて、呆然とする佐天と初春。

そう。彼女たちは一つ失念していた。

食蜂操祈がいかに美しかろうが、ブランド物を身に付けていようが、彼女もまた御坂や黒子と同じ穴のムジナだということを。

……キャットファイトをはじめて２０分。外野はおろか自分た

ちすらこのバカげた争いに倦みだし始めようやく講和交渉が始まった。
「そ、それでぇ～、ゼヒー、み、御坂さんはあ～、ゼヒー、あの人の進級祝いにい～、ゼヒー、プレゼントを選んでたってわけなのねえ～、ああもう限界！冷たいものでも飲みながらあ～、ゼヒー、ちょっとそこの喫茶店で話し合わないかしらあ？白井さんちょっとそこまで飛んで欲しいんだゾ」
「へへへへぇ～、あ、あんたにしてはいい案じゃないの…いいわよ、乗ってやるわよ。黒子、そこまで飛ばしてくれないかしら？」
「駄目ですの…お二人とも反省なさいな」
黒子の言葉を聞いた二人は親に見放されたような顔をしたかと思うと、すぐに頭を切り替え疲れ切って鉛のようになった身体を押しノロノロと喫茶店に歩み出す二人。
争いの愚かさはきっとやってみて初めて分かるものなのであろう…。
「あのー白井さん…私たちどうしましょうか？」
「放っておきなさいな。どうせもうしばらくかかるでしょうから終わったら連絡すれば済むことですの…それに…せっかく第十五学区まで来たんですからわたくしたちも甘いものでも食べませんこと？」
「それグッドアイディア！いいですね！白井…さん」
「佐天！」
「はいはい！分かりました！白井！これでいいんですよね！」
「敬語が気になりますがまあそれでよろしいですの…食べた後はわたくしもあの殿方への贈り物を選びたいので協力していただけますか？」
「わー白井さん、なんだかんだ文句言ってますけど上条さんに気があるんじゃないんですか？」
「初春！そんなこと言うのはこの口ですの？この口ですの？」
「いひゃい！いひゃいですってば～白井さん。はんしぇいしてますから許してくらしゃい」
「ハハハ、そりゃ初春が悪いってば。でも上条さんってなかなかカッ

コいいですもんね」
「あれあれ？佐天さんもですか？」
　女の子は三人あつまりゃ姦しいを地でいく三人娘はレベル５コンビを置いてさっさと別の飲食店に向けて歩き出す。そしてそれと入れ替わるように…
「たくもう！女の子の買い物って奴はどうしてこう長いんですかね？どれもこれも似たようなもんだろって言ったら舞殿とフレンダがブチ切れだすし参るよな。挙句先輩はどっかで待っていてくださいって！俺の存在意義って何なんですか？だいたいですね上条さんにこういうお高いお店は肌に合いませんのことよ、せいぜい激安スーパーとかさ」
「いや、そりゃ怒られるだろうし今後の為に女の扱い位は覚えておけよ、人間。まあ私はお前がいるなら激安スーパーだろうが無人島だろうが構わないが…まあいいさ、少々喉が渇いたからそこの喫茶店でお茶でも飲まないか？」
「そりゃいいな俺たちだけ先に小休止してようぜ、オティヌス」
　レベル５×２と幻想殺しが交差する時、お買い物は始まる！

つまらないものですが　そのさん

「それでえ、御坂さんはあの人に何をあげようとしてたのか、そのへんのことを隠ぺい力を発揮せずに教えてくれないかしらあ？すいません、アイスティーおかわりなんだゾ！」
　そう問いかけるのは蜂蜜色の髪をした少女。
　表面いっぱいにしずく浮かべ茶褐色の液体で満たされたグラスを傾け、喉を鳴らしながら内容物を嚥下していく様が下品だな。と思いつつも疲労と渇きには勝てぬと構わず飲み干したのはつい先刻、それでも足りぬと店員にアゲインを要求する。
「いやーそれがなかなか。選ぶもの選ぶもの黒子たちに否定されて…つかあんたそんな喉から膀胱に直通しそうなもんよくがぶがぶ飲めるわね」
　そう言う御坂美琴もオレンジジュースを飲み干し、グラスに残った氷をガジガジとシロクマのように齧っている真っ最中。この二人が天下のお嬢様学校のツートップだというだから諸兄の思い描くお嬢様像が如何に儚い幻想か知れようというものである
「うるさいわねえ、そうやってえすぐ下ネタにつなげるのは止めてくれないかしらあ。そ・れ・に！周りの意見はどうでもいいわよお。私は御坂さんが彼に何をあげたいのか聞かせて欲しいって言ってるんだゾ？」
「…わ」
「え？ごめんさいもう一回言ってもらえないかしら」
「だから指輪…」
　快活な御坂らしくもなく蚊の鳴くような自信なさげに告げる。心なしか彼女の頬も朱を帯び、指先どうしをこねくり出している
「……」
　その答えに対し沈黙を保ち真剣な眼差しで御坂を見つめる食蜂
　そしてそれに耐えきれなくなった御坂は
「分かってるわよ…彼女でもないのに指輪はない…ないのよね」
「すっごい素敵じゃない！いいわよお、指輪！シルバー？プラチナ？

ホワイトゴールドも素敵だわあ！それよりも御坂さんやるじゃないの、あなたの事だからてっきりファンシーグッズでも送るのかと思ってたわあ」
「そ、そうかしら？そうよね？変じゃないわよね？指輪。いいわよねやっぱり女の子の夢じゃないそういうの！ほんというとこっちから渡すよりも貰う方が…」
「そうよねえ…指輪の内側にお互いの名前掘ったりしてとか乙女力が昂るわあ」
「食蜂あんた分かってるじゃない！私もそれいいなって思ってハワイでキューピッドアローに立ち寄ったときに作ってもらった事あるの、ほらほらこれ見てよ！ペアリング！可愛いでしょ！」
　胸元から対となったタグリングをシルバーの鎖で結わえネックレス状にしたものを取り出し、対面に座る食蜂に事細かく説明しだす脳内ピンクのビリビリ少女。
　不意に現れた望外の同意者を得たことによって友人たちの忠告はどこへやらと飛んでしまった様子である。
「あーあ御坂さんに指輪は先越されちゃったしい。私は何をあげようかしらあ。上条さんが今何を欲しいのか知識力を発揮して私に教えてもらえないかしら、御坂さん」
　その御坂の様子がおかしかったのか、それとも羨ましかったのかどこか遠くを見るように目を細めそして軽く笑った。
　きっと自分も目の前の少女のように素直に恋の事で悩みたかったのかもしれない。
　かつて自分が選んだ選択を後悔したことはない。きっと自分は何度同じ場面を繰り替えしても、瀕死のあの少年を救いたいと能力を使う事を選ぶだろう。
　それでも。それでもである。感情の部分が割り切れない。どうして自分は今の御坂美琴の立場のいないのかとどうしようもなくタールのように粘ついた感情が幾許か溢れてしまう。心理掌握（メンタルアウト）を持つ食蜂であっても自分の感情はままならないのだ。
　そんな色んな感情がないまぜになった表情を浮かべていると

「おー御坂にキラキラ中学生！こんなとこで奇遇じゃねーか！やっぱりお嬢様は違いますなーダイヤノイドでお買い物ですかあ」
悩みの種のバカが現れた。
「アンタどうして…」
「か、上条さん！いったい全体何がどうしてこんな高級ショッピング街にあなたが現れたりするのかしら？出会えたのは嬉しいけれどそれはそれとして、もうちょっと前兆みたいなものが欲しいんだゾ？というかキラキラ中学生って私のことですかあ？それはちょっとどうかなって…」
御坂の疑問を遮り蜂蜜色の少女は自身の動揺を悟らせぬようにまくしたてるが、それが逆効果だと気づけない普段の彼女であればありえないような混乱を露呈させる。
「ありゃ？気に食わなかったか？お前の髪の色とか持ってる雰囲気がゴージャスだな思って、これしかないって上条さんは思ったんです」
「あんた、私のビリビリといいあだ名のセンスが壊滅的ね…」
「嫌ってわけじゃないんですよお？でもそのもうちょっと手心というか…あらあらあら？でもあなたは髪の色がキラキラしてるって思ってくれてるのよねえ、えへへ」
「理解者、この小娘が喜んでるのはあくまで特例中の特例だぞ？理解者の私が聞いても貴様のセンスは最悪に近い。てかなんでこいつ喜んでるんだ？怖っ」
放電してるからビリビリ、容姿や装飾品に金色が多いからキラキラ。
御坂やオティヌスの言うように客観的に見て上条当麻の言語センスは下の下。どう好意的に見ても中学生女子に付けるそれではないのだが、キラキラと呼ばれて喜ぶ食蜂。
これには一つのわけがある。
「あなたの記憶・認識力もちょっとずつ良くなってきてるのね」
「え？なんのことだ？」
「ううん、なんでもないのよお。いつものように忘れなさいな」
２年前の夏に上条当麻の脳は一つの瑕疵を帯びた。

ある事件で受けた傷の治療行為として食蜂操祈が行使した能力の余波により、脳細胞は押しつぶされ彼は「食蜂操祈」に関する記憶を失い、また彼女に対する認識・記憶の阻害といった後遺症を残した。

そしてその一年後に再び上条と食蜂の運命は交差し、数多の奇跡と奇蹟と軌跡を経て上条当麻の脳は現在の医療技術ではありえないような回復を遂げたのであった。

それが認識と記憶の一部回復。上条当麻は以前のように視線を切らしただけでキラキラ中学生に対し初対面のような態度をとることはなくなった。これは飛躍的な進歩といえるであろう

それでも取り戻せなかったこともある

「キラキラってあだ名は嫌いじゃないわあ、それでも覚えていて欲しい。私の名前は食蜂。食蜂操祈。忘れないでね」

「ああ食蜂か、今度からはそう呼ぶようにするよ」

何度繰り返したやり取りだろうか？恐らく今度もこの約束は果たされないのであろう。

上条当麻は奇跡的な予後を見せているがそれでもいまだに食蜂操祈と目の前のキラキラ少女を関連付けては覚えられない。2年前の記憶に至っては思い出す気配すら見えない。それでも

「うん。ありがとう。きっと…いつかきっとそうしてね」

それでも彼女は奇跡を諦めない。

挫折は何度もあった。全てを諦め記憶的な死を望んたこともあった。ウィンザー城では安易な希望に飛びついてしまったことがあった。

それでもそのたびに彼女は立ち上がった。そして彼女は挑み続ける。不条理だと嘆くだけの悲劇のヒロインはもう必要ない…またいつか上条当麻が自分を思い出し自分の名前を呼んでくれるその日まで

「あのー私もいるんだけどなー」

「おい茶髪の小娘、こういうときに割って入るのはいい女のやることじゃないのさ」

つまらないものですが　そのよん

「で、あんたこんなとこで何してんのよ？」
　良い雰囲気を邪魔するのは野暮天だと魔神オティヌスに説かれ、しばらく様子を見守っていたがしびれをきらして至極当然の疑問を口にする御坂。
　食蜂と同じやり取りしたときとは意味が違う。
「何ってそりゃ買い物に決まってるじゃないですか、御坂さん。他にここで何をすればいいって言うんだよ。まったく聡明なお前らしくもない質問じゃないですかね～」
「へえー、あんたがこのダイヤノイド下層階でお買い物ねえ。あのあんたが」
　ダウトである。
　なぜなら貧乏男子学生、ましてや特売価格の卵パックを買うのに一切の労を惜しまないあの上条当麻がブランド品を買うなんて不自然極まりない。
　御坂は目当ての獲物の手負いを確認した肉食獣のように凶悪に笑い、口の中の氷をガリッと砕き質問を続ける。
「ああそうなんだ、そういうこともあるかもしれないわね。あんたが高級ブランド品に興味あるなんて知らなかったわ」
「そそそ、そうなんですよ御坂さん。こう見えてまだまだ謎が男なんでございますよ、上条さんは。一朝一夕で分かったように思われちゃ困るってもんですよ」
「ちょっと～御坂さんったらそんな突然尋問力発揮してどうしたっていうのよ？そんな怖い顔してたら渡せる指輪も渡せなくなっちゃうんだゾ？」
「ゆ、指輪？何の話だ」
「なんでもにゃい！なんでもにゃいから！こら食蜂！あんた話をかき混ぜるんじゃないわよ」
「はーい、怖い怖い。ねえ上条さん？あなたは今何が一番欲しいかしら？ほらほらとにかくこっちに座ってじっくり私に聞かせて欲しい

んだゾ☆」
　そういうと食蜂は店内で立ちっぱなしの上条の腕を取り、御坂と食蜂の座るテーブル。いや正しくは自分の隣の席に引っ張り込んだ。
　自分の質問の調子を崩され、拍子抜けした顔を一瞬したかと思うと子供のように頬を膨らませる。
「あーはいはい、もういいわ。なんだか私が馬鹿みたいじゃない。食べかけで悪いけどもし良かったらポテトフライ食べる？この店は食蜂おススメで無農薬無除草剤の有機栽培野菜と天然塩使ってんだって？私には違いわかんないけど」
「御坂さんは添加物てんこ盛りのジャンクフード大好きですもんねえ。まあ何食べるかなんて所詮好みの問題だけどお。あ、上条さん良かったらこのアイスティーどうぞ。まだ口を付けてないから残念だけど間接キッスにはなったりしないわあ」
「ぶふっ！食蜂あんた何言ってんのよ！そ、そんなか、間接き、キスだなんて！あんたにはその羞恥心ってものが無いのかしら！」
「あらあらあら？御坂さんったらほんとお子ちゃまなんだゾ？間接キスくらいで照れちゃって」
　お嬢様二人がきゃいきゃいと口論してる間に頂戴した品をありがたく食す上条とオティヌス。
　一時期は生の豚肉を齧るような食生活だった上条家メンバーにとってハイクラスな喫茶店の軽食なんて滅多に食べれるものではないので、食べかけだろうとなんだろうと関係ないのだ。
「フム…やはり厳選されたフライドポテトは違うな。おい人間、店にモルトビネガーがないか聞いてくれないだろうか？」
「オティヌス、せっかくカリカリホクホクに揚げて貰ってる品にお酢をぶっかけるのはどうかと思うんだ…インデックスもお前もあの食い方大好きだけどさぁ…あ、このお茶も美味しい」
「いや別に好きって訳じゃないし物凄く美味しいわけじゃないんだ…なんというか落ち着くというか、かけないとそわそわするというか」
「別に美味しくはないのかよ…ケチャップでいいじゃん」
「ああ別に美味しいわけじゃない。米酢なんて目じゃないくらい強烈

な酸味だ、ぶっちゃけ微妙な味もなにもあったもんじゃない。魚のフライなんかにもよく使うが南蛮漬みたいな感覚で食べたら痛い目を見るぞ」

西・北欧諸国で食される普遍的な食文化を一通り腐したら、上条は隣でしなだれかかるキラキラ中学生の質問が急に気になってくる。それ以上に腕に擦り付けられる双丘の柔らかさが気になって仕方ない。

「お、お壌せう？あなた様の主張強めの御胸がわたくしめの腕にですね…」

「あらあ？上条さんも御坂さんと同じで初心なんだからあ。わたしたちはキスした仲なんだしおっぱいぐらい気にしなくたっていいんだゾ？」

「あ〝あ〝あ〝あ〝？いまんなんつった、食蜂？その返答次第ではあんたの身体が電流イライラ棒と化すから慎重に言葉を選びなさい」

「え？嘘だろおい！過去の自分何やってんだよ！あーくそ今日ほど記憶失ったことを悔しく思ったのは初めてだぞ！上条さんは初めてのチューの記憶すら手に入れられないって言うんですかね??あー不幸だー！」

食蜂が超ド級の爆弾が投下すると同時に放たれた紫電が小洒落たインテリアで彩られた店内をクモの巣のように駆け回り、鬼神のような形相で食蜂に事の正否を問いただす御坂。

当事者の一人である上条は上条で自分の初チューの体験の記憶のロストに頭を抱えている。

「さーて嘘かしら？本当かしら？どちらにしたって私の心理掌握があれば事の正否なんて無関係に捻じ曲げることが出来るんだゾ？……なんちゃってねえ」

「しょ、食蜂。ほーら私はもう怒ってないから本当の事を言うのよ？いやいや私全然怒ってないし起こる理由もないしそもそもアンタとあの馬鹿がきききき、キスしようが私には全然全くこれっぽちも関わり合いがないことじゃない？だから安心して欲しいの？ほら恥ずかしがらずに真実を言ってごらんなさい！私にだけでも」

「御坂さん…あれだけ盛大に電撃飛ばしておいてその言い訳は苦しいと思うわあ？」
「そう思うならさっさと本当のこと言いなさいよ！ああもう羨ましいったらありゃしない‼ごほごほっ！…うー喉痛い」
電撃の次は店内中に響き渡りそうな大ボリュームの魂の叫び。
しかし精神に身体が耐え切れなかったのだろうか？電撃姫の喉は絞り出した魂によって嗄れてしまい、渇いた咳を誘発させるばかり。
それに見かねた上条当麻は御坂に
「御坂おまえいくらなんでもはしゃぎすぎだぞ？ほらちょっとこれ飲んで落ち着け？」
「ううう、ありがとう。うーん美味しいアイスティーね、私もこの茶葉使ってみようかしら…って、うにゃにゃ⁉あんたこのアイスティーどっから取り出したの？食蜂の？」
「食蜂が誰かはよく分からないがそこのキラキラ中学生が俺に飲んでいいって渡してくれたアイスティーだけど？」
「あーやっぱり駄目みたいなのねえ。御坂さん、そのアイスティー上条さんの飲みかけよ？」
「ふぇ？あああああああああああああああああああああ」
「おい御坂？御坂？大丈夫か？おい御坂？」
「放っておきなさあい、どうせちょっとしたら正気を取り戻すから」
食蜂の言葉が耳を通り脳が認識するまでの数瞬の空白の後に、ゆでだこのように肌を紅潮させた御坂美琴は奇声の後にぶっ壊れた。

それから数分後、うわごとのように同じ言葉を繰り返す茶髪の短髪少女
新しく頼んだコーヒーに砂糖もミルクも入れてないのにさっきからスプーンで機械的にかき混ぜている様は一種の迫力すら醸し出していた。
「間接キス…間接キス…うへへへ」
「薄気味悪いわあ、ほら御坂さんしっかりするんだゾ？今のあなた、と

んでもなく乙女力の低い顔してるわよお？」
「おい御坂、本当に大丈夫なのか？知り合いの医者に見せた方が…」
「そんなことしたら本当にこの子立ち直れなくなっちゃうからやめてあげて欲しいんだゾ？」
　いくらなんでも鈍感すぎないか？このツンツン頭と想い人の鈍さを再度噛みしめると共に学友にして天敵を揺さぶってピンク空間から回帰させようとするキラキラ中学生。
　そんな彼女に上条は唐突に
「手帳」
「なになに？突然どうしたのかしらあ？」
「いやさっきお前聞いたじゃないか、今何が欲しいかって…その答え」
「あらあ？この科学の街で随分とクラシックなものを。良ければ理由を聞かせてもらってもいいかしらあ？」
　ＰＣや携帯端末でスケジュール管理が出来る現在では手帳の需要は著しく下がっている。
　ましてやあの上条当麻が敢えて欲しい物に上げるとは食蜂も全く想定していなかった。
「ほら、いつか言ったと思うんだけど俺って記憶ないじゃないか？俺にはもうわからないけどそれで迷惑かけた人や悲しませちゃった人がたくさんいると思うんだ。それに医者からも言われたんだけど今後良くなるのかのかそれとも悪くなるのか分からないって…だから毎日自分で書き留めておきたいんだよ。家族のこと友達の事、御坂やお前の事。それさえあったら今度忘れちゃっても思い出せるだろ？お前らとの大事な思い出を…」
　この少年はいつもこうなのだ。
　自分の事より他人のため。自分の不幸より他人の悲劇に涙を流して、その悲劇に抗う為に血を流す。
　なんて損な生き方なのだろうか…その生き方はとても尊いのかもしれないが、あまりにも悲しすぎる。
　だからといって彼はこの生き方を曲げることは決してないのだろう。

だから食蜂はこの少年の生き方を否定させない為に寄り添う、力を貸すと決めている。彼にだってそれくらいの幸福はあっていいはずなのだ。

だから彼女は彼にこう伝える。何度忘れられても。

「馬鹿ねえ…そんなことがあってもきっと私が思い出させてあげるわよ…絶対の絶対よ？」

「そっか、ありがとな…」

不幸な少年はそのちょっとした幸福に微笑んだ。

「上条さん、この後暇かしら？折角会えたんだし私と御坂さんとちょっとこの後ショッピングでもどう？その時にとびっきりの手帳を選びましょうよ、私からの進級お祝いのプレゼントにさせて欲しい？ほら御坂さんいい加減呆けてないでしっかりするのよ！」

いい加減にしろとばかりに御坂の頭をはたいて意識を覚醒さる食蜂

心理掌握にしてはなんとも原始的な気付け方法だったが効果は抜群だったようで御坂は現実世界にカムバックしてきた。

「ふえ？アレ？ここどこかしら？黒子や佐天さんや初春と買い物で」

「ほらほら、今から上条さんの進級お祝い買いに行くわよ？」

「いや流石に年下の女の子からそんなお祝いなんて貰えねえよ、上条さんのプライドがですねえ」

「そんなくだらないプライドは今日はそのへんに置いていきなさい。さあ行くわよ」

その時であった。喫茶店の扉から桜色の髪に白いニットとデニムのパンツを履いたモデル体型の少女が入ってきて店内をくまなく見渡している。何かを探しているようであった。

そして何かに気付いたのか上条たちのテーブルに歩み寄る。

「当麻先輩、こんなとこにいたんですね？あいつらの買い物ももうすぐ終わりそうなんで迎えに来ました。やっぱり女の子の買い物に付き合うのは退屈でしたよね？あれ当麻先輩口元にケチャップが」

突然現れて上条当麻と親しげに話しかける長身の少女に御坂は

「あんた一体何者かしら？」

「御坂、それについては俺はあとでじっくり詳しく話そうと思うから
この場はですね…」
「あーあ、もうだらしないんだから。ほら、じっとしておいてくださ
い」
八重桜は上条の口元にゆっくり顔を近づけて、ケチャップを舐めと
る
「「ふぇ？ああああああああああああああああああああ」」
「これで良し！あれ、そこのお二人は泡吹いて突然どうしたんですか
？」
今度は御坂と食蜂が揃ってぶっ倒れた。

ガールズミーツガールズ

「痛たたた…僕が何したって言うんだい？そりゃちょっと人前で大胆だったかもしれないけど、なにもゲンコツすることないと思うんだ？」

名前の通り桜色の少女は大人びた容姿には似つかわしくもなく、親から手痛い躾を見舞われた幼子のように目尻に雫を溜め、すらりとのびた両の手で形のいい頭を天頂を撫でさすっていた。

「八重、お前は馬鹿ですか？人前だからとか人前じゃないからとかそういう問題じゃねーから！何をトチ狂ってやがるんですかね？お父さん、君はそういう子じゃないと思ってましたよ？」

両の腕を組み、体重をかければその分沈み込んでしまいそうなクッション素材のイスにふんぞり返って怒り心頭の上条パパ。

外見年齢１３～１４歳のシスターと美少女フィギュアと同棲生活してる奴が倫理観を語る滑稽さは横に置いて、絶賛お説教中である。

「ジョークじゃないですか、ジョーク！だいたいこんなの海外じゃ当たり前ですよ？」

「嘘つくんじゃございません！上条さんは去年一年でいろんな国どころか宇宙空間まで行ったことあるけど、そんな嬉し恥ずかしな慣習の文化圏見た事ねーぞ？」

「なんだい当麻先輩、嬉しかったんならもう一回してあげようか？」

「反省してねーならもう一発いっとくか？」

「嘘！ごめんなさいです！僕が悪かったよ」

いたずらっぽい八重桜の返答に右の拳を振り上げ応答すると、藪蛇と思ったのか平身低頭する八重。

怒られているときにおふざけはよろしくない。

「で、あんたそいつはいったい誰なのよ？」

「そうねえ、お説教の前に紹介が先じゃないかしら」

喫茶店を出ようとした矢先のトラブルで元の席にUターンする羽目になった事に少々、というかだいぶ頭にキてるであろうお嬢様が二人。

二人とも自覚は無いのであろうがトントンと机を人差し指で指で小突いて、時間を経るごとそれがワルツからロッキンへとテンポを加速させていた。
「ああえええと、この子はだな…」
「年上に自己紹介して欲しかったら自分からが礼儀じゃないのかな？レベル５のお嬢様方」
上条の言葉を遮ると、先刻まで柔和で人懐こかった八重の表情と声色がまるで剃刀のように鋭く冷たいモノへと変貌する。
いやこれこそが暗部で今日この時まで生きてきた八重桜の真の顔なのかもしれない。
「ご高名な超電磁砲と心理掌握、勿論僕みたいな世間知らずですら君ら二人の事はかねがね伺ってはいるけどそれはそれ。もしかして常盤台はそんな当たり前の礼節も教えていないのかい？それとも非常識なのはあんたたちだけ？」
「おい、ちょっと八重さん？いきなりお前どうしちまったんですかねえ！」
怜悧な美貌とある意味マッチした相手を火傷させてしまうほど冷え切った態度に常盤台の電撃姫と女王は一つ小さく息を吐き出すと
「悪かったわね…ってそうじゃなくて…ごめんなさい。前も似たような事で年上に怒られたことあったっけ。執着してないつもりだったけどやっぱりどこかでレベル５ってブランドに奢ってる気持ちがあったのかもしれませんね。私の名前は御坂、御坂美琴」
「うーん私は上条さん以外の人間に敬意なんて払うつもりはないけどお～でもわざわざ相手に不快力を与えるのも本意ではないしい。そうねえ降参ってことで許してもらえるかしらあ？私は食蜂操祈。あなたが私と上条さんにとって有害な人間になったりしない事を祈るわあ」
伏し目がちに自分の内に存在するかもしれない慢心への戒めと謝罪を口にし頭を下げる御坂と両手を軽く上げ自分の非礼を認めつつも傲岸な態度を堅持する食蜂。
両者のスタンスに違いはあるものの謝罪と自己紹介済ませた。

「で、八重?この二人は謝ったわけなんだが…」
「そうですねえ色々言いたいことはありますが今日のところはこの辺で許してやるとしますか」
そう言うと勝者の威厳を見せてやると言わんばかりに形の良い胸をこれでもかとのけぞらせる桜色の少女。
上条は湾曲しきった少女の頭を軽くはたくと少女は態勢を後ろへ崩し、見麗しい女子高生が世間様にお見せしてはいけないような格好になってしまう。
「いつつ…当麻先輩!叩くなら叩くって言ってくれなきゃ困るよ。殴られる方にも準備ってものが…」
「あのなあ八重、年上だって理由で相手の襟を正させたんならお前だって年上としての懐を見せてやってもいいんじゃないか?御坂たちだってちゃんとお前に頭下げただろ?」
「嫌です」
八重は大人びた容姿に似つかわしくもなく拗ねた子供のように口をとがらせ、顔をあさっての方向に向け注文したアイスコーヒーを一気に飲み干す

「おい八重!」
「嫌だったら嫌です!」
「無駄ですよ~上条さん」
蜂蜜色の少女は掲げていた両手をゆるりとおろし、薔薇のつぼみのような唇で閉じられた口を半月に裂いた。
「うーんそうよねえ。私だって怒っちゃうかもしれないわあ。自分の事ならともかく上条さんに『あんた』なんていうような失礼力、というより親近力強めの娘がいたら」
「ブフゥゥゥゥゥゥ!げほっげほっ!いやそれ、その違っ!」
八重桜は飲んでいたアイスコーヒーを盛大に吹き出し、コーヒーやらなんやら色んな液体が顔から出て、言葉が言葉になっていない。なんかもう台無しであった。
そう八重桜は何も自己紹介の順序や長幼の序の礼節なんて事に

怒っているわけではない。そんなことはどうでもいい。いや、そもそも怒ってすらいなかった。
　つまりはもっと単純で原始的な感情、嫉妬である。
「図星って事で良かったみたいねえ」
「食蜂、あんたまた能力で？人の心を」
「何を言ってるのかしらあ…こんなこと心理掌握に頼るような事じゃないわ。私にとっては身近過ぎて推察するまでもない事よ」
「…どういうことよ？」
　御坂の言葉をさらりと躱してちょっとだけ悲しそうな顔をしたかと思うと、食蜂は品の良いレースのハンカチをいまだに咳の止まらない八重に差し出す。
「ほらあ、これを使いなさい。エスコートするレディーの顔がそんなだと恥をかくのは上条さんなんだゾ？それと御坂さんは別に上条さんとはまだ何でもないわ、保証する。そうよ何かあって溜まるもんですか！このバーバリアンが口調が荒っぽいのはただの性分だっての」
「そんな僕は別にその…」
「ハイハイ、こっちはもうツンデレにはお腹いっぱいなんだからあ」
　赤面しながら否定の言葉を口にしても全く説得力がないのだと、何故ツンデレという生き物は理解しないのだろうか？半ばあきれた心境で新しい同じ穴のムジナいや恋敵をぼんやりと観察する。
「なあ御坂、結局これはどういう事なんですかね？」
「あ、あんたはそんなの知らなくていいんだから！それよりも八重さん？だっけ？あんたがさっさと紹介してくれないから悪いのよ！ていうか食蜂！バーバリアンってあたしのことよね…やっぱ一回殺すわ！あんただけは！」
　こっちはこっちで本当にこいつらはもう…。
　食蜂は自分に心理掌握を掛けてしまいたくなる欲望を抑え込み頭を抱えているとやっと落ち着いた八重が
「うん、もう大丈夫ありがとう食蜂さん。ハンカチは洗って返すね」
「良いわよ、別に。それにあなたが年上なんだから呼び捨てで構わないわ」

「そう？操祈ありがとね」
「ちょっと！そっちの名前で呼んでいいなんて言ってないわよお！」
「僕は八重桜。高校一年生で当麻先輩の下宿先に居候してるんだ。操祈も今度良かったら遊びにおいでよ…あれどうしちゃったの？ねえ？」
　手元にリモコンが無かったのは幸いだった、反射的に心理掌握を使ってしまっていたかもしれない。
　食蜂の胡乱な意識と薄れゆく思考力は八重桜の言葉をリフレインさせていた。
　強すぎる衝撃はいつだって待ったなしで自分へやってくる。
「ご、ゴールド…ゆ、友人として言わせて貰いますけど上条先輩はそんなサバ缶食べないと思いますよ」
「弓箭も上条も結局分かってないって訳よ！サバ缶の可能性をもっと信じる訳よ！だから嫌っていうほどというか蕁麻疹が出るまで上条に食べさせる！」
「センぱイに迷惑かけンなよ、この青魚女。サバ缶シチューとか作ったらせっかく買った紅茶の臭イが台無しになる」
「まさか弓箭との胸部装甲戦力差がこんなにもあるなんて…一緒に服選びなんてするんじゃなかったです…先輩はやっぱり貧乳はお嫌いなのでしょうか？」
　しかも群れでやってくる。

決意

「というわけなんですよ、はい」
　後輩兼同級生達×５と常盤台レベル５×２の邂逅で、一悶着があったりなかったり上条の右手が動員される羽目になったのだが、上条と遅れて合流してきた黒子たちの必死の制止によりなんとか両者を引き剥がし。
　自身とその後輩たちの現状について、怒り狂うお嬢様たちに説明する留年生（仮）上条当麻。
「ちょっと！なんかずいぶん端折られたような気がするんだけど！」
「あらあ？御坂さん野暮なことはいいっこなしなんだゾ。それにしても…」
　食蜂は怪訝な視線で対面に座る５人の少女を一瞥すると
「元暗部とはいえ女子高生５人を男子寮に放り込むってのも随分乱暴な話よねえ。しかも八重桜にいたってはあなたと同居……まったく新統括理事長はどうかしちゃってるんじゃないのかしら？」
「あん？あの一方通行がどうかしてるってのは昔からじゃない。シスターズをレベル６シフト計画を名分に１万人以上殺したようなやつよ」
「それについては御坂さんに全く同意見なんだけどお…ここまでメリットが無いような真似をする男だったかしらって意味よ」
　酷く物騒な話を織り交ぜつつ人指指を眉間に押し付け可愛らしく小首をかしげる食蜂に揉み手の上目使いでお伺いを立てる
「えへへ、そういうわけでしてですね。ええ上条さんはこいつらの新生活を快適に送らせるためにお買い物に来たわけでしてね、やましい事とか一切無いわけですよ。それじゃこの辺で我々はお暇させてもらうでげすね？」
「先輩。先輩は何もやましい事をされていないのでしたらそんなにへこへこされる必要もないのではないでしょうか？」
「こら舞殿！せっかく上条さんがこの場を穏便に収めようとしてんだ！大人しくしてろ！大体お前等と御坂たちは喧嘩っぱや過ぎるわ！

俺の右手だけじゃ対応しきれねえんだよ！いらない事言うんじゃありません！って…あれ…」
　ちゃっかり上条の隣に陣取っていた舞殿星見の言葉でいらぬトラブルを引き起こしかねないと判断した上条は彼女の口を押えよと手を伸ばしたものの、神のいたずらかはたまた万有引力の乱れか勢い余ってその異能を破壊する右手の行方は狂い舞殿の慎ましやかな胸板に
「ひゃっ！先輩は私のどこ触ってるんですか！馬鹿なんですか！」
「ああもう不幸だ…」
「不幸ってなんなんですか…私の胸はそんなに忌むべきものなんですか……御答えになってくださいな？」
　上条の胸倉を鷲掴んでグワングワンと新手の健康器具のように揺らす舞殿。
　半べそこそかいているがまんざらでもなさそうに見えたのは上条の見た胡蝶の夢に違いない。
「御坂さんも照れ隠しは電撃を飛ばすんじゃなくてえ、あれくらいマイルドにやらなきゃ駄目じゃないいかしらあ？」
「うっさい、私のはそういうんじゃないから！つーかこんな説明じゃ納得が全然いかない。あの一方通行がわざわざ莫大な人員と資金を投入して実行したオペレーション＝ハンドカフスをなんで今さら覆すようなことすんのよ？」
　目の前の馬鹿騒ぎを余所に御坂は上条が説明によって分かった情報をもう一度吟味しだす。
「さっき上条さんが言っていたように暗部解体によって失われた利権、防諜・治安上の優位の回復じゃあ納得できないのかしらあ？」
「ノーね。それじゃあ辻褄が合わない。食蜂もさっき言ったように一方通行は狂人だけどそこまで無意味な事はやらないわ。オペレーション＝ハンドカフス実行後の損益を織り込まずに行う馬鹿じゃない」
「それもそうねえ…じゃあ人道上の観点から未成年者の長期拘留を嫌って…とか？」

ずいと身を乗り出し二人の会話へ割り込むように弓箭はそれを否定する。
人見知りをする彼女には非常に珍しい事であるのだが、それでもこの話題は無視出来なかったのであろう
「ご冗談。そ、それこそありえませんよ。お、お二人もあの計画で暗部、警備員両サイドにどれだけの血が流れたかご存知なのでは？ああ、あれだけのことをやっておいて今さら未成年だから学校に通わせて更生を狙うなんてお優しい感性をあの化け物がお持ちになっていらっしゃるとは思えませんから、フヒ」
「なるほどねえ。まあ私もあれにそんな感情があるなんて思ってはないわあ」
「そ、そもそも上条先輩に私たちが預けられた意味は何なのでしょうか？い、今となっては嬉しいというか、その恋の予感というか、運命の出会いって想いがあふれ出してですね…計画名『首輪』ってのもな、なんかいやらしいというか、いあやそのへんな事意味じゃなくてですね、なんというかそのうんえへへ」
「ああこのコミュ症スナイパー結局ぶっ壊れちゃったわけよ、長々と初対面の相手と喋るから！」
（こいつもか…）
弓箭が頭のネジがはじけ飛んだのは良いとして確かにそこが鍵になってくるのだろう。
上条当麻…昨年の世界を巻き込んだ数多の大乱。そして常にその中心にいた少年。
（結局またこの馬鹿が血を流して、身を削って、骨をきしませなきゃいけないの？）
きっとこの少年を巡ってまだまだ世界は揺らぐ。軋む。歪む。
その時に自分は彼の隣に立っていられるのだろうか？彼と同じものを見てあげられるのだろうか？
そう考えると御坂の手には自然と力が入り握った掌に爪が食い込み、皮を破る
「お、お姉様…？」

「……」
御坂の露払いを自称する少女はパートナーの異変に気付く。そしてもう一人
「なーにしょぼくれてんだ御坂」
「へ？」
「お前らしくもない。上条さんお前から電撃が飛んでこなくて調子狂っちゃいますよ」
「あんた、私は今そんなこと言ってるんじゃ！つかあんたの事なのよ！もっと真剣に…って！へっ！」
上条は御坂の肩を掴み御坂を自身へ向き直させる
「ありがとうな、俺の為に色々悩んで心配してくれてんだよな。上条さん馬鹿だからそういうの苦手でさ、いつもお前には助けて貰いっぱなしで」
「いや、その、私は別に、そういう、つもりじゃ、なくて、でも」
瞬間湯沸かし機のように自身の頬の火照りが増していくのが分かる御坂は、しどろもどろとまるでいたずらのバレた子供のようにあわてふためく。
「俺には一方通行が何を考えてるか何を俺にやらせたいのかなんて分からない。ひょっとしたらもう一遍アイツと殴り合わなきゃいけないかもしれない。この街を敵にしなきゃいけないかもしれない…それでも俺はやっと表の世界で生きていきたいと思ってる舞殿たちの手助けをしたい」
「うん」
「もしお前が良かったらでいいんだ。もし俺がドン詰まって失敗してどうにもならなくなった時はまた俺に力を貸してくれないか？」
「よ、喜んで。て、ていうかまたいつもみたいに置いてきぼりにしたら許さないわよ！なんかあったら連絡してきなさいよね！」
「うわ、馬鹿ですか！御坂！ホントに電撃飛ばす奴があるか」
統括理事会から押し付けられた厄介事。本来であればこの少年が負う必要など一切ない重荷。
それでも彼はきっとそれを笑って背負うに違いない。御坂が好き

になった上条当麻とはそういう人間なのだ。
ならば、自分は彼の荷を少しでも軽くしたい。彼が傷つかなくて済むような道を模索してあげたい。
これは御坂美琴が背負うべき荷などではない。
なるほどつまりは彼女も同じ。御坂美琴とはそういう人間なのであった。
「あらあらお姉様ったら。殿方に良い役割あげ過ぎちゃいましたかしら？まあいいですわ幸せそうですものお姉様」
「あらあ、白井さんは愛しのお姉様を取られちゃってもいいのかしらあ？」
「その言葉そっくりお返ししますわ、クイーン」

サバカレーをもう一度　その1

喫茶店での長い長い小休止の後、食蜂の提案によりこの後揃ってで買い物をすることとなった。

とはいうもののこの大人数、しかもそれぞれが趣味も嗜好も経済力もてんでバラバラの為に、結局は思い思いの店舗に散らばっていく。

そして我らが心の兄貴上条当麻はお財布事情が一番近しい佐天・初春となんとなく同行している真っ最中。

居並ぶセンス良く並べられた雑貨や衣類、レジャーグッズを手にとっては値札を見てびっくりするというウィンドウショッピングを楽しむこととなったのだが

「ほら見てくださいよ。これなんて私に似合いそうですかね？上条さん」

「いや可愛いとは思うけどよ、なんで春にわざわざスキーウェアなんて見てんだよ佐天」

「やだ上条さん、今学園都市で流行ってるんですよ？屋内型ウインタースポーツ施設って。ってウェアだけで１１万円って、うへーこりゃ駄目ですねえへへ」

「はーそういうもんなんですかね」

マーブル柄のスキーウェアを体に押し当てて、こちらに感想を求めてくる佐天涙子に圧倒されてたじたじになりながら毒にも薬もならないような感想を繰り返す上条当麻。

全部同じようなもんだろ？と舞殿に答えて危うくダイヤノイドの染みと化すところであった数時間前の反省が生きていた。

「あの！上条さん！私も男性の感想とか欲しいんですけど！み、見てもらってもだ、大丈夫ですかね?!」

男性と話すのが緊張してるのか変に大声になってしまっている初春を見て、悪いなと思いながらもその様がおかしくなって笑いをかみ殺しつつ初春の声がする方に行くと

「こ、これなんてどうでしょうかね？上条さん」

そういって見せてくるのは、この少女の年齢と体型にはいささか不

釣り合いな派手で露出度の高い真っ赤で金属やらがジャラジャラ付いたビキニ水着。
　上条当麻はフリーズする。魔術師の仕業ではない。
「えーと…その…」
「へ？どういう事ですか？上条さん」
（これを見せてどういう感想を求めているっていうんですかね、この娘は？うーん君によく似合ってるねなんて言ったらとんだセクハラ高校生じゃねーか！）
　言葉に困り悶々と考えていると救いの神が上条当麻のポケットから小声で呼びかける
「おい、ソフトオンデマンド！その手の映像を見すぎでおかしくなってるんじゃねえのか？女子中学生からエロ水着の感想聞かれるなんてそんな面白おかしいシチュエーションが現実であるわけないだろうが！あの小娘の手元をよく見てみろ」
「オティヌスてめぇ、人をなんつう呼び方で！つかお前と戦う直前で似たような事あったわ！…って手元？」
　初春の手元には可愛らしいワンピースタイプの水着が
「あーうーん、そうね、うん。そういう感じなんだなああハイハイ分かったわ。完全に分かった。上条さん分かってしまいましたよ」
「ふえっ！どうしちゃったんですか？突然」
　つまりはこうである。
　男性と喋るのに慣れていない初春は緊張のあまり上条に感想を聞こうとした本来の水着と手元に会ったスケベ水着を取り違えてしまったというわけである。
　本当にこんなことあるのかどうかなんてどうでもいい、本当に起こってしまったのだから仕方ないのである。
　ネタが割れてしまえばあとは簡単、初春にそれとなく取り違えを伝え本来の水着の感想を伝えてしまえばいい。
「初春さん…あの」
「初春なにそれ！無茶苦茶エッチじゃん！そんなの選んじゃうなんて冒険し過ぎじゃないの！」

「何言ってるんですか?佐天さん…ってはわはわわあああああ」
店内に響き渡るノンデリカシーのオーケストラ。
何の騒ぎかと他の来店客も上条達の方へと視線を向けだし、それに気づいた初春は顔を真っ赤にして思考を停止させた
「おい!佐天何やってんだ!初春さん連れて他の店に行くぞ!」
「ええ~でも私はもうちょっとこの店で見たいものが…」
「うるせー!ほら、ささっと行きますの事よ」
「ああもう、ちょっと待ってくださいってば!上条さん!」
比喩でも何でもなく文字通り逃げるように店を後にし、その店からだいぶ離れたところで上条達は
「酷いですよ!佐天さん!あんな大声であんな…あんなこと言わなくなったっていいじゃないですか?」
「いやー初春も成長したもんだって嬉しくてついね」
「ついね!じゃないですよ!も~もうあの店行けないじゃないですか!まあどっちにしろ高くて買うのは無理なんですけど」
「ほらでもさ上条さんはエロいの喜んでたみたいだし結果オーライじゃない」
突然爆発寸前の爆弾を上条に放り投げてくる佐天
やはりこの彼女にはデリカシーというものは無いようで
「喜んでねえよ!お前はいったい俺をどういう目で見てんだよ!」
「上条さんはウチの初春がエロ水着着ちゃいけないっていうんですか?そんな薄情な人だって言うんですか」
「佐天さん!もうやめてください!余計恥ずかしいですってば!ううう」

◇

それから数十分後、初春は隣を歩く上条に問う
「それはそうと上条さんは私たちと一緒に来て良かったんですか?御坂さんや食蜂さん、あの高校生の方たちと一緒に居た方が良かったんじゃないんですか?いや私はその男性とこういうとこ歩くのって新

鮮で楽しかったんですが」
　いくらか不安そうな顔でこちらを気遣う花飾りの少女に上条の答えは簡潔だ。
「来るなだってさ。」
「へえ？」
　素っ頓狂な声を出す初春。それは彼女が思っても無いような回答だったからだ。
　だって御坂や食蜂からすれば、この少年とデートが出来る願っても無いチャンス。
　あの女子高生たちにとってもそれは同じだろう。
　それを自分たちに上条を預けるというのはなんとなく腑に落ちない。
「御坂と黒子にあのキラキラ中学生もなんか俺に進級祝い買ってくれるみたいで。そんな大層な事じゃないから大丈夫だって言っても聞かなくて…だから自分たちが何を選ぶか見て欲しくないって」
「それはまた難儀というか御坂さん、白井さんらしいというかですね…」
「舞殿たちもなんかそれに向こう張っちゃって、そもそもお前らは新入生で後輩なんだからむしろこっちが買う側だっつうのに上条さんの言う事なんか一切無視ですよ」
「アハハ、それは上条さん慕われてるんですよ」
　なんとも微笑ましい理由で自分たちにお鉢が回ってきたんだなと思い、初春の顔がほころぶ。
　それならば今日一日彼女たちの代理としてこの少年を自分たちが楽しませようと初春は上条の手を取り
「だったら上条さんもみなさんにお返し選ばなきゃですね！ほらあっちの方は比較的お手頃なお店が並んでるって白井さん言ってましたしあっち見てましょう。ほら佐天さんも！」
「ああ、うん…あ、上条さんと初春は先行ってて。私もうちょっとだけまだこっち見たいから」
　そういうと佐天は初春の指差した方とは真逆の方向に足早に駈け

出し、キラキラと光る装飾と廊下のせいだろうか?あっという間に姿が見えなくなってしまった。
「どうしたんでしょうかね?佐天さん」
「さあ?まあまた合流するって言ってたんだから先にあっちの店をチェックしてようぜ、初春さん」
「そうですね!それじゃあ行きましょうか」
　と歩きだした矢先に後ろから馬鹿みたいに明るくて特徴的な声が響いた
「ちょっと待つ訳よ!」

サバカレーをもう一度　その２

背後から掛けられる不意の声の方へ上条は顔を向けると、上条達から後方４～５メートル。
そこに立っていたのはウェーブがかったブランドの長い髪を蓄え、その頭には黒いベレー帽とそれに合わせたように黒を基調としたどこかコスプレじみた制服のテイストの上下で決めたフランス人形のような少女、フレンダ＝セイヴェルンが猫を思わせる大きな瞳を輝かせながら子供のようにこちらに向かって力いっぱい両手を振っていた。
「上条～！ちょっとこっち！このフレンダ様が呼んでるんだから結局ダッシュで来るがいい！」
「初春さん後ろは見ない方がいい…多分関わったら凄いめんどくさい奴に違いない。上条さんの第六感が叫んでる。何も見てない聞こえない。いいですか？」
「ちょっ、ホントに良いんですか？」

周囲の耳目を集めてるのをこれっぽちも気にせず早く来いと、大きな声と身振りでアピールするフレンダに上条と初春は見て見ぬふりを決め込み
「むきーっ！どういうわけよ上条！こんなかわゆい女の子が誘ってるんだから結局何を差し置いても来るのが男の甲斐性ってモンな訳よ！てか無視はやめて！」
「恥ずかしいから大声で呼ぶんじゃねえよ！一体全体なんなんですかね？」
「なんだかんだ言って放っておけないんですよね、付き合いがいいというか上条さんも難儀な性格です」
結局、無視もしきれずフレンダの元にトンボ返りしてしまう上条当麻、それに遅れて付いていく初春飾利。
上条本人が不幸と称して憚らないトラブルの多くは案外この性格に端を発してるのかもしれない。

「好きな子に意地悪したいって気持ちも分からなくはないけど、素直に好意を表してくれた方が結局女の子的には評価高いんだよ？」
「やっぱ無視しときゃ良かったか？」
「ああもう！ごめんってば！はいこれ結局、進級祝い」
そういってフレンダが差し出したのは、贈答用に包装してあるがメンズファッションブランドの袋であった。
それを上条へ押し付けるように渡す。
「いやこんな高いものは流石に貰えないだろ、フレンダ」
「あん？こういう時の遠慮は逆に失礼だって分かんないかなぁ。上条だって逆の立場になって考えてみなよ。アンタが良かれと思って必死になって選んだプレゼントを結局相手が『貰えない』なんて言われたら感上条はどう思うわけよ？」
フレンダは怒るのではなく嗜めるように上条に問う。
確かに遠慮・謙遜は美徳とされるし、それはきっと素晴らしい事なのだろう。
だがそれに重きを置くばかりに時に人は自分を評価してくれる人の想いまで軽んじてはいないだろうか？
そう訴えかけるように。

「…悪かった」
「ノンノン！素直に反省できるのは良い事だけど結局上条はバカな訳よ。私が聞きたいのはそっちじゃなくて」
「だな、ありがとう」
「二重丸！よくできました！」
その言葉を聞くと同時にフレンダの顔はいっぺんにほころぶ。めでたしめでたし
といくほど現実は甘くは無いようで
「ほんとはもっと相手の人となりとか趣味とかじっくり観察してプレゼントを選ぶのがセオリーなんだけど、結局上条の場合はそのクソダサイ私服をどうにするのが急務って訳よ！心配しなくてもサイズは合ってるはずだから。そういうの私見破るのは得意なの、ニヒヒ」

「ああ、クソダサイって言わなきゃいい話で終われたのに、この人余計なひと言付け加えて墓穴掘っちゃうタイプですね…」
「うんプレゼント貰っておいてなんなんですが、素直に喜べないこの感情は何なんですかね？つか、そんなにダサいですかね？上条さんの私服」
世の中には知らなくてもいい事が沢山ある。
知らなきゃ良かった思うことはそれ以上に沢山ある。
それでもそれを実感するのはいつだって、
「あーえーその……で、でも！でもですよ！好きな服を身に着けるのが一番だと思いますよ？」
「クソダサイわけよ」
知った後のことである。

◇

「あいつらはまだまだ選ぶの時間かかりそうだし、結局ダイヤノイドは私の庭みたいなもんだから上条達をエスコートしてやるわけよ！」
そういって憚らないフレンダの先導で、上条と初春は中学生や赤貧高校生でも手が届きそうなダイヤノイド商店区の穴場スポットのいくつかを回る事となる。
「あ、これ可愛い！それにこれならなんとか買えそうかもですね。やっぱ行き慣れてる人は違いますねフレンダさん」
「ここは私の隠し玉！ここの良さが分かる初春ちゃんはなかなかセンス良いわけよ！それに比べて麦野ときたら安っぽいから駄目だなんだって…」
「行き慣れてるも何も、フレンダはここに部屋借りてたもんな」
「あれ上条？私上条にその事喋ったんだっけ？」
なんの気無しに上条が口にしたその言葉にフレンダが反応する。
藪蛇だったかとも思ったが、もう遅い。

「まあ上条も滞空回線使えるんだしバレバレだよね、そりゃ」
金髪の少女がどことなく落胆したような、ちょっとだけ寂しそうな表情でいつものように笑う
(まずったな…)
特別クラスのクラスメイト達に装着が義務付けられた左腕の味気ないデジタル時計。
互いの監視、牽制を目的としているのであろうそれには、時計とは別の機能が付けられ、その一つが滞空回線の一部使用権である。
上条の場合はフレンダ達監視対象よりさらに上位の閲覧権限が持たされており、フレンダの過去を暴くなどたやすい事なのだが、今回に関してはちょっと違う。
そしてフレンダのちょっと寂しそうな笑顔を見て、それを誤解されるのはなんとなく気持ちが悪いと感じたので上条は包み隠さずありのままを伝える。
「大ハズレ。これに関しちゃお前の友人の浜面と加納神華、それに誰かを幸せにしようとしたペテン師が教えてくれたんだよ」
上条は大げさにわざとらしく否定する。
サンジェルマンについては言わなくてもいいのではないかと思ったが、それでもここを誤魔化すのは嘘をつくのと何も変わらない気がした。
「浜面は下僕で友人とはちょっち違うけど！加納ちゃん知ってるの？あいつ元気してた？まだメソメソしてる？」
「ああお前が贈ろうとしてた懐中時計。とっても喜んでたぞ…自分じゃ泣き虫だなんて言ってたが俺が会ったアイツは誰かの為に泣けて、誰かの為に勇気を出せる誰よりも強い奴だったよ」
「そっか…結局アイツ元気してる訳なの…うん？上条？結局、なんで加納ちゃんへの誕生日プレゼントが懐中時計って知ってる訳？まさか……入ったの？もしかして…あの…映像も…み・た？」
しんみりした空気が流れるかと思いきや思いがけぬところで地雷は埋まっていた。
不味いと思った上条は今度こそ口ごもる。

「あれは緊急処置というか…そのですね、いやなかなか可愛かったと思いますよ、あのダンス」
「言わなくていいって訳よ!!!なんでなんで？あの部屋には高度な暗証コードと物理的な防衛処置が……ああ浜面か、くっそ～あいつ！」
「二重丸～」
「結局煩い！乙女の秘密を見るなんてありえない訳よ！変態！ドスケベ！」
　店内でちゃかぽこ取っ組み合いをして、結局初春から煙たげな視線を送られる羽目になった二人なのであった。そして…
「ごめん！上条さん、初春！待ったでしょ？」

サバカレーをもう一度　その3

「分かった！分かったから！忘れるから！いいかげん裸絞めは止めてもらえませんかね、フレンダ？いくらお前の体重が軽くてもキツイんですよこっちは！」
「ダッシャァーーー！本気で締め落とそうとしてんだから当たり前だっつうの！」
　一見フレンダが上条当麻におぶさってるようにしか見えず、世間様の目も気にせずいちゃつくバカップルのような有様なのだが、彼らの言葉の端々から聞き取れる酷く物騒な単語がそれを否定する。
　道行く人々は『俺たちにもこういう時代があったね』、『若いって羨ましいわね』などと見当違いな言葉を口にするが、フレンダが今上条に仕掛けてるのは立派な殺人技。
　しかも彼女はかれこれ3分近くも上条にそれを仕掛けているのであった。
「昔から忘れる忘れるって言ってる奴が実際に忘れた試しなんかないから、物理的に記憶から消し飛ばしてやるって言ってんの！ていうか完全に頸動脈決まってるのに、なんで上条は平気でいられる訳よ？」
「え？脳に酸素が届かないぐらい別にみんな耐えられるだろ？てか胸が背中に当たってる方が上条さん的には気になりますのことよ」
「奇天烈な身体構造してんじゃねーっての！それに結局おっぱいが背中に当たってることとか、伝えなくていい訳よ！」
　ギャグ空間にしたって無茶苦茶じゃねーか、と
　暗部で様々な化け物を葬ってきたフレンダでもゾッとするような事を言い出す少年に一層締める腕に力を入れるのだが
「もういい加減にして下さいよね！」
　争乱や非日常に寛容な学園都市の社会が許しても、柵川中学2年生佐天涙子は許しはしない。
「んもー！ちょっと目を離して帰って来てみれば、なんなんですかこのバカ騒ぎは！初春もなんで黙って見てたのかな？」
「いや～あのお二人の仲間だって思われるのはちょっとお……」

この惨状を見て長く美しく黒い髪を振り乱しガシガシと地団駄を踏む佐天と、可憐で純朴な見た目とは裏腹にさらりと腹黒いことを呟く初春。
佐天の抗議の声を聞き、フレンダはようやく上条の首筋に巻き付け締め上げていた細腕を外し、その美しいウェーブがかったブロンドの髪を払い、なびかせる。
「あんた、何をそんなにカリカリしてるって訳よ？意味わかんないんだけど」
「そんな！別にわたしはカリカリもイライラもしていませんけど…。ただ上条さんも迷惑そうですし、そういうのはやめた方がいいと思います」
「こんなのただじゃれついてるだけだっつうの。結局アンタは上条の彼女って訳？」
…本気の裸締めをじゃれ合いと評するのはいかがなもんでしょうか？
上条はそう思わざる得なかったが、いつもおかしいフレンダより今問題なのは佐天だと思いやんわりと言葉を選んで口を開く。
「フレンダは馬鹿なこと言ってんじゃねーよ、佐天に迷惑だろうが。佐天も心配してくれるのは嬉しいけど、上条さんはあれくらい別にどうってことないのですよ、右腕がもげてもこうして生きてたりすんだから」
「なーんだ、結局彼女でもないのにグチグチ言ってた訳よ。重たい女は嫌われるわよ？」
「なんなんですか？喧嘩売ってるんですか、あなたは！」
「フレンダ、いい加減にしろよ！」
激高する佐天と上条の間をスルリと抜けて、フレンダは何もなかったようにいつものよう笑いながら
「あーあー誰かさんのせいでシラケちゃった。上条、先に帰らせてもらうわ！あとはアンタらで勝手にやるがいい訳よ、ニヒヒ」
上条たちを背を向け歩き出す。
「佐天さん？どうしちゃったんですか、なんか変でしたよ」

「なんか勝手に熱くなっちゃって空気悪くして……ごめんね初春…上条さんも…私ホント何やってるんですかね？みんなの楽しい休日ぶち壊すようなことやって、ごめんなさいホント…ごめん」
　もうとうに見えなくなったフレンダの背中をいつまでも見送りながら、呻くように自己嫌悪を絞り出す少女。
「あの人に…フレンダ…さんに上条さんから後で謝っておいてもらえませんか？」
「それは構わないけど別に佐天だけが悪いわけじゃねーだろ、どう贔屓目に見ても責任は五分五分。あいつの態度にも問題はあったんだから、あいつに謝らせに行くよ」
「ううん、きっと顔を合わせても何を言っていいか分かりませんし。あーあ、おかしいですね。また会った時に言いたかった、言おうとしたことはいっぱいあったはずなんですよ？」
「さ、佐天さん…」
　誰かに聞かせるわけではない佐天涙子からこぼれ出る独白。
「フレンダと友人だったのか？佐天は」
「どうですかね？出会いのきっかけはホントくだらない事で、会ったのもたった2回だし、ひょっとしたら友達なんて思ってるのは私だけで、向こうはそんな仲だなんて思ってくれて無かったのかもしれないです」
　要領を得ない要旨。
　上条には彼女が何を言いたいのかは分からないし、きっとそれは上条が分かっても仕方ない事なのであろう。
　あるいは誰に聞かせても意味のない話だからこそ聞いてほしかったのかもしれない。
「何があったの？なんで連絡してくれかったの、待ってたのに？あの時のサバ料理は作り過ぎて友達と一緒に食べて苦労したんだよ？良かったらまた食事に来れば？…次に会ったときは、そんなことをいっぱいいっぱいお喋りしようと思ってたんですよ」
　佐天涙子の無理やり作った痛々しい笑顔が歪む。
「だから喫茶店で彼女にまた会ったときにとても嬉しかったんです。

でも向こうは私に会ったことすら気づいてなくて、そしたら私なんか無性にイライラして、そんな自分がどうしようなく嫌で…私」
「はぁ……佐天！」
「へ？」
　上条がそう呼びかけると同時、今にも泣きだしそうな彼女の柔らかな両の頬をグニャリとつまむ。
「ひゃ！な、な、何をやってるんですか！上条さん！んもう！」
　不意に頬を掴まれ思わず叫び声を上げる。が、
「泣いてる顔よりもそっちの方がいいぞ。大体お前が泣いてたらフレンダだってどうしていいか分かんねえだろ？」
「な、何を言ってるんですか？」
「どうせ泣くんなら、友人同士の感動の再会で泣いてほしい。上条さんは意外とそういう番組好きなんですよ。実際生で一回見てみたいわけよ」
　佐天は彼の術中にはまったことを知る。
　本当にデリカシーがなくてもっとスマートな涙の止め方は無かったのかと、彼に文句の一つも言いたくなるがそれでも佐天涙子はきっと笑っていた。
「酷いですよ…上条さん、私だって女の子ですよ」
「佐天、俺には実際フレンダがどう思ってるかなんて分からない。ひょっとしたらお前が思ってる通り、フレンダは佐天を友達だなんて思ってないのかもしれない」
　それでも
「でも０％じゃないだろ？だったらちゃんと言いたかった文句、伝えたかった約束を全部あいつに話してみろよ。それに例え通じあっていなかったとしてもフレンダは今こうして生きてるんだよ。だったらもう一回、もう一回最初からやり直してみればいいだろ？きっと失ってしまった幸福よりも未来に繋がってる不幸の方が絶対幸せなんだから」
　記憶を失い、過去失い、もう出会う事が出来なくなってしまった、思い出すことが出来なくなってしまった上条当麻のいつかどこかでい

たかもしれない友人。
　自分みたいな不幸は上条当麻だけで十二分。だから自分勝手でもおせっかいでも目の前の少女にはそんな想いをさせたくないから、上条はいつものように歩き出す。
「だからさっきの約束は無しだ！その代わりと言ったらなんなんだがお前が自分でフレンダと話すための手助けを俺にさせてくれよ」
「で、でも上条さん、あの人の居場所なんて分かるんですか？」
「それが残念なことにな…」
　こんなもの使うまいと思いつつ、早くもこれのお世話になる自分にうんざりしながら上条は自身の左手をちらりと見て佐天達に背を向け歩き出した。

サバカレーをもう一度　その４

ダイヤノイド５０～７０階、いわゆる上層階とよばれるエリア。名のある高級ホテルや安くとも億は下らぬ分譲マンションが軒を連ね、観光・小売に重点が置かれている中層階までとは趣を異にしたプライベートな居住空間。とはいえここを利用するＶＩＰ、とりわけ学園都市の闇…暗部にとってここは、その厳重な防犯体制と単純な硬度で言えば文字通りダイヤに匹敵する堅牢な建築構造、資材で守られた要塞あるいは金庫などの利用で知られている。

そして元統括理事直轄部隊アイテムの構成員であったフランス人形のような少女、フレンダ＝セイヴェルン。彼女も御多分に漏れずそんな理由で購入を決めた一人なのであった。

「はぁ…まずった訳よ」

フレンダがかつて購入した分譲マンションのとある一室。本来は広々としたゆとり空間がウリだったに違いないその部屋はうず高く積まれた箱、箱、箱。荷物のグランドキャニオンの様相を呈したその場所に彼女は頭を抱えながらうずくまっていた。

「あんな中坊に喧嘩売るような真似するとか大人げないにも程がある！……上条にも迷惑掛けちゃったし」

僅か１０分前の自分の行いがフレンダの羞恥心と罪悪感を刺激し、フレンダはその場で駄々っ子のようにその場でジタバタと両手両足を振り回す。

「なんで最初に目が合った時に『お、久しぶりな訳よ！』って言わなかったかな……私。てかてか結局アイツだって声かけてくれてもいいじゃない！気が利かないったらありゃしないッ！友達とせっかく再会したってのになんであんなカリカリする必要があるって訳よ？馬鹿じゃないの？」

自分で言っておきながら、言った後に猛烈な自己嫌悪が込み上げてくる。

「て、結局私が一番の馬鹿だって訳よ。こんなん弓箭がぼっちとかコミュ障だって笑えないじゃん」

こんな責任転嫁も上条や麦野でも傍にがいれば、突っ込みを入れてくれたんだろうか？それとも慰めてくれたのだろうか？と1人自嘲し、フレンダは改めて部屋を見回すと、あちこちに積み上がった箱の配置が自分の記憶とどこか違うことに違和感を覚えるが、先刻の上条との会話を思い出して違和感は即座に解消された。
「ああ、上条と浜面が入ったんだっけ？全く乙女の寝所にずかずかと入り込むなんてあいつらはどうかしてるんじゃないの？ったくもう…結局荒らすだけ荒らして、片付けていかないとかむかつくって訳よ」
ひとしきり文句を言うとフレンダはむくりと立ち上がり、もう渡す予定の無くなった友人たちへの贈り物を元の配置に並べだした。こんな行為に一つの意味も無いと知りながら、それでも乱雑に置かれたそれらを打ち捨てておく気にはどうしてもならなかったのだ。
「お、これは絹旗に渡すつもりだったヤツ！見たい見たいって言ってたから買ってやったけど、結局月面から来襲したナチス残党が三つ首の巨大鮫と戦うって、何をどうしたらこんなイカレた脚本で一本撮ろうと思ったの？どう考えても時間泥棒必至のクソ映画な訳よ！絹旗も絹旗で何でこんなもんに惹かれるんだか。お、こっちは…」
興がのってしまったのであろうか？フレンダは次々と別の箱を開けだす。割と手間がかかる片づけや模様替えをしてる最中に一度は訪れるアレである。
「そうそう！青髪ピアスはなんかアレのやり過ぎと寝不足で最近げっそりしてるって言ってたから、ハブ酒なんて買ってみたんだっけ？女の子の前でデリカシーの欠片も無い奴だった訳よ。」
「にゃはははは、滝壺のプレゼントはジャージってそのままじゃん！結局もうちょっと捻れって訳よ！私！」
「あれ？秋川へは伊達眼鏡買ったんだけ？あ、そうそうあの子、地味な自分変えたいっていっつも愚痴ってたから、じゃあまずは見た目からでもどう？って贈ろうとしたんだったわ…懐かしいなぁ」
箱を開ける度にもう会うこともかなわない友人たちとの思い出が蘇る。

（暗部部隊同士の共食い、アイテムからの離反と麦野の血の制裁。そこから命からがら逃げ延びて地下に潜って足が付かないように野良犬みたいな生活の毎日…オペレーション＝ハンドカフスで拘束された時はああこれで助かるって心底思ったっけ…）

明日自分が生きることで精いっぱいで、友人たちはおろか妹のことすら想いを馳せることが無かった日々。そんな自分が彼女に、佐天に今さら友達面して薄情だなんて罵る資格なんて無いのかもしれない。

それでもである。それでもまた会えたのだ。携帯の番号も消え、友人だなんて言えるような思い出もなくて、数百万人の人々が生活するこの街で細く儚い糸を手繰るようにフレンダ＝セイヴェルンと佐天涙子は再び出会えた。だったら彼女がやるべき事なんだろうか？恥ずかしがって口ごもって素知らぬ顔をすることか？暗部でもお尋ね者になっている自分と一緒に居ても危ないと大人みたいな訳知り顔で友人を諭す事だろうか？

「結局私らしくなかった。そういう訳よ」

言うが早いかフレンダは再度山積みになった箱を漁り出す。恥も外聞もなく。自分と佐天涙子との些細で僅かな思い出を必死に思い出そうとするかのように。

「見～つけたっ！って訳よ」

フレンダが贈答品の山から掘り出したのは手のひらサイズで高さ１５㎝にも満たない小さな小さな箱。

まるで生涯をかけた大冒険の末に探し当てた宝物のようにのように、フレンダは両の手でそれを高々と掲げ、舞踏会のようにその場でクルクルとクルクルと回って…こける。派手にこける。

「ぐえええ、痛い！麦野のゲンコの次ぐらい痛い！って調子に乗り過ぎたわ…えへへ」

側頭部を床で強打し、しばし悶絶するが、それでも彼女はこんな痛みなんかなんでもないと言わんばかりに綺麗に愉快に笑っていた。まるで小さい頃親から誕生日プレゼントを貰った子供のように。

そんな風にしばし感傷に浸っていると室内に電子的な音がなり響く。たしかこの音は玄関の呼び鈴だった…分かるが早いかフレンダ

は跳ね起き、マンションのオーナー権限として各部屋ごとに設けられたダイヤノイド中の防犯システムの操作・チェックが可能な管理室へ急ぐ。
（この部屋の存在は麦野たちにしか知らせてないし…麦野たちアイテムはハンドカフスから逃げ切ったって話だし……私の裏切りへの粛清をまだ諦めてないって訳）
　玄関は厳重に二重扉となっていてダイヤノイドの構造的特徴と相まって、近代兵器を駆使しても抜くのは難しい難攻不落の要塞、ただしその頼もしい謳い文句が麦野のメルトダウナー相手に何分いや何秒持つのかはなはだ疑問。兎にも角にも脱出経路を頭で思い返しつつ足を速める。
　管理室の扉を開けるや否やいるはずのない訪問者の姿を探るため、嫌な冷たい汗が背中を伝うのも構わず、震える手で操作盤を弄り玄関前カメラの映像に切り替えると
「お～い！フレンダ！上条さんですよ！ここを開けてもらえませんかね？」
　おせっかいな馬鹿が一人。
「フレンダ、聞いてるか？」
　上条はご近所迷惑関係なく大声でこの部屋の主に呼びかける。

「フレンダ、俺が言うべき事じゃないなんて分かってるよ。それでも佐天と約束したんだよお前ともう一回会わせるって。あの馬鹿みたいに明るいアイツが泣いてんだよ。お前ともう一度話がしたいって。このままサヨナラなんて嫌だって。頼むよ、ここ開けてアイツと会って欲しいんだ。」
　全くどいつもこいつも本当に馬鹿な訳よ…そう呟くと、フレンダの人差し指が玄関の開錠スイッチを押そうとしたその刹那。
　先ほどよりも遥かに暴力的な音量の警戒アラームが鳴り響く。
　画面映像が自動で切り替わると１０人前後はいるだろうか？品の無い身なりで凶器を振り回す１０人前後の暴徒…恐らくはスキルアウトを映し出すと、彼らが行った罪状、状況が電子音声で読み上げら

れる。ダイヤノイド下層階のブランド品店から金品・現金の窃盗、逃走の為に幾人かへの傷害が行ったそうだ。
「結局この世界は救えない馬鹿が多すぎるって訳よ」
フレンダは酷薄に彼らの行動を吐き捨てる。
なるほど。確かにこの学園都市はいまだ能力の強弱で待遇が天と地ほども変わってしまう凶悪なヒエラルキー社会。ひょっとしたら彼らはその差別によって自身が夢見た未来を閉ざされたのかもしれない、譲れなかった尊厳が踏みにじられたのかもしれない。
「結局だからそれがどうしたのよ?」
それをさも正義の御旗のように掲げて、自分よりもっと弱い誰かの金を奪って、誰かの命を奪う。そんな奴等に社会の誰が同情するというのだろうか?誰が力になろうと手を差し出してくれるって言うのか。
結局のところスキルアウトの命運を断たせてしまったのは、彼らスキルアウト自身の蛮行に他ならない。画面の中の少年少女達はダイヤノイドが雇う私警に警備ロボ、そして駆けつけてきたアンチスキルに徐々に押し込まれていく。
「まあ結局、私もアンタ達と変わらないんだけど…」
フレンダは自分が暗部で行いを思い返し、自嘲めいた笑いを浮かべる。
落ち込みかかった気分を拭い再び画面に視線を向ける
「その上頭まで悪いんじゃほんと救えない。ダイヤノイドの警備システムをきっちり調べないからそんな杜撰な逃走劇になるってつうの。あ～あ、あんな奥に逃げちゃったら結局半包囲されておしまいって訳よ」
そこまで見ると勝負あった。とばかりにフレンダは画面から目を切らした。
こんなもんに夢中になってあんまり待たせるのも悪いと思い、上条を中に入れてやろうとスイッチを手をかける、そして何の気なしにフレンダはもう一度画面に目を向けると
「あっ…」

◇

「あれ～本当にこの場所であってるんだよな。なんだか上条さん心配になってきましたよ。」

佐天涙子たちの元を離れ滞空回線の情報でさっさとフレンダの位置を把握した、そこまでは良かったのだがその場所が問題であった。

サンジェルマンの時とは違い防犯システムが十全に機能しているダイヤノイド上層階に侵入するために、普通の高校生上条当麻だけではいかんともしがたく、ショッピングを楽しんでいた御坂や食蜂に拝み倒して頼み込んでハッキング・洗脳で障害を取り除いて貰いなんとか上層階行きのエレバーターに上条1人をねじ込んだ、そこで待っていたのはまたセキュリティー。

解除の為に御坂に連絡を取ろうにも防犯の一環なのだろうか携帯端末の電波は阻害されていて、かといって今さら下に戻る訳にもいかず八方ふさがりの為、運を天に任せ玄関備え付けのスピーカーに大声を張り上げている次第であった。

「すいません東西新聞です！新聞の勧誘に伺いましてって、俺は馬鹿か…」

自分の行動の稚拙さにうんざりし俯いたその瞬間、あれほど頑なだった玄関は開け放たれ、そしてとんでもない力で上条は部屋に引きずり込まれる、勿論その実行者は

「フレンダ！お前」

「押し込み強盗してたスキルアウトにあの馬鹿…佐天が人質にされてるって訳よ。あいつ毎度毎度トラブルに巻き込まれて何やってんのよ！……上条、お願い！大事な友達が危ないの、あんたの力を私に貸して欲しいってわけよ」

少しも逡巡せずに上条当麻は同級生の頼みにこう答える。

「了解だよ…後輩！」